Dell OpenManage Server Administrator バージョン 6.3 コマンドラインインタフェース ユーザーズガイド

はじめに
omhelp コマンドの使用
omreport：計装サービスを使用したシステム状態の表示
計装サービスを使ったomconfig：コンポーネントの管理
omconfig システムまたは servermodule assetinfo：所有コスト（Cost of Ownership）の編集
ストレージ管理サービスの使用
CLI コマンド結果の使用方法

メモおよび注意

メモ： コンピュータを使いやすくするための重要な情報を説明しています。

注意：注意は、手順に従わない場合は、ハードウェアの損傷やデータの損失の可能性があることを示しています。

本書の内容は予告なく変更されることがあります。
© 2010 すべての著作権は Dell Inc. にあります。

Dell Inc. の書面による許可のない複製は、いかなる形態においても厳重に禁じられています。本書に使用されている商標：Dell™、DELL™ ロゴ、PowerEdge™、および OpenManage™ は、Dell Inc. の商標です。Microsoft®、Windows®、Active Directory®、Hyper-V、MS-DOS® および Windows Server® は、米国およびその他の国における Microsoft Corporation の商標または登録商標です。SUSE™ は米国およびその他の国における Novell, Inc. の登録商標です。Red Hat® および Red Hat Enterprise Linux® は、米国およびその他の国における Red Hat, Inc. の登録商標です。Intel®、Pentium®、および Itanium® は、米国およびその他の国における Intel Corporation の登録商標で、Intel*386*™ は同社の商標です。AMD®、AMD Opteron、AMD-V、および AMD PowerNow! は、Advanced Micro Devices, Inc. の商標です。UNIX® は The Open Group の登録商標です。Rambus® は Rambus, Inc. の登録商標です。

商標または製品の権利を主張する事業体を表すためにその他の商標および社名が使用されていることがあります。それらの商標や会社名は、一切 Dell Inc. に帰属するものではありません。

2010 年 7 月

[目次ページに戻る](#)

omconfig システムまたは servermodule assetinfo: 所有コスト(Cost of Ownership)の編集

Dell OpenManage Server Administrator バージョン 6.3 コマンドラインインタフェース ユーザーズガイド

- 概要
- 取得情報の追加
- 減価償却情報の追加
- 保証延長情報の追加
- リース情報の追加
- メンテナンス情報の追加
- アウトソース情報の追加
- 所有者情報の追加
- サービス契約情報の追加
- サポート情報の追加
- システム情報の追加
- 保証情報の追加

概要

omconfig system assetinfo または **omconfig servermodule assetinfo** コマンドを使うと、システムの所有コスト合計を構成する総括的なパラメータセットの編集が簡単にできます。この項では、**omconfig system assetinfo** または **omconfig servermodule assetinfo**コマンドで報告および設定可能なパラメータについて説明します。

omconfig system assetinfo または**omconfig servermodule assetinfo**コマンドを使って、構成可能なオブジェクトを制御する値を設定することができます。**assetinfo** 設定機能の例にはシステム所有者の設定値、購入金額、有効なリース内容詳細、減価償却方式とレート、システムのロケーション、保証および保証期間の延長、アウトソーシング詳細、およびサービス レベルの 許諾書などがあります。

資産情報を追加するために必要なユーザーレベル

パワーユーザーとシステム管理者が資産情報の追加および編集を実行できます。

表 5-1 omconfig コマンドのシステム可用性

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	適用可能
omconfig	*servermodule*	モジュラーシステム
	mainsystem	モジュラーシステム
	system	非モジュラーシステム
	chassis	非モジュラーシステム

取得情報の追加

「取得」とは、企業によるシステム購入またはリースに関する事実を指します。**omconfig system assetinfo info=acquisition** または **omconfig servermodule assetinfo info=acquisition** コマンドを使って、システムの購入またはリースに関する詳細を追加します。表 5-2 は、コマンドの有効なパラメータを表示します。

表 5-2 omconfig system assetinfo info=acquisition/omconfig servermodule assetinfo info=acquisition

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンド レベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
omconfig					
	system/servermodule				
		assetinfo			
			info=acquisition		
				costcenter=<テキスト>	システムを取得した企業名またはコード。
				expensed=yes | no	システムが特定目的、または研究開発部門や販売部門など、特定部署のための経費とされるかどうか。
				installdate=<*mmddyy*>	システムのインストール日。
				ponum=<*n*>	システム代金支払いを承認した文書番号。
				purchasecost=<*n*>	所有者が支払った システム代金。
				purchasedate=<*mmddyy*>	所有者がシステムを購入した日。
				signauth=<テキスト>	システム購入またはサービス コールの承認者名。
				waybill=<*n*>	受け取った商品の貨物受領書。

取得情報を追加するためのコマンド例

取得パラメータの値を提供するには、次のようなコマンドを入力します。**omconfig system assetinfo info=acquisition** <名前=値のペア 2> または **omconfig servermodule assetinfo info=acquisition** <名前=値のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=acquisition purchasedate=122101
または
omconfig servermodule assetinfo info=acquisition purchasedate=122101
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully. (資産情報は正常に設定されました)。
```

すべての「名前=値」のペア 2 が同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** または **omconfig servermodule assetinfo** コマンドを同時に入力できます。たとえば 、**info=acquisition** に複数のパラメータ値を入力する場合、次の例を構文ガイドとして使用してください。

```
omconfig system assetinfo info=acquisition purchasecost=5000
waybill=123456 installdate=120501 purchasedate=050601 ponum=9999 signauth="John Smith" expensed=yes costcenter=finance
または
omconfig servermodule assetinfo info=acquisition purchasecost=5000
waybill=123456 installdate=120501 purchasedate=050601 ponum=9999 signauth="John Smith" expensed=yes costcenter=finance
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully. (資産情報は正常に設定されました)。
```

減価償却情報の追加

減価償却とは、時間の経過とともに資産の価値を減らしていく計算方法です。たとえば 、5 年間の耐用年数が期待されるシステムの減価償却は 年間 20 パーセントです。**omconfig system assetinfo info=depreciation** または **omconfig servermodule assetinfo info=depreciation** コマンドを使うと、システムの減価償却を計算する方法に関する情報を追加できます。表 5-3 は、コマンド の有効なパラメータを表示しています。

表 5-3 omconfig system assetinfo info=depreciation/omconfig servermodule assetinfo info=depreciation

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
omconfig					
	system/servermodule				
		assetinfo			
			info=depreciation		
				duration=<*n*>	システムが減価償却される年数または月数。
				method=<テキスト>	システムの減価償却計算に使用するステップと仮定。
				percent=<*n*>	資産の価値切り下げまたは減価償却率(百分率)。
				unit=months | years	ユニットは月または年単位です。

減価償却情報を追加するためのコマンド例

減価償却パラメータの値を提供するには、次のようなコマンドを入力します。**omconfig system assetinfo info=depreciation** <名前=値のペア 2> または **omconfig servermodule assetinfo info=depreciation** <名前=値のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=depreciation method=straightline
または
omconfig servermodule assetinfo info=depreciation method=straightline
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully. (資産情報は正常に設定されました)。
```

すべての「名前=値」のペア 2 のパラメータが同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** または **omconfig servermodule assetinfo** コマンドを同時に入力できます。「取得情報を追加するためのコマンド例」の例を参照してください。

保証延長情報の追加

omconfig system extwarranty または **omconfig servermodule extwarranty** コマンドを使うと、保証延長情報に値を割り当てることができます。保証は、 製造元または販売店とシステム購入者との間で取り交わす契約です。保証では、指定した期間または使用範囲内でどのコンポーネントの修理や交換をカバーするかを特定します。保証延長は、当初の保証期限が切れた後に有効になります。保証の値の編集方法に関する詳細は、「保証情報の追加」を参照してください。

表 5-4 は、コマンドの有効なパラメータを表示します。

表 5-4 omconfig system assetinfo info=extwarranty/omconfig servermodule assetinfo info=extwarranty

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
omconfig					
	system/servermodule				
		assetinfo			
			info=extwarranty		
				cost=<コスト>	保証サービスにかかるコスト。
				enddate=<終了日>	保証延長契約の有効期限。
				provider=<プロバイダ>	保証延長サービスを提供する会社。
				startdate=<開始日>	保証延長サービスの開始日。

保証延長情報を追加するためのコマンド例

取得パラメータの値を提供するには、次のようなコマンドを入力します。**omconfig system assetinfo info=extwarranty** <名前=値のペア 2> または **omconfig servermodule assetinfo info=extwarranty** <名前=値のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=extwarranty enddate=012503
```
または
```
omconfig servermodule assetinfo info=extwarranty enddate=012503
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully. (資産情報は正常に設定されました)。
```

すべての「名前=値」のペア 2 のパラメータが同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** または **omconfig servermodule assetinfo** コマンドを同時に入力できます。「取得情報を追加するためのコマンド例」の例を参照してください。

リース情報の追加

リースとは、指定期間中システムの使用料を支払うという契約です。システムの所有権は賃貸人に属します。表 5-5 は、コマンドの有効なパラメータを表示します。

表 5-5 omconfig system assetinfo info=lease/omconfig servermodule assetinfo info=lease

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
omconfig					
	system/servermodule				
		assetinfo			
			info=lease		
				buyout=<金額>	賃貸人からシステムを購入する場合支払う金額。
				lessor=<賃貸人>	システムのリースを提供する会社。
				multischedule=true | false	システム リースのコストが 2 種類以上の料金表によって計算されるかどうか。
				ratefactor=<要素>	リース料の計算に使用する要素。
				value=<残余>	リース終了時のシステムの適正市場価格。

リース情報を追加するためのコマンド例

リース パラメータの値を提供するには、次のようなコマンドを入力します。**omconfig system assetinfo info=lease** <名前=値のペア 2> または **omconfig servermodule assetinfo info=lease** <名前=値のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=lease value=4500
```
または
```
omconfig servermodule assetinfo info=lease value=4500
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully. (資産情報は正常に設定されました)。
```

すべての「名前=値」のペア 2 のパラメータが同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** または **omconfig servermodule assetinfo** コマンドを同時に入力できます。「取得情報を追加するためのコマンド例」の例を参照してください。

メンテナンス情報の追加

メンテナンスとは、システムが正常に稼動し続けるように行う保守作業を指します。表 5-6 は、メンテナンス情報の追加に有効なパラメータを表示しています。

表 5-6 omconfig system assetinfo info=maintenance/omconfig servermodule assetinfo info=maintenance

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
omconfig					
	system/servermodule				
		assetinfo			
			info=maintenance		
				enddate=<終了日>	保証延長契約の有効期限。
				provider=<プロバイダ>	メンテナンス サービスを提供する会社。
				startdate=<開始日>	メンテナンスの開始日。
				restrictions=<文字列>	メンテナンス契約でカバーされない作業。

メンテナンス情報を追加するためのコマンド例

メンテナンス パラメータの値を提供するには、次のようなコマンドを入力します。**omconfig system assetinfo info=maintenance** <名前=値のペア 2> または **omconfig system assetinfo info=maintenance** <名前=値のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=maintenance startdate=012504
```
または
```
omconfig servermodule assetinfo info=maintenance startdate=012504
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully. (資産情報は正常に設定されました)。
```

すべての「名前=値」のペア 2 のパラメータが同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** または **omconfig servermodule assetinfo** コマンドを同時に入力できます。「取得情報を追加するためのコマンド例」の例を参照してください。

アウトソース情報の追加

アウトソースとは、システムの正常運転に必要な保守作業を別の会社に委託することです。表 5-7 は、アウトソース情報を追加するために有効なパラメータを表示しています。

表 5-7 omconfig system assetinfo info=outsource/omconfig servermodule assetinfo info=outsource

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
omconfig					
	system/servermodule				
		assetinfo			
			info=outsource		
				levels=<*n*>	プロバイダが提供するサービスのレベル
				problemcomponent=<コンポーネント>	メンテナンスを必要とするシステム部品。
				providerfee=<プロバイダ料金>	メンテナンス料金。
				servicefee=<サービス料金>	サービス料金。
				signauth=<名前>	サービスの契約者、または承認者。

アウトソース情報を追加するためのコマンド例

アウトソースパラメータの値を提供するには、次のようなコマンドを入力します。**omconfig system assetinfo info=outsource** <名前=値のペア 2> または **omconfig servermodule assetinfo info=outsource** <名前=値のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=outsource providerfee=75
```
または
```
omconfig servermodule assetinfo info=outsource providerfee=75
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully. (資産情報は正常に設定されました)。
```

すべての「名前=値」のペア 2 のパラメータが同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** または **omconfig servermodule assetinfo** コマンドを同時に入力できます。「取得情報を追加するためのコマンド例」の例を参照してください。

所有者情報の追加

所有者はシステムの法的所有権を有する当事者を指します。表 5-8 は、所有者情報の追加に有効なパラメータを表示しています。

表 5-8 omconfig system assetinfo info=owner/omconfig servermodule assetinfo info=owner

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
omconfig					
	system/servermodule				
		assetinfo			
			info=owner		
				insuranceco=<会社>	システムを保証する保険会社名。
				ownername=<ビジネス>	システムを所有する会社名。
				type=owned | leased | rented	ユーザーがシステムを所有しているか、リースか、レンタルかの分類。

所有者情報を追加するためのコマンド例

所有者パラメータの値を提供するには、次のようなコマンドを入力します。**omconfig system assetinfo info=owner** <名前=値のペア 2> または **omconfig servermodule assetinfo info=owner** <名前=値のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=owner type=rented
```
または
```
omconfig servermodule assetinfo info=owner type=rented
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully.（資産情報は正常に設定されました）。
```

すべての「名前=値」のペア 2 のパラメータが同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** または **omconfig servermodule assetinfo** コマンドを同時に入力できます。「取得情報を追加するためのコマンド例」の例を参照してください。

サービス契約情報の追加

サービス契約とは、システムの予防的なメンテナンス作業と修理にかかる手数料を指定する契約です。表 5-9 は、契約情報の追加に有効なパラメータを表示しています。

表 5-9 omconfig system assetinfo info=service/omconfig servermodule assetinfo info=service

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
omconfig					
	system/servermodule				
		assetinfo			
			info=service		
				renewed=true | false	サービス契約が更新されたかどうか。
				type=<文字列>	契約でカーバされるサービスのタイプ
				vendor=<ビジネス>	システムのサービスを提供する企業。

サービス情報を追加するためのコマンド例

サービス ラメータの値を提供するには、次のようなコマンドを入力します。**omconfig system assetinfo info=lease** <名前=値のペア 2> または **omconfig servermodule assetinfo info=lease** <名前=値のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=service vendor=fixsystemco
```
または
```
omconfig servermodule assetinfo info=service vendor=fixsystemco
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully.（資産情報は正常に設定されました）。
```

すべての「名前=値」のペア 2 のパラメータが同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** または **omconfig servermodule assetinfo** コマンドを同時に

入力できます。「取得情報を追加するためのコマンド例」の例を参照してください。

サポート情報の追加

サポートとは、ユーザーがタスクを実行する際、システムの適切な使用に関するガイダンスを必要とする場合に、システムユーザーが利用できるテクニカル サポートを指します。表 5-10 は、サポート情報の追加に有効なパラメータを表示しています。

表 5-10 omconfig system assetinfo info=support/omconfig servermodule assetinfo info=support

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
omconfig					
	system/servermodule				
		assetinfo			
			info=support		
				automaticfix=<プログラム名>	問題を自動的に解決するのに使用するアプリケーション名。
				helpdesk=<テキスト>	電話番号、電子メールアドレス、またはウェブサイトアドレスなどのヘルプデスクまたは連絡先情報
				outsourced=true	false	外部の企業体がテクニカル サポートを提供するか、またはシステム所有者の社員がテクニカル サポートを提供するかの選択。
				type=network	storage	サポートがネットワーク付属のデバイス、またはストレージデバイスに対するものであるかどうか。

サポート情報を追加するためのコマンド例

サポート パラメータの値を提供するには、次のようなコマンドを入力します。**omconfig system assetinfo info=lease** <名前=値のペア 2> または **omconfig servermodule assetinfo info=lease** <名前=値のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=support outsourced=true
```
または
```
omconfig servermodule assetinfo info=support outsourced=true
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully. (資産情報は正常に設定されました)。
```

すべての「名前=値」のペア 2 のパラメータが同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** または **omconfig servermodule assetinfo** コマンドを同時に入力できます。「取得情報を追加するためのコマンド例」の例を参照してください。

システム情報の追加

システム情報には、システムのプライマリユーザー、プライマリユーザーの電話番号、およびシステムの設置場所が含まれます。表 5-11 は、システム情報の追加に有効なパラメーターを表示しています。

表 5-11 omconfig system assetinfo info=system/omconfig servermodule assetinfo info=system

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
omconfig					
	system/servermodule				
		assetinfo			
			info=system		
				location=<テキスト>	システム所在地
				primaryphone=<*n*>	システムのプライマリユーザーの電話番号。
				primaryuser=<ユーザー>	システムのプライマリユーザー。

システム情報を追加するためのコマンド例

システム パラメータの値を提供するには、次のようなコマンドを入力します。**omconfig system assetinfo info=system** <名前=値のペア 2> or **omconfig servermodule assetinfo info=system** <名前=値のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=system location=firstfloor
```
または

```
omconfig servermodule assetinfo info=system location=firstfloor
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully. (資産情報は正常に設定されました)。
```

すべての「名前=値」のペア 2 のパラメータが同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** または **omconfig servermodule assetinfo** コマンドを同時に入力できます。「取得情報を追加するためのコマンド例」の例を参照してください。

保証情報の追加

omconfig system warranty または **omconfig servermodule warranty** コマンドを使うと、保証情報に値を割り当てることができます。保証は、製造元または販売店とシステム購入者との間で取り交わす契約です。保証では、指定した期間または使用範囲内でどのコンポーネントの修理や交換をカバーするかを特定します。保証延長サービス値の編集方法に関する詳細は、「保証延長情報の追加」を参照してください。表 5-12 は、システム情報の追加に有効なパラメータを表示しています。

表 5-12 omconfig system assetinfo info=warranty/omconfig servermodule assetinfo info=warranty

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
omconfig					
	system/servermodule				
		assetinfo			
			info=warranty		
				cost=<コスト>	保証サービスにかかるコスト。
				duration=<期間>	保証を強制する日数または月数。
				enddate=<終了日>	保証サービスの有効期限。
				unit=days | months	期間の単位が日数か月数かの選択。

保証情報を追加するためのコマンド例

保証パラメータの値を提供するには、次のようなコマンドを入力します。**omconfig system assetinfo info=warranty** <名前=値のペア 2> または **omconfig servermodule assetinfo info=warranty** <名前=値のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=warranty unit=days
または
omconfig servermodule assetinfo info=warranty unit=days
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully. (資産情報は正常に設定されました)。
```

すべての「名前=値」のペア 2 のパラメータが同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** または **omconfig servermodule assetinfo** コマンドを同時に入力できます。「取得情報を追加するためのコマンド例」の例を参照してください。

目次ページに戻る

[目次ページに戻る]

計装サービスを使ったomconfig: コンポーネントの管理

Dell OpenManage Server Administrator バージョン 6.3 コマンドラインインタフェース ユーザーズガイド

- omconfig コマンドの概要
- omconfig コマンドのヘルプ
- omconfig about
- omconfig chassis/omconfig mainsystem
- omconfig preferences
- omconfig system/omconfig servermodule

omconfig コマンドを使用すると、警告イベントの定義、警告操作の設定、ログのクリアのほか、システムシャットダウンの設定に使用する値の入力や、その他のシステム管理タスクを実行できます。

omconfig 機能の例には、コマンド、警告、ハードウェアログをクリアする、システムシャットダウンを設定して実行する管理者権限、電流プローブ、ファン、電圧プローブ、温度プローブで警告イベントの値を指定したりデフォルト設定するパワーユーザーおよび管理者権限、イントルージョン、電流プローブ、ファン、電圧プローブおよび温度プローブで警告または障害イベントが発生したときに警告措置を設定するパワーユーザーおよび権利者権限などがあります。

omconfig システムコマンドを使った所有コスト情報（**assetinfo**）の表示と管理方法の詳細については、「omconfig システムまたは servermodule assetinfo: 所有コスト（Cost of Ownership）の編集」を参照してください。

omreport コマンドを使って **omconfig** コマンドの実行に必要な情報を取得しなくてはならない場合が頻繁に発生します。たとえば、温度プローブの警告イベントの最低温度を編集する場合は、設定するプローブのインデックスを知っておく必要があります。そのような場合は、**omreport chassis temps** または **omreport mainsystem temp** コマンドを使用すると、プローブのリストとそのインデックスを表示できます。**omreport** コマンドの使用方法については、「omreport: 計装サービスを使用したシステム状態の表示」を参照してください。

表 4-1 omconfig コマンドのシステム可用性

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	適用可能
omconfig	*servermodule*	モジュラーシステム
	mainsystem	モジュラーシステム
	system	非モジュラーシステム
	chassis	非モジュラーシステム

パラメーター表の規則

コマンドに使えるパラメータをリストにする場合、パラメータはコマンドラインインタフェースに表示される順ではなくアルファベット順に並んでいます。

記号「 | 」はパイプと呼ばれることがあり、 排他的論理和または演算子を表します。たとえば、「有効 | 無効」はコンポーネントや機能を有効または無効にできますが、同時に有効と無効にすることはできません。

---

omconfig コマンドの概要

メモ: 本項では可能な全ての **omconfig** コマンドを一覧表示しますが、システムで使用できるコマンドはシステム構成に依存します。ヘルプを表示したり、またはシステムにインストールされていないコンポーネントのコマンドを実行すると、Server Administrator はコンポーネントまたは機能が システムで見つからない旨のメッセージを発行します。

表 4-2 は**omconfig** コマンドの高レベルな概要です。「コマンドレベル 2」および「コマンドレベル 3」 とタイトルの付いた欄には**omconfig**で使用できる主な引数を一覧表示します。「ユーザー特権が必要」とは、コマンドを実行するのに必要な特権の種類を表し、U=ユーザー、P=パワーユーザー、A=アドミニストレータを表します。「用途」 は **omconfig** を使って実行される操作についての概略です。コマンドの構文と使い方の詳細については、この項で後述します。

表 4-2 omdiag コマンドレベル 1、2 、および 3

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	ユーザー権限必須	用途
omconfig				
	about		U, P, A	Server Administrator プログラムのバージョン番号とプロパティを表示します。
		details=true	U, P, A	インストールされている全ての Server Administrator プログラムの情報を表示します。
	preferences			
		cdvformat	A	カスタムデミリトフォーマット （cdv）のデータフィールドで分けるデミリタを指示します。
		dirservice	A	Microsoft Active Directory サービスを設定します。
		snmp	A	新しい SNMP ルートパスワードを設定します。SNMP Set 操作を設定します。

		useraccess	A	システム管理者レベルの下にいるユーザーが Server Administrator を使用できるかどうかを指定します。
		webserver	A	システム管理者は、Server Administrator ウェブサーバー環境において、ウェブサーバーの暗号化レベルおよび URL の起動ポイントを設定できます。
	system/ servermodule			
		alertaction	P, A	イントルージョン、ファン、温度、電圧、電源装置、メモリ、および冗長の警告またはエラー イベントに対処するのに使用する操作を事前に決定します。
		alertlog	P, A	システム管理者がアラートログを表示できます。
		assetinfo	P, A	減価償却値、リース、メンテナンス、サービス、およびサポートを含むシステムの所有権のコストを入力して編集します。
		cmdlog	P, A	システム管理者がアラートログを表示できます。
		esmlog	P, A	システム管理者が ESM ログを表示できます。
		events	P, A	SNMP トラップを有効または無効にします。
		pedestinations	P, A	警告送信先の IP アドレスを設定します。
		platformevents	A	特定のプラットフォームイベントで行うべきシャットダウン措置があれば指定します。また、プラットフォームイベントのフィルタ警告 生成を有効にしたり無効にします。
		recovery	P, A	システムがハングの状態にあるオペレーティング システムにどう応対するかを事前に決定します。
		shutdown	A	システムをシャットダウンする場合に、システム管理者がいくつかのオプションから選択できるようにします。
		thrmshutdown	A	温度イベントがシステムシャットダウンをトリガする重大度レベルを設定します。
		webserver	A	ウェブ サーバーを開始または停止します。
	chassis/ mainsystem			
		biossetup	A	BIOS が管理する特定のシステム部品の動作を設定します。
		fans	P, A	ファンプローブ警告しきい値をデフォルトで、または値を指定して設定します。 **メモ：** 組み込み型サーバー管理（ESM3）および Dell PowerEdge *x*8*xx* システムでは、しきい値を変更することはできません。
		frontpanel	A	システムの **電源** ボタン、**非マスク割り込み**（NMI）ボタン、セキュリティアクセス、および LCD 表示を設定します。
		info	P, A	管理タグやシャーシ名の初期値を設定したり、値を編集したりできます。
		leds	P, A	シャーシ フォールト LED や シャーシ識別 LED の点滅時を指定して、システム ハード ドライブの LED をクリアできるようにします。
		memorymode	A	スペアバンクとミラーリング メモリ モードを有効にしたり無効にしたりするだけでなく、使用するモードも指定します。
		pwrmanagement	P, A	システムの最大電力経済または最適化性能を選択できます。
		pwrmonitoring	P, A	電源消費情報としきい値を設定します。
		remoteaccess	A	リモートアクセス情報を設定します。
		temps	P, A	警告しきい値をデフォルトで、または値を指定して設定します。 **メモ：** ESM3 および PowerEdge *x*8*xx* システムでは、しきい値を変更することはできません。
		volts	P, A	警告しきい値をデフォルトで、または値を指定して設定します。 **メモ：** ESM3 および PowerEdge *x*8*xx* システムでは、しきい値を変更することはできません。
	storage			ストレージ管理サービスの使用 を参照してください。

---

omconfig コマンドのヘルプ

omconfig -? を使って、 **omconfig**に使用できるコマンドの一覧を入手します。

omconfig <コマンドレベル 2>**-?** を使って**バージョン番号**、**シャーシ**、**プリファランス**および**システム**レベル 2 のコマンドについてのヘルプを提供できます。**omconfig system -?** に関する次の情報は、 **omconfig chassis** コマンドのヘルプにも同様に適用できます。

omconfig system -? を使って、 **omconfig system** に使用できるコマンドの一覧を入手します。

omconfig preferences -? を使って、 カスタム区切りフォーマット（cdv）である **cdvformat** のような、**omconfig preferences** に使用できるコマンドリストを取得できます。cvd 用のデリミタリストを表示するには、以下のコマンドをタイプします。

```
omconfig preferences cdvformat -?
```

omconfig system <コマンドレベル 3> **-?** の形式のコマンドを使って、 特定の **omconfig system** コマンドの実行に必要なパラメータを一覧表示します。たとえば、次のコマンドを使って **omconfig system alertaction** と **omconfig system shutdown** に有効なパラメータの一覧を生成します。

```
omconfig system alertaction -?
```

```
omconfig system shutdown -?
```

omconfig system alertaction コマンドを使う場合、いろいろなオプションがあるのですべてのコマンドライン インタフェース (CLI) ヘルプがスクロールしてしまう前に読むことができます。

コマンド出力を 1 画面ごとにスクロールするには、次のように入力します。

```
omconfig system alertaction -?| more
```

上の例では、「**| more**」 があるため、スペースバーを押して CLI ヘルプ出力の次の画面を表示できます。

omconfig system alertaction -? コマンドの全てのヘルプを含んだファイルを作成するには、 次のように入力します。

```
omconfig system alertaction -?-outa alert.txt
```

ここでの **-outa** によって**alert.txt** と呼ばれるファイルにコマンドの出力を向けます。

Microsoft Windows、Red Hat Enterprise Linux、または SUSE LINUX Enterprise Server のオペレーティングシステム上で **alertaction** コマンドについてのヘルプを読むには、以下のように入力します。

```
more alert.txt
```

---

omconfig about

omconfig about コマンドを使って、システムにインストールされているシステム管理アプリケーションの製品名とバージョン番号を確認します。次に **omconfig about** コマンドからの出力を例示します。

```
Product name : Dell OpenManage Server Administrator
Version      : 6.x.x
Copyright    : Copyright (C) Dell Inc. 1995-2009.All rights reserved.
Company      : Dell Inc.
```

Server Administrator 環境に関する詳細については、以下のように入力します。

```
omconfig about details=true
```

Server Administrator には多くのサービスが含まれており、それぞれ独自のバージョン番号を持っています。 **内容** フィールドにはサービスのバージョン番号にあわせてその他の有用な詳細情報が報告されます。以下に続く出力は例であり、システムの設定と使用できる Server Administrator のバージョンによって異なります。

```
Contains: Broadcom SNMP Agent 10.xx.xx
          Common Storage Module 3.x.x
          Data Engine 5.x.x
          Hardware Application Programming Interface 5.x.x
          Instrumentation Service 6.x.x
          Instrumentation Service Integration Layer 1.x.x
          Intel SNMP Agent 1.xx.x
          OpenManage Inventory Collector 6.x.x
          OpenManage Tools 6.x.x
          Remote Access Controller 4 Data Populator 4.x.x
          Remote Access Controller 4 Managed Node 4.6.3
          Secure Port Server 1.x.x
          Server Administrator Framework 6.x.x
          Agent for Remote Access 1.x.x
          Storage Management 3.x.x
          Sun Java Runtime Environment 1.x.xx
```

---

omconfig chassis/omconfig mainsystem

omconfig chassis または **omconfig mainsystem** コマンドを使って、電流プローブ、ファンプローブ、電圧プローブ、および温度プローブの値をデフォルトまたは指定値に設定したり、システム起動時の BIOS 動作を設定したり、メモリエラーカウントのクリア、あるいはシステム構成で許可される電源ボタン管理機能の有効･無効を切り替えたりできます。

omconfig chassis -? または**omconfig mainsystem -?** コマンドを使って、すべての **omconfig chassis/omconfig mainsystem** コマンドのリストが表示されます。

omconfig chassis biossetup/omconfig mainsystem biossetup

omconfig chassis biossetup または **omconfig mainsystem biossetup** コマンドを使って、システムの BIOS セットアップ起動時間設定で通常使用できるシステム BIOS 設定を構成します。

注意: **特定の BIOS 設定のオプションを変更するとシステムが無効になったり、またはオペレーティングシステムを再インストールする必要がある場合があります。**

メモ： BIOS 設定 オプションを適用するには、システムを再起動します。

メモ： 各システムで全ての BIOS 設定オプションが使用できるわけではありません。

メモ： 一部のオペレーティングシステム（例：VMware ESXi）の制限により、本リリースの OpenManage Server Administrator ですべての機能を利用できない場合もあります。

表 4-3 は、このコマンドで使用できる「名前=値」のペアを表示します。

表 4-3 BIOS Setup Settings

「名前=値」のペア 1 attribute=	「名前=値」のペア 2 setting=	説明
attribute=acpwrrecovery	setting=off | last | on	**off**: システムはオフになっています。 **last**: システムは前の状態に戻ります。 **on**: システムがオンになっています。
	delay=random | immediate | timedelay time <値>	**random**: ランダムな遅延時間でシステムの電源を入れます。 **immediate**: システムを即時前の状態に戻します。 **timedelay <値>**: ユーザー指定の遅延時間に基づいてシステムの電源を入れます。
attribute=bezel	setting=enabled | disabled	**enabled**: システム起動中のベゼル取り外しイントルージョンチェックを有効にします。 **disabled**: システム起動中のベゼル取り外しイントルージョンチェックを無効にします。
attribute=bootsequence	setting=diskettefirst | hdonly | devicelist |cdromfirst | opticaldrive	BIOS にシステムを起動するデバイスと、起動ルーチンが各デバイスをチェックする順序を伝えます。 **メモ：** Linux システムにおいて、システム管理者 / システム管理者グループにアップグレードされたユーザー / ユーザーグループは、この BIOS 設定を設定できません。
attribute=bootmode	setting=uefi | bios	**uefi**: システムが UEFI（Unified Extensible Firmware Interface）をサポートするオペレーティングシステムを起動できるようにします。 **bios**: システムが UEFI をサポートしないオペレーティングシステムを起動できるようにします。
attribute=bootorder	sequence=aliasname1, aliasname2,.....aliasnameN	設定されたエイリアス名に基づいて、起動順序を設定します。エイリアス名を表示するには、`omreport chassis biossetup attribute=bootorder` のコマンドを実行します。 **メモ：** Linux システムにおいて、システム管理者 / システム管理者グループにアップグレードされたユーザー / ユーザーグループは、この BIOS 設定を設定できません。
attribute=hddorder	sequence=aliasname1, aliasname2,.....aliasnameN	設定されエイリアス名に基づいて、BIOS 設定のハードディスク順序を設定します。変更はシステムの再起動後に適用されます。エイリアス名を表示するには、`omreport chassis biossetup attribute=bootorder` のコマンドを実行します。 **メモ：** Linux システムにおいて、システム管理者 / システム管理者グループにアップグレードされたユーザー / ユーザーグループは、この BIOS 設定を設定できません。
attribute=cstates	setting=enabled | disabled	**enabled**: システムが使用されていない時に、プロセッサがディープスリープ状態になることを有効にします。 **disabled**: システムが使用されていない時に、プロセッサがディープスリープ状態になることを無効にします。
attribute=conredirect	setting=enabled | disabled	**enabled**: シリアルポート 1 に BIOS 画面をリダイレクトします。キーボードとテキスト出力はシリアルポート 2 にリダイレクトされます。 **disabled**: BIOS コンソールのリダイレクトをオフにします。
attribute=crab	setting=enabled | disabled	**enabled**: システム再起動後に BIOS コンソールリダイレクトを有効にします。 **disabled**: BIOS コンソールリダイレクトを無効にします。 **メモ：** **crab** コマンドは Dell PowerEdge *x*9*xx* システムのみに有効になっています。
attribute=cpuc1e	setting=enabled | disabled	**enabled**: システム再起動後にプロセッサ C1-E を有効にします。

		disabled: システム再起動後にプロセッサ C1-E を無効にします。
attribute=cpuht	setting=enabled | disabled	**enabled**: 論理プロセッサのハイパースレッディングを有効にします。 **disabled**: 論理プロセッサのハイパースレッディングを無効にします。
attribute=cpuvt	setting=enabled | disabled	**enabled**: 仮想化を有効にします。 **disabled**: 仮想化を無効にします。
attribute=cpuxdsupport	setting=enabled | disabled	**enabled**: システム上で XD（Execute Disable）サポートを有効にします。 **disabled**: システム上で XD サポートを無効にします。
attribute=cpucore	setting=1 | 2 | 4 | 6 | 8 | 10 | 12 |all	**1**: プロセッサごとに 1 コアを有効にします。 **2**: プロセッサごとに 2 コアを有効にします。 **4**: プロセッサごとに 4 コアを有効にします。 **6**: プロセッサごとに 6 コアを有効にします。 **8:** プロセッサごとに 8 コアを有効にします。 **10:** プロセッサごとに 10 コアを有効にします。 **12:** プロセッサごとに 12 コアを有効にします。 **all**: プロセッサごとに最大コア数を有効にします。
attribute=dbs	setting=enable | disable	**enable**: システム上で DBS（Demand Based Switching）を有効にします。 **disable**: システム上で DBS を無効にします。
attribute=diskette	setting=off | auto | writeprotect	**off**: ディスケットドライブを無効にします。 **auto**: 自動的にディスケットドライブを有効にします。 **writeprotect**: 書き込みはできません。ディスクドライブを読み取り専用にします。
attribute=dualnic	setting=off | on | pxeboth | nic1pxe |nic2pxe | isciboth | nic1isci | nic2isci | nic1pxenic2isci | nic1iscinic2pxe | **onpxeboth** | **onpxenone** | **onpxenic1** | **onpxenic2**	**off**: ネットワークインタフェースコントローラ（NIC）を無効にします。 **on**: ネットワークインタフェースを有効にします（PXE と iSCSI はどちらの NIC でも有効にしません）。 **pxeboth**: 両方の NIC で PXE を有効にします。 **nic1pxe**: 最初の NIC で PXE を有効にし、2 つ目の NIC では何も（PXE も iSCSI も）有効にしません。 **nic2pxe**: 最初の NIC では何も（PXE も iSCSI も）有効にしないで、2 つ目の NIC で PXE を有効にします。 **isciboth**: 両方の NIC で iSCSI を有効にします。 **nic1isci**: 最初の NIC で iSCSI を有効にし、2 つ目の NIC では何も（PXE も iSCSI も）有効にしません。 **nic2isci**: 最初の NIC では何も（PXE も iSCSI も）有効にしないで、2 つ目の NIC で iSCSI を有効にします。 **nic1pxenic2isci**: 最初の NIC で PXE を有効にし、2 つ目の NIC で iSCSI を有効にします。 **nic1iscinic2pxe**: 最初の NIC で iSCSI を有効にし、2 つ目の NIC で PXE を有効にします。 **メモ：** 以下のオプションは廃止予定です。 **onpxeboth**: 両方の NIC で PXE を有効にします。 **onpxenone**: PXE はいずれの NIC でも使用できません。 **onpxenic1**: NIC 1で PXE を有効にします。 **onpxenic2**: NIC 2で PXE を有効にします。
attribute=embhypvisor	setting=enabled | disabled	**enabled**: 内蔵されたハイパーバイザを有効にします。 **disabled**: 内蔵されたハイパーバイザを無効にします。
attribute=embvideoctrl	setting=enabled | disabled	**enabled**: 内蔵ビデオコントローラをプライマリビデオデバイスとして有効にします。 **disabled**: 内蔵ビデオコントローラをプライマリビデオデバイスとして無効にします。

attribute=esataport	setting=off | auto	**off**: 内蔵 SATA ポート値を **オフ** に設定します。 **auto**: 内蔵 SATA ポート値を **自動** に設定します。
attribute=extserial	setting=com1 | com2 | rad	**com1**: 外付けのシリアルコネクタを COM 1 にマップします。 **com2**: 外付けのシリアルコネクタを COM 2 にマップします。 **rad**: 外部シリアルコネクタをリモートアクセスドライブにマップします。
attribute=fbr	setting=9600 | 19200 | 57600 | 115200	**9600**: コンソールリダイレクトのフェイルセーフ ボーレートを 9600 bps に設定します。 **19200**: コンソールリダイレクトのフェイルセーフ ボーレートを 19200 bps に設定します。 **57600**: コンソールリダイレクトのフェイルセーフ ボーレートを 57600 bps に設定します。 **115200**: コンソールリダイレクトのフェイルセーフ ボーレートを 115200 bps に設定します。
attribute=htassist	setting=enabled | disabled	**enable**d: プローブフィルタチップセットのオプションを有効にします。 **disabled**: プローブフィルタチップセットのオプションを無効にします。 **メモ:** このオプションを有効または無効にすると、一部のアプリケーションは正常に動作しません。
attribute=ide	setting=on | off force=true	**on**: このデバイスを有効にします。 **off**: このデバイスを無効にします。 **force=true**: 設定変更の確認。
attribute=idepridrv	setting=off | auto	**off**: デバイスを有効にします。 **auto**: 自動的にデバイスを検出して有効にします。
attribute=intrusion	setting=enabled | disabled	**enabled**: システム起動中にイントルージョンチェックを有効にします。システムにもベゼルイントルージョンチェック機能がある場合、このイントルージョンオプションはシステムのベゼルの取り外しをチェックします。 **disabled**: システム起動中にイントルージョンチェックを無効にします。
attribute=intusb[1..2] **メモ:** 以下のオプションが廃止されました。 attribute=intusb	setting=enabled | disabled	**enabled**: 内蔵 USB ポートを有効にします。 **disabled**: 内蔵 USB ポートを無効にします。
attribute=mouse	setting=on | off	**on**: マウスを有効にします。 **off**: マウスを無効にします。
attribute=nic1	setting=enabled | enabledwithpxe | disabled | enabledonly | enablednonepxe | enabledwithiscsi	**enabled**: 最初の NIC はシステム起動中に有効にします。 **enabledwithpxe:** システム起動 中にNIC を有効にします（システムに PXE がある場合は PXE をオンの状態にします。) **disabled**: システム 起動中に最初の NIC を無効にします。 **enabledonly:**システム起動中にNIC を有効にします（システムに PXE がある場合は PXE をオンの状態にします。) **enablednonepxe:** システム起動中に最初のNIC を有効にします（システムに PXE がある場合は PXE をオンの状態にします。) **enabledwithiscsi:** システム起動中に最初のNIC を有効にします（システムに iSCSI がある場合は iSCSI をオンの状態にします。)
attribute=nic2	setting=enabled | enabledwithpxe | disabled | enabledonly | enablednonepxe | enabledwithiscsi	**enabled**: システムを起動中に最初の NIC を有効にします。 **enabledwithpxe:** システム起動中に二番目のNIC を有効にします（システムに PXE がある場合は PXE をオンの状態にします。） **disabled**: システム 起動中に二番目の NIC を無効にします。 **enabledonly:**システム起動中に二番目の NIC を有効にします（システムに PXE がある場合は PXE をオンの状態にします。） **enablednonepxe:**システム起動中に二番目の NIC を有効にします（システムに

		PXE がある場合は PXE をオンの状態にします。） **enabledwithiscsi:** システム起動中に二番目のNIC を有効にします（システムに iSCSI がある場合は iSCSI をオンの状態にします。）
attribute=nic3	setting=enabled | enabledwithpxe | disabled | enabledonly | enablednonepxe | enabledwithiscsi	**enabled**: システム起動中に三番目の NIC を有効にします。 **enabledwithpxe:** システム起動中に三番目のNIC を有効にします（システムに PXE がある場合は PXE をオンの状態にします。） **disabled**: システム 起動中に三番目の NIC を無効にします。 **enabledonly:**システム起動中に三番目の NIC を有効にします（システムに PXE がある場合は PXE をオンの状態にします。） **enablednonepxe:**システム起動中に三番目の NIC を有効にします（システムに PXE がある場合は PXE をオンの状態にします。） **enabledwithiscsi:** システム起動中に三番目のNIC を有効にします（システムに iSCSI がある場合は iSCSI をオンの状態にします。）
attribute=nic4	setting=enabled | enabledwithpxe | disabled | enabledonly | enablednonepxe | enabledwithiscsi	**enabled**: システム起動中に四番目の NIC を有効にします。 **enabledwithpxe:** システム起動中に四番目のNIC を有効にします（システムに PXE がある場合は PXE をオンの状態にします。） **disabled**: システム 起動中に四番目の NIC を無効にします。 **enabledonly:** システム起動中に四番目の NIC を有効にします（システムに PXE がある場合は PXE をオフの状態にします。） **enablednonepxe:**システム起動中に四番目の NIC を有効にします（システムに PXE がある場合は PXE をオンの状態にします。） **enabledwithiscsi:** システム起動中に四番目のNIC を有効にします（システムに iSCSI がある場合は iSCSI をオンの状態にします。）
attribute=numlock	setting=on | off	**on**: キーパッドは番号のキーとして使用します。 **off**: キーパッドは矢印キーとして使用します。
attribute=numa	setting=enabled | disabled	**enabled**: ノードのインターリーブを有効にします。 **disabled**: ノードのインターリーブを無効にします。
attribute=ppaddress	setting=off | lpt1 | lpt2 | lpt3	**off**: パラレルポートアドレスを有効にします。 **lpt1**: LPT1 にデバイスを検出します。 **lpt2**: LPT2 にデバイスを検出します。 **lpt3**: LPT3 にデバイスを検出します。
attribute=ppmode	setting=at | ps2 | ecp | epp	**at**: パラレルポートnoSets the parallel port mode to type AT. **ps2**: パラレルポートのモードは PS/2 タイプに設定します。 **ecp**: パラレルポートモードをタイプ ECP に設定します（拡張機能ポート）。 **epp**: パラレルポートモードをタイプ ECP に設定します（強化パラレルポート）。
attribute=primaryscsi	setting=on | off force=true	**注意:primary scsi、romb、romba、または rombb の設定を変更する場合、システムはオペレーティング システムを再インストールするまで操作不能となります。** **on**: このデバイスを有効にします。 **off**: このデバイスを無効にします。 **force=true**: 設定変更の確認。
attribute=romb	setting=raid | off | scsi force=true	**raid**: BIOS にマザーボードの RAID を RAID として検出するように指示します。 **off**: デバイスはシステムを起動中に有効にします。 **scsi**: BIOS にこのデバイスをSCSI デバイスとして検出するように指示します。 **force=true**: 設定変更の確認。
attribute=romba	setting=raid | scsi force=true	**raid**: BIOS にマザーボードチャネル A の RAID を RAID デバイスとして検出するように指示します。 **scsi**: BIOS にこのデバイスをSCSI デバイスとして検出するように指示します。 **force=true**: 設定変更の確認。

attribute=rombb	setting=raid | scsi force=true	**raid**: BIOS にマザーボードチャネル B の RAID を RAID デバイスとして検出するように指示します。 **scsi**: BIOS にこのデバイスをSCSI デバイスとして検出するように指示します。 **force=true**: 設定変更の確認。
attribute=sata	setting=off | ata | raid	**off**: SATAコントローラが無効になります。 **ata**: オンボード SATA コントローラを ATA モードに設定します。 **raid**: オンボード SATA コントローラを RAID モードに設定します。
attribute=sataport (0...7) または (a...h)	setting=off | auto	**off**: SATAポートが無効になります。 **auto**: SATA ポートは自動的に有効にします。
attribute=secondaryscsi	setting=on | off	**on**: このデバイスを有効にします。 **off**: このデバイスを無効にします。
attribute=serialportaddr	setting=default | alternate | com1 | com2	**default**: シリアルデバイス 1=COM1、シリアルデバイス 2=COM2 にマップします。 **alternate**: シリアルデバイス 1=COM2、シリアルデバイス 2=COM1 にマップします。 **com1**: シリアルポートアドレスを COM1 に設定します。 **com2**: シリアルポートアドレスを COM2 に設定します。
attribute=serialcom	setting=off | on |com1 |com2	**off**: シリアル通信設定を無効にします。 **on**: コンソールリダイレクトのないシリアル通信設定を有効にします。 **com1**: COM 1 経由のコンソールリダイレクトのあるシリアル通信設定を有効にします。 **com2**: COM 2 経由のコンソールリダイレクトのあるシリアル通信設定を有効にします。
attribute=serialport1	setting=off | auto | com1 | com3 | bmcserial | bmcnic | rac | com1bmc	**off**: シリアルポート 1 を無効にします。 **auto**: シリアルポート 1 は COM ポートにマッピングします。 **com1**: シリアルポート 1 を COM ポート 1 bmc にマッピングします。 **com3**: シリアルポート 1 を COM ポート 3 bmc にマッピングします。 **bmcserial**: シリアルポート 1 を BMC シリアルにマッピングします。 **bmcnic**: シリアルポート 1 を Baseboard Management Controller (BMC) NIC にマッピングします。 **rac**: シリアルポート 1 をRemote Access Controller （RAC）にマッピングします。 **com1bmc**: シリアルポート 1 を COM ポート 1 bmc にマッピングします。 **メモ：** このコマンドは一部の *x8xx* システムで使用できます。
attribute=serialport2	setting=off | auto | com2 | com4	**off:** シリアルポート 2 を無効にします。 **auto:** シリアルポート 1 は COM ポートにマッピングします。 **com2:** シリアルポート 2 を COM ポート 2 bmc にマッピングします。 **com4:** シリアルポート 2 を COM ポート 4 bmc にマッピングします。
attribute=speaker	setting=on | off	**on**: スピーカーを有効にします。 **off**: スピーカーを無効にします。
attribute=cputurbomode	setting=enabled | disabled	CPU ターボモードは、システムが温度、電力、または電流許容範囲内で稼働しているときに CPU の周波数を増やすことができます。 **enabled**: CPU ターボモードを有効にします。 **disabled**: CPU ターボモードを無効にします。
attribute=uausb	setting=on | backonly | off	**on**: ユーザーがアクセス可能な USB ポートを有効にします。 **backonly:** システムの背面にあるユーザーがアクセス可能な USB ポートのみを有効にします。

		off: ユーザーがアクセス可能な USB ポートを無効にします。
attribute=usb	setting=enabled | disabled	**enabled**: USB ポートを有効にします。 **disabled**: USB ポートを無効にします。 **メモ：** ご利用のシステムハードウェアによっては、usb または usbb のいずれかを設定できます。
attribute=usbb	setting=enabled | enabledwithbios| disabled	**enabled**: システム起動中に USB ポートを有効にします（BIOS サポートなし）。 **enabledwithbios:** システム起動中に USB ポートを有効にします（BIOS サポートあり）。 **disabled**: システム起動中に USB ポートを無効にします。 **メモ：** ご利用のシステムハードウェアによっては、usb または usbb のいずれかを設定できます。

omconfig chassis currents/omconfig mainsystem currents

メモ： 現在、Server Administrator ではこのコマンドは使用できません。

omconfig chassis fans/omconfig mainsystem fans

omconfig chassis fans または **omconfig mainsystem fans** コマンドを使用すると、ファンプローブ警告しきい値を設定できます。他のコンポーネントに関しては、警告とエラーしきい値の両方を表示することができますが、エラーしきい値を設定することはできません。最小および最大エラーしきい値はシステム製造元によって設定されます。

ファン警告しきい値の有効なパラメータ

表 4-4 は、ファン警告しきい値設定に有効なパラメータを表示します。

表 4-4 omconfig chassis fans/omconfig chassis fans

「名前=値」のペア	説明
index=<*n*>	プローブまたはプローブインデックスの番号（指定が必要）。
warnthresh=default	最小および最大警告しきい値を**デフォルト**の状態に設定します。
minwarnthresh=<*n*>	最小警告しきい値。
maxwarnthresh=<*n*>	最大警告しきい値。

デフォルトの最小および最大警告しきい値

メモ： ESM 3、ESM4、および BMC の機能を持つシステムでは警告しきい値をデフォルト値に設定することはできません。

上限と下限ファン警告しきい値の両方を、推奨されているデフォルト値に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig chassis fans index=0 warnthresh=default
```
または
```
omconfig mainsystem fans index=0 warnthresh=default
```

1 つの値をデフォルト状態にして別の値を設定することはできません。つまり、最小警告しきい値をデフォルト状態にすると、最大警告しきい値もデフォルト値を選択することになります。

最小および最大警告しきい値の指定

ファンプローブの警告しきい値を指定する場合、設定するプローブ番号と最小、および / あるいは最大警告しきい値を指定する必要があります。次の例では、プローブ 0 を設定します。最初のコマンドは最小しきい値のみを設定し、2 番目のコマンドは最小および最大しきい値の両方を設定します。

```
omconfig chassis fans index=0 minwarnthresh=4580
```
または
```
omconfig mainsystem fans index=0 minwarnthresh=4580
```

```
omconfig chassis fans index=0 minwarnthresh=4580 maxwarnthresh=9160
```
または
```
omconfig mainsystem fans index=0 minwarnthresh=4580 maxwarnthresh=9160
```

このコマンドを実行して、システムによる指定値の設定が完了すると、次のメッセージが 表示されます。

```
Fan probe warning threshold(s) set successfully. (ファンプローブの警告しきい値は正常に設定されました)。
```

メモ： ファンプローブの最小および最大警告しきい値は、PowerEdge *x*8*xx* および *x*9*xx* のシステムでは設定できません。

omconfig chassis frontpanel/omconfig mainsystem frontpanel

omconfig chassis frontpanel または **omconfig mainsystem frontpanel** コマンドを使用して次の設定を行います。

- 電源ボタンとマスク不可能割り込み（NMI）ボタンを設定する
- LCD での表示内容を設定する
  - 何も表示しない
  - カスタム情報
  - デフォルトシステム情報
  - サービスタグ、システム名
  - リモートアクセス MAC アドレス
  - システム電源
  - リモートアクセス IP アドレス
  - システムの周辺温度
  - リモートアクセス IPv4 アドレス
  - リモートアクセス IPv6 アドレス
- LCD ライン番号の設定
- LCD のセキュリティ状態レポートの表示
- カーネルベースの仮想マシン（KVM）が使用可能な場合にアクティブなリモートセッションを表示するように LCD を設定する

メモ： **電源** と **NMI** ボタンは、システムに存在するときにのみ設定できます。

表 4-5 は、コマンドの有効なパラメータを表示します。

表 4-5 omconfig chassis frontpanel/omconfig mainsystem frontpanel

「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
lcdindex=<index>	-	LCD ライン番号を指定します。
config=none | default | custom	-	**none**: LCD テキストをなしに設定します。 **default**: LCD テキストをデフォルトに設定します。 **custom**: LCD テキストはカスタムに設定します。
text=*<custom text>*	-	**config=custom** のときに LCD のカスタムテキストを設定します。
nmibutton=enable | disable	-	**enable**: システムの **NMI** ボタンを有効にします。 **disable**: システムの **NMI** ボタンを無効にします。
powerbutton=enable | disable	-	**true**: システムの **電源** ボタンを有効にします。 **false**: システムの **電源** ボタンを無効にします。
config=sysname	-	システムの名前を設定します。
config=syspower	-	システム電源情報を設定します。
config=servicetag	-	システムのサービスタグ情報を設定します。
config=remoteaccessipv4	-	リモートアクセス IPv4 情報を設定します。
config=remoteaccessipv6	-	リモートアクセス IPv6 情報を設定します。
config=remoteaccessmac	-	リモートアクセス MAC 情報を設定します。
config=ipv4idrac		IPv4 DRAC 情報を設定します。
config=ipv6idrac		IPv6 DRAC 情報を設定します。
config=macidrac	-	DRAC の MAC アドレスを設定します。
config=ambienttemp	-	システム温度を摂氏で表示します。
security=modify	-	LCD テキストを変更できます。
security=view	-	LCD テキストへの読み取り専用アクセスを与えます。

security=disabled	-	LCD テキストへの制限付きアクセスを与えます。
remoteindication=true	-	システムがアクティブなリモートセッションを検出すると、LCD が点滅します。

メモ： **ipv4idrac**、**ipv6idrac**、および **macidrac** のオプションは廃止されました。

omconfig chassis info/omconfig mainsystem info

omconfig chassis info または **omconfig mainsystem info** コマンドを使って、システムの資産タグとシャーシ名を入力します。システムがモジュラシステムの 場合、モジュラコンポーネントの管理タグも入力できます。 表 4-6 は、コマンドの有効なパラメータを表示します。

表 4-6 omconfig chassis info/omconfig mainsystem info

「名前=値」のペア	説明
index=<*n*>	管理タグまたは名前を設定するシャーシの番号。
tag=<テキスト>	英数字テキストによる管理タグ。英数字 10 文字以内で指定します。
name=<テキスト>	シャーシ名

以下の例では、メインシステムシャーシの管理タグを **buildsys** に設定します。

```
omconfig chassis info index=0 tag=buildsys
```
または
```
omconfig mainsystem info index=0 tag=buildsys
```

インデックス 0 はメインシステムシャーシのデフォルト値です。次のコマンドでは index=*n* が省略されていますが、結果は同じです。

```
omconfig chassis info tag=buildsys
```
または
```
omconfig mainsystem info tag=buildsys
```

有効なコマンドが実行されると、結果として次のメッセージが表示されます。

```
Chassis info set successfully. (シャーシ情報は正常に設定されました)。
```

シャーシによっては、異なる名前を割り当てることができます。メインシステムシャーシの名前を変更することはできません。下の例では、シャーシ 2 の名前を **storscsi1** から **storscsia** に変更します。

```
omconfig chassis info index=2 name=storscsia
```
または
```
omconfig mainsystem info index=2 name=storscsia
```

他のコマンドでは、シャーシ 2（ メイン シャーシ=0）がない場合、CLI によってエラーメッセージが表示されます。CLI では、存在するシステム構成に対してのみコマンドを実行できます。

omconfig chassis leds/omconfig mainsystem leds

omconfig chassis leds または **omconfig mainsystem leds** コマンドを使って、chassis fault LED または chassis identification LED を点滅するか指定します。この コマンドはシステムのハードドライブから LED をクリアすることもできます。 表 4-7 は、コマンドの有効なパラメータを表示します。

表 4-7 omconfig chassis leds/omconfig mainsystem leds

「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
index=<*n*>	-	LED が存在するシャーシ番号（デフォルトはメインシステムシャーシであるシャーシ 0）。
led=fault	severity=warning | critical	警告イベントまたは重要イベントの発生時に、LED を点滅するように選択します。
led=hdfault	action=clear	ハードドライブのフォールト数を 0 に戻します。
led=identify	flash=off | on time-out=<*n*>	シャーシ識別 LED をオフまたはオンに設定します。LED が点滅するタイムアウト値を秒数で設定します。

omconfig chassis memorymode/omconfig mainsystem memorymode

omconfig chassis memorymode または **omconfig mainsystem memorymode** コマンドを使用して、メモリエラーが発生したときにシステムのメモリで使用する冗長性モードを指定します。

冗長メモリを使うと、現在使用中のモジュールに許容できないエラーが検出されたときに、システムを使用できる他のメモリモジュールに切り替えることができます。**omconfig chassis memorymode** または **omconfig mainsystem memorymode** を使用すると、冗長性を無効にすることができます。冗長性を無効に すると、システムが使用しているモジュールにエラーが発生したときに、使用できる他のメモリモジュールに切り替えないようにシステムに指示を出すことになります。冗長性を有効にするには、ミラーまたは RAID から選択します。

スペアモードを使用すると、訂正可能なメモリイベントが検出されたときにシステムメモリのバンクが無効になり、スペアバンクが有効になって、オリジナルバンクのデータがすべてスペアバンクにコピ

ーされます。スペアバンクには、少なくとも 3 つの同一メモリのバンクが必要です。オペレーティングシステムはスペアバンクを認識しません。

ミラーモードは、訂正不可能なメモリイベントが検出されたときに、メモリの冗長コピーに切り替えます。ミラーリングされたメモリに切り替えた後、システムは次回再起動時までオリジナルのシステムメモリに切り替わりません。このモードではオペレーティングシステムはインストールされているシステムメモリの半分を認識しません。

RAID モードでは、メモリチェックとエラー回復のレベルが向上しますが、メモリ容量が低下します。

表 4-8 は、コマンドの有効なパラメータを表示します。

表 4-8 omconfig chassis memorymode/omconfig mainsystem memorymode

「名前=値」のペア 1	説明
index=<*n*>	メモリモジュールが常駐するシャーシ番号（デフォルトはメインシステムシャーシのシャーシ 0 です）。
redundancy=spare | mirror | disabled | raid5	**Spare** は訂正可能なメモリイベントを持つメモリモジュールを無効にし、エラーがあったモジュールのデータをスペアバンクにコピーします。 **Disabled** は、訂正不可能なメモリイベントが検出されたときにシステムでその他のメモリモジュールを使用しないことを示します。 **Mirror** は、エラーのあったモジュールに訂正不可能なメモリイベントが検出された場合、システムをミラーリングされたメモリのコピーに切り替えます。**ミラーモード**では、オペレーティングシステムはシステムが再起動されるまでオリジナルのモジュールに戻りません。 **RAID5** はシステムメモリの設定方法です。これは理論的には、ハードドライブのストレージシステムで使用される RAID 5 モードに似ています。このメモリモードでは、メモリチェックとエラー回復のレベルが向上しますが、メモリ容量が低下します。サポートしている RAID モードは、循環パリティの RAID レベル 5 ストライピングです。
opmode=mirror | optimizer | advecc	**Mirror** は、エラーのあったモジュールに訂正不可能なメモリイベントが検出された場合、システムをミラーリングされたメモリのコピーに切り替えます。**ミラーモード**では、オペレーティングシステムはシステムが再起動されるまでオリジナルのモジュールに戻りません。 **Optimizer** は、各 DRAM コントローラが 64 ビットモードで独立して動作するようにし、最適なメモリパフォーマンスを提供します。 **アドバンスド ECC (advecc)** は、2 つの DRAM コントローラを 128 ビットモードで組み合わせ、最適な信頼性を提供します。コントローラによってチーミングできないメモリは、オペレーティングシステムに報告されません。

omconfig chassis pwrmanagement/omconfig mainsystem pwrmanagement

omconfig chassis pwrmanagement または **omconfig mainsystem pwrmanagement** コマンドを使って、電力キャップを設定し、電力使用を制御するプロファイルを管理できます。

表 4-9 omconfig chassis pwrmanagement/omconfig mainsystem pwrmanagement pwrmanagement

「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
config=budget	cap=<値>	電力バジェットのしきい値を設定します。
	setting=enable | disable	**enable**: powercap 設定を有効にします。 **disable**: powercap 設定を無効にします。
	unit=watt | btuphr | percent	**watt**: ワット単位で設定します。 **btuphr**: 英熱量毎時単位で設定します。 **percent**: パーセント単位で設定します。
config=profile	profile=maxperformance| apc | osctrl | custom	**maxperformance**: サポートされている最高のプロセッサ状態に設定します。最大性能と最小電源経済が得られます。 **apc**: アクティブ電源制御（apc）は、BIOS 制御のデマンドベース電源管理を有効にします。 **osctrl**: OS 制御（osctrl）は、オペレーティングシステム制御のデマンドベース電源管理を有効にします。 **custom**: このプロファイルは BIOS 設定を個別に指定できるようにします。基盤となる BIOS 設定を表示することで、詳細な制御を可能にします。
	cpupowermode=min | max | systemdbpm | osdbpm	**min**: CPU 電力消費量を最小に設定します。 **max**: CPU 電力消費量を最大に設定します。 **systemdbpm**: モードをシステムデマンドベースの電源管理に設定します。 **osdbpm**: モードをオペレーティングシステムデマンドベースの電源管理に設定します。 **メモ：** これらのオプションは、カスタムプロファイルが選択されている場合にのみ適用されます。
	memorypowermode=min | 800 | 1067 | 1333 | max	**min**: モードを最小電力使用に設定します。 800 | 1067 | 1333: モードを 800、1067、または1333 MHz に設定します。 **max**: モードを最大性能に設定します。

		メモ： これらのオプションは、カスタムプロファイルが選択されている場合にのみ適用されます。
	fanmode=min | max	**min**: モードを最小電力使用に設定します。 **max**: モードを最大性能に設定します。 **メモ：** これらのオプションは、カスタムプロファイルが選択されている場合にのみ適用されます。

メモ： 電源プロファイル設定オプションを有効にするためにシステムを再起動します。

omconfig chassis pwrmonitoring/omconfig mainsystem pwrmonitoring

omconfig chassis pwrmonitoring または **omconfig mainsystem pwrmonitoring** を使用すると、電力消費情報を設定できます。

表 4-10 omconfig chassis pwrmonitoring/omconfig mainsystem pwrmonitoring

「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
index=<n>	-	プローブまたはプローブインデックスの番号（指定が必要）。
config=probe	warnthresh=settodefault	最小および最大警告しきい値を**デフォルト**の状態に設定します。
	warnthresh=<*n*>	警告しきい値を設定します。
	unit=watt | btuphr |	**watt**: ワット単位で表示します。 **btuphr**: 英熱量毎時単位で表示します。
config=resetreading	type=energy | peakpower	**energy**: システム電力読み取り値をリセットします。 **peakpower**: システムピーク電源をリセットします。

メモ： このコマンドは PMBus をサポートするいくつかの Dell *xx*0*x* システムにのみ適用できます。

デフォルトな警告しきい値

メモ： センサー管理機能はシステムによって異なります。

上限と下限ファン警告しきい値の両方を、推奨されているデフォルト値に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig chassis pwrmonitoring index=0 warnthresh=settodefault
```
または
```
omconfig chassis pwrmonitoring index=0 warnthresh=settodefault
```

1 つの値をデフォルト状態にして別の値を設定することはできません。つまり、最小警告しきい値をデフォルト状態にすると、最大警告しきい値もデフォルト値を選択することになります。

警告しきい値を指定します。

電力消費プローブの警告しきい値を指定する場合、設定するプローブ番号と警告しきい値を指定する必要があります。値は英熱量毎時またはワット単位で表示されます。次の例では、プローブ 4 を設定します。

```
omconfig chassis pwrmonitoring config=probe index=4 warnthresh=325 unit=watt
```
または
```
omconfig mainsystem pwrmonitoring config=probe index=4 warnthresh=325 unit=btuphr.
```

このコマンドを実行して、システムによる指定値の設定が完了すると、次のメッセージが 表示されます。

```
Power consumption probe warning threshold(s) set successfully. (電力消費プローブ警告しきい値が正常に設定しました)。
```

omconfig chassis remoteaccess/omconfig mainsystem remoteaccess

omconfig chassis remoteaccess または **omconfig mainsystem remoteaccess** コマンドを使用すると、設定できます。

- ローカルエリアネットワーク（LAN）上のリモートアクセス。
- インストールされている BMC または RAC 用のシリアルポート。
- シリアルオーバー LAN 接続の BMC または RAC。

- シリアルポートのターミナル設定。
- LAN 接続におけるシリアルの詳細設定。
- BMC または RAC ユーザーの情報。
- IPv6 と IPv4 インタフェースの情報。

メモ： ユーザー情報を設定するには、ユーザー ID を入力する必要があります。

次のように入力します。

```
omconfig chassis remoteaccess
```
または
```
omconfig mainsystem remoteaccess
```

omconfig chassis remoteaccess または **omconfig mainsystem remoteaccess** コマンドの出力は各使用可能な設定を一覧表示します。 表 4-11 は、有効なパラメータを表示します。

表 4-11 omconfig chassis remoteaccess/omconfig mainsystem remoteaccess

「名前=値」のペア 1 config=	「名前=値」のペア 2	説明
config=additional	ipv4=enable | disable	**enable**: IPv4 スタックが iDRAC6 にロードされます。 **disable**: IPv4 スタックが iDRAC6 でフラッシュされます。
	ipv6=enable | disable	**enable**: IPv6 スタックを有効にして iDRAC6 にロードできるようにします。 **disable**: IPv6 スタックを無効にして iDRAC6 からアンロードできるようにします。
config=advsol	characcuminterval=number	**number**: 文字累積間隔を 5 ミリ秒に設定します。
	charsendthreshold=number	**number**: 文字数を設定します。BMC は、この文字数（以上）がベースボードシリアルコントローラから BMC に受け入れられるとすぐに自動的にこの文字数が含まれたシリアルオーバー LAN データパケットを送信します。
config=nic	enable=true | false	**true**: LAN で IPMI を有効にします。 **false**: LAN で IPMI を無効にします。
	nicselection=sharedwithfailoveronall | nic1 | teamednic1nic2 | dracnic	**sharedwithfailoveronall**: 新しい NIC 選択オプションを設定します。 **nic1:** NIC 1を有効にします。 **teamednic1nic2:** NIC チーム機能を有効にします。 **dracnic:** DRAC 5 がインストールされている場合は、DRAC NIC を有効にします。 **メモ：** **nicselection**オプションは PowerEdge *x*9*xx* システムでのみサポートします。
	altdnsserverv6	代替 DNS サーバーアドレスの設定を検証します。
	dnssourcev6=static | auto	**static**: **DNS** ソースを **static** に設定します。 **auto**: **DNS** ソースを **auto** に設定します。
config=nic（続き）	encryptkey=text confirmencryptkey=text	**text:** 暗号化と暗号化の確認に使用されるテキスト。 **メモ：** **text** オプションは PowerEdge *x*9*xx* システムでのみサポートします。
	gateway=Gateway	**Gateway**: BMC LAN インタフェースの IP アドレスソースに**static**アドレスを選択した場合のゲートウェイアドレスを設定します。
	gatewayv6=<値>	IPv6 ゲートウェイを検証します。
	enablenic=true | false	**true**: DRAC NIC を有効にします。 **false**: DRAC NIC を無効にします。 **メモ：** **enablenic** オプションは DRAC 5 がインストールされている PowerEdge *x*9*xx* システムでのみサポートします。
	ipaddress=ip	**ip**: BMC LAN インタフェースの IP アドレスソースに静的アドレスを選択した場合の IP アドレスを設定します。
	ipaddressv6=<IPv6 アドレス>	IPv6 アドレスの設定を検証します。
	ipsource=static | dhcp | systemsoftware	**static**: BMC LAN インタフェースの IP アドレスが固定で割り当てられた IP アドレスの場合、静的です。 **dhcp**: BMC LAN インタフェースの IP アドレスが動的ホスト設定プロトコルの場合、DHCP

		です。 **systemsoftware**: BMC LAN インタフェースの IP アドレスのソースがシステムソフトウェアからのものである場合、システムソフトウェアです。 **メモ：** すべてのコマンドがシステムでサポートされているわけではありません。
	ipsourcev6=static | auto	**static**: IPv6 ソースを **static** に設定します。 **auto**: IPv6 ソースを **auto**に設定します。
config=nic （続き）	privilegelevel=administrator | operator | user	**administrator**: LAN チャネルで受け入れられる最大特権をアドミニストレータに設定します。 **operator:** LAN チャネルで受け入れられる最大特権を オペレータに設定します。 **user:** LAN チャネルで受け入れられる最大特権をユーザーに設定します。
	prefdnsserverv6=<値>	優先 DNS サーバーの設定を検証します。
	subnet=Subnet	**subnet**: BMC LAN インタフェースの IP アドレスソースに静的アドレスを選択した場合のサブネットマスクを設定します。
	vlanenable=true | false	**true**: 仮想 LAN 識別を有効にします。 **false**: 仮想 LAN 識別を無効にします。
	vlanid=number	**number**: 1～4094 の仮想 LAN 識別。
	vlanpriority=number	**number**: 0～7 の仮想 LAN 識別の優先順位。
config=serial	baudrate=9600 | 19200 | 38400 | 57600 | 115200	**9600:** 接続速度を 9600 bps に設定します。 **19200:** 接続速度を 19200 bps に設定します。 **38400**: 揮発性および不揮発性接続速度を 38400 bps に設定します。 **57600**: 揮発性および不揮発性接続速度を 57600 bps に設定します。 **115200**: 揮発性および不揮発性接続速度を 115200 bps に設定します。 **メモ：** 9600 および 19200 のボーレートは、PowerEdge 1800、1850、2800、および 2850 のシステムでサポートされています。 19200、38400 および 57600 のボーレートは、PowerEdge *x*9*xx* システムでサポートされています。 115200 のボーレートは、DRAC 5 がインストールされている特定のシステムでサポートされています。 19200、57600、115200 のボーレート は、iDRAC6 がインストールされている *xx*0*x* システムでサポートされます。
	flowcontrol=none | rtscts	**none**: シリアルポートを介した通信フローの制御がありません。 **rtscts**: RTS は送信の準備ができた（Ready to Send）、CTS は明確に送信する（Clear to Send）の意味です。
config=serial （続き）	mode=directbasic | directterminal | directbasicterminal | modembasic | modemterminal | modembasicterminal	**directbasic**: シリアル 接続で IPMI メッセージに使用するメッセージの種類。 **directterminal**: シリアル 接続で印刷可能な ASCII 文字を使い、限定数のテキストコマンドを使用できるメッセージの種類。 **directbasicterminal**: シリアル 接続上での基本モードとターミナルモードのメッセージ。 **modembasic**: モデムでの IPMI メッセージに使用するメッセージの種類。 **modemterminal:** モデムで印刷可能な ASCII 文字を使い、限定数のテキストコマンドを使用できるメッセージの種類。 **modembasicterminal**: モデムを使った基本メッセージとターミナルメッセージ。 **メモ：** すべてのコマンドがシステムでサポートされているわけではありません。
	privilegelevel=administrator | operator | user	**administrator**: シリアル接続で受け入れられる最大特権をアドミニストレータに設定します。 **operator**: シリアル接続で受け入れられる最大特権をオペレータに設定します。 **user**: シリアル接続で受け入れられる最大特権をユーザーに設定します。
config=serialoverlan	enable=true | false	**true:** BMC の LAN でシリアルを有効にします。 **false:** BMC の LAN でシリアルを無効にします。
	baudrate=9600 | 19200 | 38400 | 57600 | 115200	**9600**: 揮発性および非揮発性接続速度を 9600 bps に設定します。 **19200**: 揮発性および不揮発性接続速度を 19200 bps に設定します。

		38400: 揮発性および不揮発性接続速度を 38400 bps に設定します。 **57600**: 揮発性および不揮発性接続速度を 57600 bps に設定します。 **115200**: 揮発性および不揮発性接続速度を 115200 bps に設定します。 **メモ：** 9600 および 19200 のボーレートは、PowerEdge 1800、1850、2800、および 2850 のシステムでサポートされています。 19200 および 57600 のボーレートは、PowerEdge *x*9*xx* システムでサポートされています。 115200 のボーレートは、DRAC 5 がインストールされている特定のシステムでサポートされています。 19200、57600、115200 のボーレート は、iDRAC6 がインストールされている *xx*0*x* システムでサポートされます。
	privilegelevel=administrator | operator | user	**administrator**: LAN チャネルのシリアルで受け入れられる最大特権をアドミニストレータに設定します。 **operator**: LAN チャネルのシリアルで受け入れられる最大特権をオペレータに設定します。 **user**: LAN チャネルのシリアルで受け入れられる最大特権をユーザーに設定します。
config=settodefault		デフォルトの設定を使用します。
config=terminalmode	deletecontrol=outputdel | outputbkspspbksp	**outputdel**: BMC は、<bksp> か <del>を受け取ると、<del> 文字を出力します。 **outputbkspspbksp**: BMC は、<bksp> または <del> を受け取ると 、<bksp><sp><bksp> 文字を出力します。
	handshakingcontrol=enabled | disabled	**enabled**: 入力バッファが別の コマンドを受け入れる準備ができたときに、文字シーケンスを出力するよう BMC に指示します。 **disabled**: 入力バッファが別の コマンドを受け入れる準備ができたときに、文字シーケンスを出力するよう BMC に指示しません。
	inputlinesequence=cr | null	**cr**: コンソールは新しいライン シーケンスに <CR> を使用します。 **null**: コンソールは新しいラインシーケンスに <NULL>を使用します。
	lineediting=enabled | disabled	**enabled**: ラインをタイプしたとき、ライン編集を有効にします。 **disabled**: ラインをタイプしたとき、ライン編集を無効にします。
	newlinesequence=none | crlf | null | cr | lfcr | lf	**none**: BMC は終了 シーケンスを使用しません。 **crlf**: BMC は、新しいラインがコンソールに書き込まれたときに、新しいラインシーケンスに <CR-LF>を使用します。 **null**: BMC は、新しいラインがコンソールに書き込まれたときに、新しいラインシーケンスに <Null> を使用します。 **cr**: BMC は、新しいラインがコンソールに書き込まれたときに、新しいラインシーケンスに <CR>を使用します。 **lfcr**: BMC は、新しいラインがコンソールに書き込まれたときに、新しいラインシーケンスに <LF-CR> を使用します。 **lf**: BMC は、新しいラインがコンソールに書き込まれたときに、新しいラインシーケンスに <LF>を使用します。
config=user	id=number enable=true | false	**id=number**: 設定されているユーザーの ID (数字書式の ID) **enable=true**: ユーザーを有効にします。 **enable=false**: ユーザーを無効にします。
	id=number enableserialoverlan=true | false	**id=number**: 設定されているユーザーの ID (数字書式の ID) **enableserialoverlan=true**: LAN のシリアルを有効にします。 **enableserialoverlan=false**: LAN のシリアルを無効にします。 **メモ：** **enableserialoverlan** オプションは PowerEdge *x*9*xx* システムでのみサポートします。
	id=number name=text	**number**: 設定されているユーザーの ID (数字書式の ID) **name=text**: ユーザー名
	id=number newpw=text confirmnewpw=text	**number**: 設定されているユーザーの ID (数字書式の ID) **newpw=text**: ユーザーの新しいパスワード。 **confirmnewpw=text**: 新しいパスワードの確認

	id=number serialaccesslevel=administrator | operator | user | none	**id=number**: 設定されているユーザーの ID (数字書式の ID) **serialaccesslevel=administrator**: ID を持つユーザーは、シリアルポートチャネルについてアドミニストレータのアクセス特権があります。 **serialaccesslevel=operator**: ID を持つユーザーは、シリアルポートチャネルについてオペレータのアクセス特権があります。 **serialaccesslevel=user**: ID を持つユーザーは、シリアル ポート チャネルについてユーザーのアクセス特権があります。 **serialaccesslevel=none**: ID を持つユーザーは、シリアル ポート チャネルのアクセス特権がありません。
config=user （続き）	id=number lanaccesslevel=administrator | operator | user| none	**id=number:** 設定されているユーザーの ID 番号。 **lanaccesslevel=administrator**: ID を持つユーザーは、LAN チャネルについてアドミニストレータのアクセス特権があります。 **lanaccesslevel=operator**: ID を持つユーザーは、LAN チャネルについてオペレータのアクセス特権があります。 **lanaccesslevel=user**: ID を持つユーザーは、LAN チャネルについてユーザーのアクセス特権があります。 **lanaccesslevel=none**: ID を持つユーザーは、LAN チャネルのアクセス特権がありません。
	id=user id dracusergroup=admin | poweruser | guest | testalert | custom | none	**id=user id**: 設定されているユーザーの ID。 **dracusergroup=admin:** システム管理者ユーザー特権を有効にします。 **dracusergroup=poweruser:** パワーユーザー特権を有効にします。 **dracusergroup=guest:** ゲストユーザー特権を有効にします。 **dracusergroup=custom:** カスタムユーザー特権を有効にします。 **メモ：** 「名前=値」のペアの詳細に関しては、表 4-12を参照してください。 **dracusergroup=custom.** **dracusergroup=none:** ユーザー特権を有効にしません。
config=user （続き）	id=user id extipmiusergroup=admin | operator | readonly | custom | none **メモ：** **extipmiusergroup** ユーザーグループは、Dell *xx*0*x* モジュラーシステムでのみ使用できます	**id=user id**: 設定されているユーザーの ID。 **extipmiusergroup=admin:** システム管理者ユーザー特権を有効にします。 **extipmiusergroup=operator:** オペレータ特権を有効にします。 **extipmiusergroup=readonly**: 読み取り専用特権を有効にします。 **extipmiusergroup=custom:** カスタムユーザー特権を有効にします。 **メモ：** デルは、iDRAC6 Enterprise のシステムに対して、**operator** および **readonly** のオプションのみを使用することを推奨します。 **メモ：** 「名前=値」のペアの詳細に関しては、表 4-13を参照してください。 **extipmiusergroup=custom.** **extipmiusergroup=none:** ユーザー 特権を有効にしません。

表 4-12 omconfig chassis remoteaccess config=user id=<ユーザー ID> dracusergroup=custom/omconfig mainsystem remoteaccess config=user id=<ユーザー ID> dracusergroup=custom

「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	「名前=値」のペア 3	説明
config=user （続き）	id=user id dracusergroup=custom	logindrac= true | false configuredrac= true | false configure users= true | false clearlogs= true | false executeservercommands= true | false accessconsoleredir= true | false	**true/false**: DRAC にログインすることを有効・無効にします。 **true/false**: DRAC の設定を有効・無効にします。 **true/false**: ユーザーの設定を有効・無効にします。 **true/false**: ログ クリアを有効・無効にします。 **true/false**: サーバーコマンドの実行を有効・無効にします。 **true/false**: コンソールリダイレクトのアクセスを有効・無効にします。

		accessvirtualmedia= true	false testalerts= true	false	**true / false**: 仮想メディアのアクセスを有効・無効にします。 **true / false**: 警告テストを有効・無効にします。

表 4-13 omconfig chassis remoteaccess config=user id=<ユーザー ID> extipmiusergroup=custom / omconfig mainsystem remoteaccess config=user id=<ユーザー ID> extipmiusergroup=custom

「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	「名前=値」のペア 3	説明
config=user （続き）	id=user id extipmiusergroup=custom **メモ：** **extipmiusergroup** ユーザーグループは、Dell *xx*0*x* モジュラーシステムでのみ使用できます。	loginidrac= true	false configureidrac= true	false	**true / false**: iDRAC6 にログインすることを有効 / 無効にします。 **true / false**: iDRAC6 の設定を有効 / 無効にします。

omconfig chassis temps / omconfig mainsystem temps

omconfig chassis temps または **omconfig mainsystem temps** コマンドを使って、温度プローブの警告しきい値を設定できます。他のコンポーネントに 関しては、警告とエラーしきい値の両方を表示することができますが、エラーしきい値を設定することはできません。最小および最大エラーしきい値はシステム製造元によって設定されます。

メモ： 設定できる警告しきい値は、システム設定に よって異なります。

温度警告しきい値の有効なパラメータ

表 4-14 は、温度警告しきい値設定に有効なパラメータを表示します。

表 4-14 omconfig chassis temps/omconfig mainsystem temps

「名前=値」のペア	説明
index=<*n*>	プローブまたはプローブインデックスの番号（指定が必要）。
warnthresh=default	最小および最大警告しきい値をデフォルトの状態に設定します。
minwarnthresh=<*n*>	最小警告しきい値（1 小数点）を設定します。
maxwarnthresh=<*n*>	最大警告しきい値（1 小数点）を設定します。

最小および最大警告しきい値を設定します。

上限と下限温度警告しきい値の両方を、推奨されているデフォルト値に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig chassis temps index=0 warnthresh=default
```
または
```
omconfig mainsystem temps index=0 warnthresh=default
```

1 つの値をデフォルト状態にして別の値を設定することはできません。つまり、最小警告しきい値をデフォルト状態にすると、最大警告しきい値もデフォルト値を選択することになります。

メモ： センサーを管理する機能はシステムによって異なります。

最小および最大警告しきい値の指定

温度プローブの警告しきい値を指定する場合、設定するプローブ番号と最小および最大警告しきい値を指定する必要があります。次の例では、プローブ 4 を設定します。

```
omconfig chassis temps index=4 minwarnthresh=11.2 maxwarnthresh=58.7
```
または
```
omconfig mainsystem temps index=4 minwarnthresh=11.2 maxwarnthresh=58.7
```

このコマンドを実行して、システムによる指定値の設定が完了すると、次のメッセージが 表示されます。

```
Temperature probe warning threshold(s) set successfully. (温度プローブの警告しきい値は正常に設定されました)。
```

メモ： PowerEdge *x8xx* および *x9xx* のシステムでは、周辺 温度に関してのみ温度プローブの警告しきい値を設定できます。

omconfig chassis volts / omconfig mainsystem volts

omconfig chassis volts または **omconfig mainsystem volts** コマンドを使用すると、電圧ファンプローブ警告しきい値を設定できます。他のコンポーネントに関しては、警告とエラーしきい値の両方を表示することができますが、エラーしきい値を設定することはできません。システムメーカーは最小および最大エラーしきい値を設定します。

電圧警告しきい値の有効なパラメータ

表 4-15 は、電圧警告しきい 値に有効なパラメータを表示します。

メモ： 設定できる警告しきい値は、システム設定に よって異なります。

表 4-15 omconfig chassis volts/omconfig mainsystem volts

「名前=値」のペア	説明
index=<*n*>	プローブインデックス（指定する必要があります）。
warnthresh=default	最小および最大警告しきい値をデフォルトの状態に設定します。
minwarnthresh=<*n*>	最小警告しきい値（3 小数点）を設定します。
maxwarnthresh=<*n*>	最大警告しきい値（3 小数点）を設定します。

デフォルトな最小および最大警告しきい値を設定します。

上限と下限電圧警告しきい値の両方を、推奨されているデフォルト値に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig chassis volts index=2 warnthresh=default
または
omconfig mainsystem volts index=2 warnthresh=default
```

1 つの値をデフォルト状態にして別の値を設定することはできません。つまり、最小警告しきい値をデフォルト状態にすると、最大警告しきい値もデフォルト値を選択することになります。

メモ： ESM 3 機能を持つシステムでは警告しきい値をデフォルト値に設定することはできません。

最小および最大警告しきい値の指定

電圧プローブの警告しきい値を指定する場合、設定するプローブ番号と最小、および / あるいは最大警告しきい値を指定する必要があります。次の例では、プローブ 0 を設定します。

```
omconfig chassis volts index=0 minwarnthresh=1.900 maxwarnthresh=2.250
または
omconfig mainsystem volts index=0 minwarnthresh=1.900 maxwarnthresh=2.250
```

このコマンドを実行して、システムによる指定値の設定が完了すると、次のメッセージが 表示されます。

```
Voltage probe warning threshold(s) set successfully. (電圧プローブの警告しきい値は正常に設定されました)。
```

メモ： 電圧の最小および最大警告しきい値は、PowerEdge *x8xx* のシステムでは設定できません。

---

omconfig preferences

omconfig preferences コマンドを使用して、システムのプリファランスを設定します。コマンドラインを使用して、Server Administrator にアクセスできるユーザーレベルを指定し、SNMP root パスワードを設定します。Active Directory サービスおよび SNMP set 操作も設定できます。

omconfig preferences cdvformat

omconfig preferences cdvformat を使用して、レポートされたデータフィールドをカスタム区切りフォーマットで分けるデリミタを指定します。デリミタの有効な値は感嘆符、セミコロン、単価記号、ハッシュ、ドル記号、パーセント記号、脱字記号、アステリスク、ティルダ、疑問符、コロン、コンマおよび パイプ記号です。

アスタリスクを使ってデータフィールドを分けるデリミタの設定の例は以下のとおりです。

```
omconfig preferences cdvformat delimiter=asterisk
```

omconfig preferences dirservice

Active Directory サービスを設定するには、 **omconfig preferences dirservice** コマンドを使用します。 **<製品名>oem.ini** ファイルは、これらの変更を反映して修正されます。「adproductname」 が **<製品名>oem.ini** ファイルにない場合は、 **<コンピュータ名>-<製品名>** デフォルト値が使用されます。**<コンピュータ名>** は Server Administrator を実行しているシステムおよび **<製品名>** は **omprv32.ini** に定義した製品の名前を指します。Server Administrator に対する製品の名前は「omsa」 です。

したがって、Server Administrator を実行している 「myOmsa」 という名前のコンピュータの場合、デフォルト名は 「myOmsa-omsa」 となります。これは、スナップインツールを使って

Active Directory で定義されている Server Administrator の名前です。ユーザー特権を検索するには、この名前が Active Directory のアプリケーションオブジェクトの名前と一致する必要があります。

メモ： このコマンドは、Windows オペレーティングシステムが稼動するシステムにのみ適用できます。

表 4-16 は、コマンドの有効なパラメータを表示します。

表 4-16 Active Directory サービスの設定パラメータ

「名前=値」のペア	説明
prodname=<テキスト>	Active Directory の設定変更を適用する製品を指定します。**Prodname** は、**omprv32.ini** で定義した製品の名前を指します。Server Administrator の場合、これは 「omsa」 です。
enable=<true | false>	**true**: Active Directory サービスの認証サポートと **Active Directory ログイン** オプション をログインページで有効にします。 **false:** Active Directory サービスの認証サポートと **Active Directory ログイン** オプションをログインページで無効にします。**Active Directory ログイン** オプションが表示されない場合、ログインできるのはローカルマシンのアカウントのみです。
adprodname=<テキスト>	Active Directory サービスで定義されている製品の名前を指定します。この名前は、ユーザー認証のために製品を Active Directory の特権データに関連付けます。

omconfig preferences snmp

SNMP ルートパスワードを設定すると、システム管理者は重要なシステム管理介入を行うことができる SNMP 設定操作へのアクセスを制限することができます。SNMP ルートパスワードは、通常どおり（1 つのコマンドラインにすべてのパラメータを入力）か、またはインタラクティブに設定できます。

omconfig preferences snmp コマンドを使用して、 SNMP set 操作も設定できます。

メモ： 一部のオペレーティングシステム（例：VMware ESXi）の制限により、本リリースの OpenManage Server Administrator ですべての機能を利用できない場合もあります。

注意: インタラクティブモードは、SNMP ルートパスワードを設定するのに一層安全な方法です。 非インタラクティブモードでは、newpw と confirmnewpw オプションに入力する値は、入力したときにシステムのモニタに表示されます。インタラクティブモードでは、パスワードに入力した値は マスクされています。

SNMP ルートパスワードに設定するパラメータは、インタラクティブに設定しても非インタラクティブに設定しても同じです。

メモ： **setting=rootpw** を指定しても、その他の「名前＝値」ペアのパラメータを指定しない場合、インタラクティブモードを入力したことになり、コマンドラインは残りの値の入力を求めます。

表 4-17 は、コマンドの有効なパラメータを表示します。

表 4-17 SNMP ルートパスワードのパラメータ

「名前=値」のペア	説明
setting=rootpw	必須。
oldpw=<古いパスワード>	古い SNMP ルートパスワードを入力します。
newpw=<新しいパスワード>	新しい SNMP ルートパスワードを設定します。
confirmnewpw=<新しいパスワード>	新しい SNMP ルートパスワードを確認します。

omconfig preferences snmp setting=rootpwと入力すると、システムは、必須パラメータへの値の入力を求めます。

omconfig preferences snmp と入力する場合、初期コマンドラインのすべてのパラメータを提供する必要があります。たとえば、次のとおりです。

```
omconfig preferences snmp setting=rootpw oldpw=openmanage newpw=serveradmin confirmnewpw=serveradmin
```

表 4-18 SNMP Set 操作のパラメータ

「名前=値」のペア	説明
setting=snmpset	必須
enable=true	SNMP set 操作の有効化
enable=false	SNMP set 操作の無効化

たとえば、次のコマンドを使用して SNMP set 操作を無効にします。

```
omconfig preferences snmp setting=snmpset enable=false
```

メモ： SNMP set 操作の有効化または無効化を実行したあとで、変更を有効にするには、サービスを再起動します。対応 Microsoft Windows オペレーティングシステムを実行しているシステムでは、Windows SNMP サービスを再起動します。対応 Red Hat Enterprise Linux および SUSE Linux Enterprise Server オペレーティングシステムを実行しているシステムでは、 `srvadmin-services.sh restart` コマンドを実行して Server Administrator サービスを再起動します。

omconfig preferences useraccess

企業の方針によっては、Server Administrator に対して一部のユーザーが持つアクセスを制限した方がいい場合があります。**omconfig preferences useraccess** コマンドを使用すると、Server Administrator にアクセスできるユーザーまたはパワーユーザーの権利を与えたり拒否することができます。

表 4-19 は、コマンドの有効なパラメータを表示します。

表 4-19 システム管理者、パワーユーザーおよびユーザー用のユーザーアクセス有効化

コマンド	結果	説明
omconfig preferences useraccess enable=user	Server Administrator アクセスをユーザー、パワーユーザーおよびシステム管理者に与えます。	最も制限のないユーザーアクセスです。
omconfig preferences useraccess enable=poweruser	Server Administrator アクセスをパワーユーザーとシステム管理者に与えます。	ユーザーレベルのアクセス のみを除外します。
omconfig preferences useraccess enable=admin	Server Administrator アクセスをシステム管理者に のみ与えます。	最も制限的なユーザーアクセスです。

omconfig preferences webserver

Server Administrator ウェブサーバー環境において、Server Administrator ウェブサーバーの暗号化レベルおよび URL 起動ポイントを設定するには、**omconfig preferences webserver** コマンドを使用します。

表 4-20 は、このコマンドで使用できる「名前=値」のペアを表示します。

表 4-20 ウェブサーバーのプリファレンスの設定

「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
attribute=sslencryption	setting=<autonegotiate | 128bitorhigher>	**autonegotiate**: ウェブブラウザの設定に基づいて、自動的に暗号化レベルを設定します。 **128bitorhigher**: 暗号化レベルを 128 ビット以上に設定します。
attribute=seturl	host=<文字列> port=<値>	Server Administrator ウェブサーバー環境において、URL 起動ポイントを設定できるようになります。
attribute=signalgorithm	algorithm=<MD5 | SHA1 | SHA256 | SHA512>	MD5: キー署名アルゴリズムを MD5 に設定します。 SHA1: キー署名アルゴリズムを SHA1 に設定します。 SHA256: キー署名アルゴリズムを SHA256 に設定します。 SHA512: キー署名アルゴリズムを SHA512 に設定します。

たとえば、URL 起動ポイントを設定するには、次のコマンドを使用します。

```
omconfig preferences webserver attribute=seturl host=<名前, ip, fqdn> port=<番号>
```

ホストの入力値は、有効な IPv4 または IPv6 アドレス、あるいは有効なホスト名にする必要があります。

署名アルゴリズムの値を設定するには、次のコマンドを使用します。

```
omconfig preferences webserver attribute=signalgorithm algorithm<MD5|SHA1|SHA256|SHA512>
```

ウェブサーバーのプリファレンス設定の詳細については、『*Dell OpenManage IT Assistant* ユーザーズガイド』を参照してください。

---

omconfig system / omconfig servermodule

omconfig system または **omconfig servermodule** コマンドを使って、ログのクリア、シャットダウン方法の決定、所有コストの初期値設定および編集、ハング状態にあるオペレーティングシステムの対応方法決定などが実行できます。

omconfig system alertaction / omconfig servermodule alertaction

omconfig system alertaction または **omconfig servermodule alertaction** コマンドを使って、コンポーネントに警告またはエラーイベントが発生した場合の対応方法を決定します。

メモ： 一部のオペレーティングシステム（例：VMware ESXi）の制限により、本リリースの OpenManage Server Administrator ですべての機能を利用できない場合もあります。

警告処置の定義

警告処置とは、指定した条件が満たされた場合にシステムが実行する操作です。警告処置は、イントルージョン、ファン、温度、電圧、電源装置、メモリ、および冗長に関し警告またはエラーイベントが発生した場合、どのように対処するかを事前に決定するものです。

たとえば、ファンプローブの最小警告しきい値が 600 RPMである場合、システムのファンプローブがファン 300 RPM を読み取ると、システムはファンプローブ警告を発生します。警告処置設定によって、このイベントの通知方法が決定されます。危険範囲または故障範囲を満たさない警告処置に関する、温度、電圧、プローブの読み取り値も設定できます。

警告処置を設定する構文

警告処置を設定するには 2 つの 「名前＝値」のペア が必要になります。最初の「名前=値」のペアはイベントタイプです。 2 番目の「名前=値」のペアはこのイベントで実行する操作です。たとえば、次のコマンドを参照してください。

```
omconfig system alertaction event=powersupply broadcast=true
```
または
```
omconfig servermodule alertaction event=powersupply broadcast=true
```

この場合、イベントは電源装置エラーで、操作は全ての Server Administrator ユーザーへのメッセージ送信です。

使用できる警告処置

表 4-21 は、警告処置の設定が可能なコンポーネントの警告処置を表示します。

表 4-21 警告イベントとエラーイベントに設定できる警告処置

警告処置の設定	説明
alert=true | false	**true**: システムのンソール警告を有効にします。有効になると、Server Administrator を実行しているシステムに取り付けられたモニタの画面表示上に警告メッセージが表示されます。 **false**: システムのンソール警告を無効にします。
broadcast=true | false	**true**: アクティブなターミナル (または リモートデスクトップ) セッション (Windows) があるすべてのユーザーまたはローカルシステム (Linux) のアクティブなシェルがあるオペレータに送信されるメッセージまたは警告を有効にします。 **false**: 警告ブロードキャストを有効にします。
clearall=true	このイベントの処置をすべてクリアします。
execappath=<文字列>	このウィンドウに説明されるコンポーネントのイベントが発生した場合に実行するアプリケーションの完全パスとファイル名を設定します。 **メモ：** Linux システムでは、管理または管理グルプにアップグレードされたユーザーまたはユーザーグループがこの警告処置を設定できません。
execapp=false	実行可能なアプリケーションを無効にします。

警告処理を設定できるコンポーネントとイベント

表 4-22 では警告処置を設定できるコンポーネントとイベントを一覧表示します。 コンポーネントはアルファベット順に表示しますが、警告イベントは常にコンポーネントのエラーイベントより先に表示します。

表 4-22 警告処置の設定可能なイベント

イベント名	説明
event=batterywarn	バッテリが警告値を検出した場合の処置を設定します。
event=batteryfail	バッテリプローブがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=fanwarn	バッテリが警告値を検出した場合の処置を設定します。
event=fanfail	ファンプローブがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=hardwarelogwarn	ハードウェアログが警告値を検出した場合の処置を設定します。
event=hardwarelogfull	ハードウェアログがいっぱいのときの処置を設定します。
event=intrusion	シャーシイントルージョンイベントを検出した場合の処置を設定します。
event=memprefail	メモリプローブがプリエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=memfail	メモリプローブがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=systempeakpower	電源消費プローブがピーク電力値を検出した場合の処置を設定します。
event=systempowerwarn	電源消費プローブが警告値を検出した場合の処置を設定します。

event=systempowerfail	電源消費プローブがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=powersupply	電源装置がエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=powersupplywarn	電源装置が警告値を検出した場合の処置を設定します。
event=processorwarn	プロセッサプローブが警告値を検出した場合の処置を設定します。
event=processorfail	プロセッサプローブがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=redundegrad	冗長コンポーネントが使用できなくなり、コンポーネントの完全冗長性が失われた場合の処置を設定します。
event=redunlost	1つまたは複数の冗長コンポーネントが使用できなくなり、冗長コンポーネントの損失または冗長性不能状態になった場合 の処置を設定します。
event=tempwarn	温度プローブが警告値を検出した場合の処置を設定します。
event=tempfail	温度プローブがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=voltwarn	電圧プローブが警告値を検出した場合の処置を設定します。
event=voltfail	電圧プローブがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=watchdogasr	ウォッチドッグ自動システム回復（ASR）がハングしたオペレーティングシステムに対して実行された後に、次のシステムスタートアップで Server Administrator が実行する処置を設定します。
event=removableflashmediapresent	システムがリムーバブルフラッシュメディアを検出した際に、Server Administrator が実行する処置を設定します。
event=removableflashmediaremoved	リムーバブルフラッシュメディアが取り外された際に、Server Administrator が実行する処置を設定します。
event=removableflashmediafail	リムーバブルフラッシュメディアにエラーが発生した際に、Server Administrator が実行する処置を設定します。
event=storagesyswarn	ストレージシステムが警告値を検出した場合の処置を設定します。
event=storagesysfail	ストレージシステムがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=storagectrlwarn	ストレージコントローラが警告値を検出した場合の処置を設定します。
event=storagectrlfail	ストレージコントローラがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=pdiskwarn	物理ディスクが警告値を検出した場合の処置を設定します。
event=pdiskfail	物理ディスクがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=vdiskwarn	仮想ディスクが警告値を検出した場合の処置を設定します。
event=vdiskfail	仮想ディスクがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=enclosurewarn	エンクロージャが警告値を検出した場合の処置を設定します。
event=enclosurefail	エンクロージャがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=storagectrlbatterywarn	ストレージコントローラバッテリーが警告値を検出した場合の処置を設定します。
event=storagectrlbatteryfail	ストレージコントローラバッテリーがエラー値を検出した場合の処置を設定します。

メモ： **storagectrlbatterywarn** および **storagectrlbatteryfail** イベントはモジュラーシステムでは使用できません。

警告処置の設定コマンドの例

以下に有効なコマンドの例を示します。各コマンドが成功すると、 次のメッセージが表示されます。

```
Alert action(s) configured successfully. (警告処置は正常に設定されました)。
```

電流プローブ処置の例

電流プローブが警告イベントを検出した場合に発するシステムのコンソール警告を無効にするには、次のように入力します。

```
omconfig system alertaction event=currentwarn alert=false
または
omconfig servermodule alertaction event=currentwarn alert=false
```

電流プローブがエラーイベントを検出した場合にメッセージの送信を有効にするには、次のように入力します。

```
omconfig system alertaction event=currentfail broadcast=true
または
omconfig servermodule alertaction event=currentfail broadcast=true
```

ファンプローブ処置の例

ファンプローブがエラー値を検出した場合に警告を発生させるには、次のように入力します。

```
omconfig system alertaction event=fanfail alert=true
または
omconfig servermodule alertaction event=fanfail alert=true
```

シャーシイントルージョン処置の例

シャーシイントルージョンの警告処置の全てをクリアするには、次のように入力します。

```
omconfig system alertaction event=intrusion clearall=true
または
```

```
omconfig servermodule alertaction event=intrusion clearall=true
```

ログをクリアするコマンド

メモ： 警告メッセージの詳細については、『*Dell OpenManage Server Administrator* メッセージリファレンスガイド』を参照してください。

omconfig system または **omconfig servermodule** コマンドを使用すると、警告ログ、コマンドログおよびハードウェアまたは ESM ログの 3 つのログがクリアできます。

警告ログをクリアするには、次のように入力します。

```
omconfig system alertlog action=clear
```
または
```
omconfig servermodule alertlog action=clear
```

メモ： 無効な RAC ユーザー名を入力すると、コマンドログが表示できないことがあります。コマンドログをクリアするとこの状態が解決します。

コマンドログをクリアするには、次のように入力します。

```
omconfig system cmdlog action=clear
```
または
```
omconfig servermodule cmdlog action=clear
```

ESM ログをクリアするには、次のように入力します。

```
omconfig system esmlog action=clear
```
または
```
omconfig servermodule esmlog action=clear
```

omconfig system pedestinations/omconfig servermodule pedestinations

omconfig system pedestinations または **omconfig servermodule pedestinations** コマンドを使用すると、警告先の IP アドレスを設定できます。

表 4-23 は、コマンドの有効なパラメータを表示します。

メモ： インデックスと IP アドレスをパラメータとして一緒に指定するか、コミュニティ文字列だけをパラメータに設定することができます。

メモ： インデックス 1 から 4 には IPv4 アドレス、インデックス 5 から 8 には IPv6 アドレスを使用できます。

表 4-23 omconfig system pedestinations/omconfig servermodule pedestinations

「名前=値」のペア	説明
destenable=true | false	**true**: 有効な IP アドレスが設定された後で、個別のプラットフォームイベントフィルタ宛先を有効にします。 **false**: 個別のプラットフォームイベントフィルタを無効にします。
index=number	宛先のインデックスを設定します。
ipaddress=ipv4|ipv6 address	宛先の IP アドレスを設定します。
communitystr=text	パスワードとして機能し、BMC と送信先管理ステーションの間で送信される SNMP メッセージを認証するのに使用されるテキストを設定します。

omconfig system platformevents/omconfig servermodule platformevents

omconfig system platformevents または **omconfig servermodule platformevents** コマンドを使用して、特定のプラットフォームイベントにシャットダウン措置 を設定します。また、プラットフォームイベントフィルタ警告生成を有効または無効にすることもできます。

注意: プラットフォームイベントシャットダウン処置を「none」または「電力低減」以外に設定していた場合、指定のイベントが発生するとシステムは強制終了されます。このシャットダウンはファームウェアによって開始され、最初にオペレーティングシステムや実行中のアプリケーションをシャットダウンせずに実行されます。

表 4-24 は、コマンドの有効なパラメータを表示します。

メモ： 警告設定は相互に排他的で、1 度に 1 つしか設定できません。 処置設定も相互に排他的で、1 度に 1 つしか設定できません。ただし、警告設定と処置設定は互いに排他的ではありません。

表 4-24 警告処置コマンドのパラメータ

動作	説明
alert=disable	SNMP 警告を無効にします。

alert=enable	SNMP 警告の送信を有効にします。
action=none	システムがハング、またはクラッシュしたときに処置を行いません。
action=powercycle	システムの電源をオフにしてから、一時停止し、再度電源をオンにして、システムを再起動します。
action=poweroff	システムの電源をオフにします。
action=powerreduction	プロセッサのスピードを、電力消費が下がって警告しきい値の以下の値に達するまで、減らします。システムの電力消費が警告しきい値以下である場合、プロセッサのスピードを増加します。 **メモ：** この処理は、非モジュラーシステムの場合のみ適用できます。
action=reboot	オペレーティングシステムを強制終了し、システム起動を開始して、BIOS チェックを実行してからオペレーティングシステムを読み込み直します。

表 4-25は、プラットフォームイベントを設定できるコンポーネントとイベントの一覧を表示します。コンポーネントはアルファベット順に表示しますが、警告イベントは常にコンポーネントのエラーイベントより先に表示します。

表 4-25 omconfig system platformevents

イベント名	説明
alertsenable=true | false	**true**: プラットフォームイベントフィルタ警告の生成を有効にします。 **false**: プラットフォームイベントフィルタ警告の生成を無効にします。 **メモ：** この設定は個別のプラットフォームイベントフィルタ警告設定とは無関係です。プラットフォームイベントフィルタで警告を生成するには、個別の警告とグローバルイベント警告の両方を有効にする必要があります。
event=batterywarn	バッテリがエラーの状態を保留していることをバッテリデバイスが検出した場合の処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=batteryfail	バッテリデバイスでバッテリが失敗したことが検出された場合に処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=discretevolt	別々の電圧プローブで電圧が低すぎて適切な操作が行えないことが検出された場合、処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=fanfail	ファンプローブでファンの稼動が遅すぎる、または動いていないことが検出された場合、処置を設定したり警告生成を有効または無効にします。
event=hardwarelogfail	ハードウェアログでエラー 値が検出された場合、警告生成を有効または無効にします。
event=intrusion	シャーシが開かれた場合に処置を設定したり、警告生成を有効または無効にします。
event=powerwarn	電源デバイスプローブで電源、電圧規制モジュール、DC から DC への 変圧器がエラー条件を保留にしている場合に処置を設定したり警告生成を有効または無効にします。
event=powerabsent	プロセッサプローブで電源装置が不在であることが検出された場合に処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=powerfail	電源デバイスプローブで電源、電圧規制モジュール、DC から DC への 変圧器が失敗した場合に処置を設定したり警告生成を有効または無効にします。
event=processorwarn	プロセッサプローブによってプロセッサがピークパフォーマンスまたは 速度を下回っていることが検出された場合に処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=processorfail	プロセッサプローブでプロセッサが失敗したことが検出された場合に処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=processorabsent	プロセッサプローブでプロセッサが不在であることが検出された場合に処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=redundegrad	システムのファンまたは電源が動作不能になり、その結果そのコンポーネントの冗長性が不完全になった場合に処置を設定するか、警告生成を有効または無効にします。
event=redunlost	システムのファンまたは電源が動作不能になり、その結果そのコンポーネントの冗長性が失われたか「動作している冗長コンポーネントがない」状態になったときに処置を設定するか、警告生成を有効または無効にします。
event=systempowerwarn	電源消費プローブが警告値を検出した場合の処置を設定します。
event=systempowerfail	電源消費プローブがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=tempwarn	温度プローブで温度が最大温度または最低温度に近づいていることが検出された場合に処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=removableflashmediapresent	システムがリムーバブルフラッシュメディアを検出した際に、Server Administrator が実行する処置を設定します。
event=removableflashmediaremoved	リムーバブルフラッシュメディアが取り外された際に、Server Administrator が実行する処置を設定します。
event=removableflashmediafail	リムーバブルフラッシュメディアにエラーが発生した際に、Server Administrator が実行する処置を設定します。
event=tempfail	温度プローブで温度が高すぎ、または低すぎて適切な操作ができないことが検出された場合に処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=voltfail	電圧プローブで電圧が低すぎて適切な操作が行えないことが検出された場合、処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=watchdogasr	システムがハングした、または応答していない場合、ASR によって設定された警告生成を有効または無効にします。

omconfig system events/omconfig servermodule events

omconfig system events または **omconfig servermodule events** コマンドを使用すると、システム上の SNMP トラップコンポーネントを有効および無効にします。

メモ： すべてのイベントの種類がシステム上にあるとは限りません。

omconfig system events コマンドの「名前＝値」ペアには 4 つのパラメータがあります。

- ソース

- タイプ
- Severity
- 索引

ソース

現在のところ、SNMP が唯一のサポートされた、システムコンポーネントイベント通知ソースなので、source=snmptraps が必要な「名前=値」のペアです。

```
omconfig system events source=snmptraps
または
omconfig servermodule events source=snmptraps
```

タイプ

イベントの種類は、イベントに関与するコンポーネントの名前を示しています。 表 4-26 は、システムイベントの種類の有効なパラメータを表示します。

表 4-26 システムイベントタイプパラメータ

「名前=値」のペア	説明
type=accords	AC 電源コードのイベントを設定します。
type=battery	バッテリーのイベントを設定します。
type=all	すべてのデバイスの種類のイベントを設定します。
type=fanenclosures	ファンエンクロージャのイベントを設定します。
type=fans	ファンのイベントを設定します。
type=intrusion	シャーシイントルージョンのイベントを設定します。
type=log	ログのイベントを設定します。
type=memory	メモリのイベントを設定します。
type=powersupplies	電源装置のイベントを設定します。
type=redundancy	冗長性のイベントを設定します。
type=systempower	システム電源のイベントを設定します。
type=temps	温度のイベントを設定します。
type=volts	電圧のイベントを設定します。
type=systempeakpower	システムピーク電力のイベントを設定します。
type=removableflashmedia	リムーバブルフラッシュメディアのイベントを設定します。

Severity

イベント設定のコンテキストでは、重大度は Server Administrator がコンポーネントの種類のイベントを通知する前にイベントがどれぐらい重大であるかを決定します。同じシステムシャーシに同じ種類の複数のコンポーネントがある場合、index=*<n>* パラメータを使用して、コンポーネントの番号に従ってイベントの重大度を通知するかどうか指定することもできます。 表 4-27 は、有効な重大度のパラメータを表示します。

表 4-27 システム設定重大度パラメータ

コマンド	結果	説明
omconfig system events type=<コンポーネント 名> severity=info **または** omconfig servermodule events type=<コンポーネント 名> severity=info	情報イベント、警告イベントおよび重要イベントの通知を有効にします。	最も制限の少ないイベント通知。
omconfig system events type=<コンポーネント 名> severity=warning **または** omconfig servermodule events type=<コンポーネント 名> severity=warning	警告イベントと重要イベントの通知を有効にします。	コンポーネントが通常の状態に戻ったときなどに、情報イベント通知を省略します。
omconfig system events type=<コンポーネント 名> severity=critical **または** omconfig servermodule events type=<コンポーネント 名> severity=critical	重要イベントのみの通知を有効にします。	制限的なイベント通知。
omconfig system events type=<コンポーネント 名> severity=none または omconfig servermodule events type=<コンポーネント 名> severity=none	イベント通知を無効にします。	イベント通知はありません。

索引

インデックスは、特定のコンポーネントのイベント番号を指します。インデックス パラメータはオプションです。インデックスパラメータを省略 すると、イベントは、すべてのファンなど指定された種類のすべてのコンポーネント用に設定されます。たとえば、システムに 2 つ以上のファンが含まれる場合、特定のファンのイベント通知を有効にしたり無効にできます。コマンド例を次に示します。

```
omconfig system events type=fan index=0 severity=critical
```
または
```
omconfig servermodule events type=fan index=0 severity=critical
```

このコマンド例の結果、Server Administrator はシステムシャーシの最初のファン（インデックス 0）が重大ファン RPM に達した場合にのみ SNMP トラップを送信します。

omconfig system webserver/omconfig servermodule webserver

omconfig system webserver または **omconfig servermodule webserver** コマンドを使用すると、ウェブサーバーを起動または停止します。 表 4-28 は、コマンドの有効なパラメータを表示します。

表 4-28 Web Server設定パラメータ

「名前=値」のペア	説明
action=start	Web Server を起動します。
action=stop	Web Server を停止します。
action=restart	Web Server を再起動します。

omconfig system recovery/omconfig servermodule recovery

omconfig system recovery または **omconfig servermodule recovery** コマンドを使って、オペレーティングシステムがハング状態またはクラッシュした場合に実行する操作を設定します。システムのオペレーティングシステムがハング状態にあると判断される前に、何秒間経過する必要があるかを設定することもできます。 表 4-29 は、コマンドの有効なパラメータを表示します。

メモ： タイマーの上限と下限はシステムのモデルと構成によって異なります。

表 4-29 回復パラメータ

「名前=値」のペア	説明
action=none	オペレーティングシステムがハングまたはクラッシュした場合に、何もしません。
action=reboot	オペレーティングシステムをシャットダウン後、システムを起動し、BIOS チェックを実行してオペレーティングシステムを再ロードします。
action=poweroff	システムの電源をオフにします。
action=powercycle	システムの電源をオフにしてから、一時停止し、再度電源をオンにして、システムを再起動します。パワーサイクルはハードドライブのようなシステム部品を再初期化する場合に役立ちます。
timer=<*n*>	システムでオペレーティングシステムがハングの状態にあると判断される前に経過する必要がある秒数（20 秒から 480 秒）

回復コマンド例

オペレーティングシステムのハング状態を検出してからパワーサイクルに移行させるには、次のように入力します。

```
omconfig system recovery action=powercycle
```
または
```
omconfig servermodule recovery action=powercycle
```

ハング状態が 120 秒継続してから回復操作を開始するよう設定するには、次のように入力します。

```
omconfig system recovery timer=120
```
または
```
omconfig servermodule recovery timer=120
```

omconfig system shutdown/omconfig servermodule shutdown

omconfig system shutdown または **omconfig servermodule shutdown** コマンドを使用すると、システムのシャットダウン方法を決定できます。デフォルト設定では、システムのシャットダウン時、電源をオフにする前にオペレーティングシステムをシャットダウンします。オペレーティングシステムをシャットダウンするとまず、システムの電源をオフにする前にファイルシステムを終了します。オペレーティングシステムを最初にシャットダウンしたくない場合は、パラメータ **osfirst=false** を使うことができます。 表 4-30 は、コマンドの有効なパラメータを表示します。

メモ： 一部のオペレーティングシステム（例：VMware ESXi）の制限により、本リリースの OpenManage Server Administrator ですべての機能を利用できない場合もあります。

表 4-30 シャットダウンパラメータ

「名前=値」のペア	説明
action=reboot	オペレーティングシステムをシャットダウン後、システムを起動し、BIOS チェックを実行してオペレーティングシステムを再ロードします。
action=poweroff	システムの電源をオフにします。
action=powercycle	システムの電源をオフにしてから、一時停止し、再度電源をオンにして、システムを再起動します。パワーサイクルは、ハードドライブなどのシステムコンポーネントを再初期化したいときなどに便利です。
osfirst=true | false	**true**: システムをシャットダウンする前にファイルシステムを終了して、オペレーティングシステムを終了します。 **false**: システムをシャットダウンする前に、オペレーティングシステムをシャットダウンしたりファイルシステムを閉じたりしません。

シャットダウンコマンド例

シャットダウン後再起動するように設定するには、次のように入力します。

```
omconfig system shutdown action=reboot
または
omconfig servermodule shutdown action=reboot
```

システムの電源をオフにする前に、オペレーティングシステムのシャットダウンを省略するには、次のように入力します。

```
omconfig system shutdown action=reboot osfirst=false
または
omconfig servermodule shutdown action=reboot osfirst=false
```

omconfig system thrmshutdown/omconfig servermodule thrmshutdown

omconfig system thrmshutdown または **omconfig servermodule thrmshutdown** コマンドを使用すると、サーマルシャットダウン 処置が設定できます。温度プローブが温度プローブ警告またはエラーイベントを検出する場合に、サーマルシャットダウンが発生するように設定することができます。

表 4-31 は、コマンドの有効なパラメータを表示します。

表 4-31 サーマルシャットダウンパラメーター

「名前=値」のペア	説明
severity=disabled | warning | failure	**disabled**: サーマルシャットダウンを無効にします。システム管理者による操作が必要です。 **warning**: 温度警告イベントが検出されると、シャットダウンを実行します。警告 イベントは、シャーシ内の温度プローブ（摂氏）が最大温度警告しきい値を越した場合に発生します。 **failure**: 温度エラーイベントが検出されると、シャットダウンを実行します。 エラーイベントは、シャーシ内の温度プローブ（摂氏）が最大温度エラーしきい値を越した場合に発生します。

サーマルシャットダウンコマンドの例

温度プローブがエラーイベントを検出した場合に温度シャットダウンをトリガするには、次のように入力します。

```
omconfig system thrmshutdown severity=failure
または
omconfig servermodule thrmshutdown severity=failure
```

システム管理者が **omconfig system shutdown** を手動で開始するように、サーマルシャットダウンを無効にするには、次のように入力します。

```
omconfig system thrmshutdown severity=disabled
または
omconfig servermodule thrmshutdown severity=disabled
```

目次ページに戻る

[目次ページに戻る]

omhelp コマンドの使用

Dell OpenManage Server Administrator バージョン 6.3 コマンドラインインタフェース ユーザーズガイド

- ヘルプコマンドの例

omhelp コマンドと、それと同等の <コマンド> **-?** を使用すると、CLI の詳しいヘルプテキストのインタフェースにアクセスできます。ヘルプには複数の詳細レベルがあります。

各完全修飾 CLI コマンドは、さまざまなパーツの変数番号があります。たとえば、コマンド(コマンド レベル 1)、1 つまたは複数のサブコマンド(コマンド レベル 2 、存在する 場合はコマンド レベル 3)および 1 つまたは複数の「名前=値」のペア。

-?(スペース - ダッシュ - 疑問符)をコマンドの後に入力すると、そのコマンド に関するヘルプを表示できます。

ヘルプコマンドの例

omconfig -? と入力すると、**omconfig** コマンドについてのヘルプが表示されます。このレベルでのヘルプは **omconfig** で使用できるサブコマンドを一覧表示します。

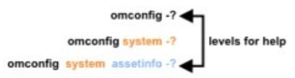
- about
- preferences
- chassis
- system

omconfig system -? と入力すると、CLI ヘルプに **omconfig system** で使用できるすべてのサブコマンドが一覧表示されます。

- alertaction
- alertlog
- assetinfo
- cmdlog
- esmlog
- events
- platformevents
- pedestinations
- recovery
- shutdown
- thrmshutdown
- webserver

図 2-1 は、コマンドのヘルプのレベルを示します。

図 2-1 コマンドの各レベルのヘルプ



次のように **omconfig system assetinfo** コマンド を解析することもできます。

<コマンドレベル 1 コマンドレベル 2 コマンドレベル 3> <名前=値ペア 1> [名前=値ペア 2]

コマンドレベル 1、2 および 3 は **omconfig system assetinfo で**、「名前=値」のペア 1 は **info=depreciation で**、および「名前=値」のペア 2 は **method=straightline** で表します。

減価償却方法を直線に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=depreciation method=straightline
```

CLI から次のメッセージが返されます。

Asset information set successfully. (資産情報は正常に設定されました)。

omconfig system assetinfo -? と入力すると§名前フィールドとオプションフィールドの値の割り当てに関する情報がヘルプに表示されます。**omconfig system assetinfo -?** 要求の部分的な結果は、 次のようになります。

assetinfo Set asset information.

1 つの情報値につき、オプションのパラメータを 1 つまたは複数、次のように指定します。表 2-1 **info=acquisition** のオプションパラメータを 表示します。

表 2-1 オプションパラメーター

情報値	**オプションパラメーター**
Info=acquisition	purchasecost=<数字> waybill=<数字> installdate=<mmddyy> purchasedate=<mmddyy> ponum=<数字> signauth=<テキスト> expensed=<はい|いいえ> costcenter=<テキスト> info=depreciation method=<テキスト> duration=<数字> percent=<パーセント> unit=<月|年|不明>

目次ページに戻る

目次ページに戻る

はじめに

Dell OpenManage Server Administrator バージョン 6.3 コマンドラインインタフェース ユーザーズガイド

- バージョン 6.3 の新機能
- Windows コマンド プロンプトからの CLI コマンドの使用
- プライマリ CLI コマンド
- CLI エラーチェックおよびエラーメッセージ
- CLI を使ったスクリプトと比較
- コマンド 構文の概要

Dell OpenManage Server Administrator のグラフィカルユーザーインタフェース（GUI）またはコマンドラインインタフェース（CLI）を使って、必要なシステム管理タスクを行うことができます。

報告と表示の機能を使うと、ネットワーク上のシステムの全般的な正常性の状態を把握することができます。コンポーネントレベルでは、電圧、温度、電流、ファンの分あたりの回転数（RPM）、メモリ機能、その他多くの重要コンポーネントの詳細が表示されます。概要表示では、システムに関連する所有コスト（COO）の詳細が報告されます。BIOS、ファームウェア、オペレーティング システムや、インストールされているソフトウェアすべてのバージョン情報も簡単に確認できます。

OpenManage Server Administrator のその他の機能は、次のとおりです。

- すべての対応プラットフォームの BIOS 設定の表示および設定のサポート。
- ベンダーライブラリの最新バージョンのサポート。
- OpenManage Server Administrator バージョン 6.2 の後にリリースされたすべてのプラットフォーム上で管理下ノードコンポーネントのサポート。
- CLI を使用した起動順序の設定、起動リストからのデバイスの追加および削除のサポート。
- SHA 256 証明書認証のサポート。
- ディストリビューション、バージョン、またはアーキテクチャに基づいて、Linux に OMSA と特定パッケージのインストールのサポート。

Server Administrator の設定機能を使うと、以下の項で詳しく説明する主要タスクを実行できます。

メモ： セキュリティに関する不安がある場合は、Server Administrator のホームページの代わりに CLI を使用して、Server Administrator Web サーバーをオフにすることもできます。CLI は Web サーバーを使用しません。**omconfig system webserver action=stop** コマンドは、Web サーバーを終了する場合に使用します。再起動後、自動的に Web サーバーが起動するので、このコマンドはシステムが起動するたびに発行する必要があります。詳細については、omconfig system webserver/omconfig servermodule webserverを参照してください。

メモ： Dell OpenManage Server Administrator のインストール後、Dell OpenManage CLI ユーティリティにアクセスするには、ログアウトし、再ログインしてパスをリセットしてください。

メモ： 本書で使用されておる技術用語については、デルのサポートサイトで 用語集 を参照してください。

バージョン 6.3 の新機能

OpenManage Server Administrator 6.3 の新しい機能は、次のとおりです。

- TCM（信頼済み暗号化モジュール）のサポート
- コントローラに接続した物理ディスクの電源管理のサポート
- コントローラのセキュリティパラメータを記述するためのサポート
- 以下もサポートしています。
  - vFlash タイプと利用可能なサイズを含む vFlash メディアの詳細
  - **omreport chassis** コマンドの NIC チームインタフェースのプロパティ
  - **omreport controller** コマンドのスロットの詳細

メモ： 対応オペレーティングシステムのリストについては、『*Dell* システムソフトウェアサポートマトリックス』を参照してください。このドキュメントにアクセスするには、**support.dell.com / manuals** にアクセスし、**ソフトウェア をクリックして**、ご利用の製品を選択します。

メモ： VMware ESXi オペレーティングシステム上のシステムでは、CLI コマンドはサポートされていません。

Windows コマンド プロンプトからの CLI コマンドの使用

Microsoft Windows オペレーティングシステムが稼動している場合、32 ビットのコマンドプロンプトを使用して Server Administrator CLI コマンドを発行します。32-ビットのコマンドプロンプトにアクセスするには、**スタート**ボタンをクリックして **プログラム**→ **アクセサリ** → **コマンドプロンプト**のショートカットを使用するか、**スタート** ボタンをクリックして **ファイル名を指定して実行** を選択し、**ファイル名を指定して実行** ダイアログボックスに `cmd.exe` と入力します。

コマンドラインウィンドウを起動する場合、**ファイルを指定して実行** ダイアログボックスに「command」と入力しないでください。この操作は、MS-DOS のエミュレータ **command.com** をアクティブにするため、その環境変数の制限によって CLI に問題が発生する可能性があります。

プライマリ CLI コマンド

Server Administrator の機能を実行するコマンドを以下に表示します。

- **omconfig**
- **omhelp**
- **omreport**

omconfig コマンドはオブジェクトのプロパティに割り当てる値を書き込みます。コンポーネントの警告しきい値を指定したり、警告やエラーイベントが発生した場合にシステムが実行する操作を指定できます。また、**omconfig** コマンドを使って、システムに関する資産情報パラメータに、システムの購入価格や管理タグ、設置場所などの特定の値を割り当てることもできます。

omhelp コマンドは CLI コマンドの簡潔なテキストヘルプを表示します。 **omhelp**は、ヘルプを必要とするコマンドの後に **-?** を入力する場合と同じです。たとえば、**omreport** コマンドのヘルプを表示する場合、次のどちらかのコマンドを入力します。

```
omhelp omreport
```

```
omreport -?
```

omreport コマンドは、システムの管理情報のレポートを生成します。

メモ: CLI コマンドの概要を見るには、omhelp と入力します。

表 1-1 は、Server Administrator が使用するプライマリ CLI コマンドを一覧表示します。この マニュアルでは、主要なコマンドについて各項で説明します。

表 1-1 CLI コマンドとこのマニュアルの項

主要な CLI コマンド	項の見出し	関連する項
omconfig	「計装サービスを使ったomconfig: コンポーネントの管理」	「omconfig システムまたは servermodule assetinfo: 所有コスト(Cost of Ownership)の編集」
omhelp	「omhelp コマンドの使用」	
omreport	「omreport: 計装サービスを使用したシステム状態の表示」	

メモ: omupdate コマンドは Server Administrator ではサポートされなくなり、Dell Update Package または Server Update Utility のコマンドに置き換えられました。各種コンポーネントをアップデートするには、the Dell Update Packageをダウンロードして、<、パッケージ名> **/s [/f]** を実行してください。該当する CLI 構文の詳細については、デルサポートサイト(**support.dell.com/manuals**)上にある『*Dell Update Packages for Microsoft Windows Operating Systems* ユーザーズガイド』、『*Dell Update Packages for Linux* ユーザーズガイド』または『*Server Update Utility* ユーザーズガイド』を参照してください。

さらに、CLI に関する役立つトピックは以下でも参照できます。

- 「CLI コマンド結果の使用方法」

CLI エラーチェックおよびエラーメッセージ

CLI コマンドを入力すると、CLI によってコマンドの構文が確認されます。コマンドを入力して そのコマンドが正常に実行されると、コマンドが 成功したことを示す メッセージが表示されます。

成功のメッセージ

omconfig コマンドを入力すると、そのコンポーネントに対するデータが 表示されます。

以下に、**omconfig** コマンドの例として、有効な CLI コマンドと、コマンドに成功した場合の メッセージを示します。

コマンド:

```
omconfig chassis temps index=0 warnthresh=default
```

メッセージ:

```
Temperature probe warning threshold value(s) set successfully.(温度プローブの警告しきい値が正常に設定されました)。
```

コマンド:

```
omconfig chassis biossetup attribute=numlock setting=on
```

メッセージ:

```
BIOS setup configured successfully. Change will take effect after the next reboot. (BIOS が正常に設定されました。変更は、次の再起動時に反映されます)。
```

コマンド:

```
omconfig system assetinfo info=depreciation duration=6
```

メッセージ:

```
Asset information set successfully. (資産情報は正常に設定されました)。
```

失敗のメッセージ

CLI の失敗を知らせるメッセージによって、コマンドに成功しなかった理由がわかります。コマンドに失敗する一般的な理由として、構文エラーや、コンポーネントが存在しないことが挙げられます。多くの場合、エラーメッセージで提供された構文情報を利用して、コマンドを正常に実行できます。

システム構成に存在しないコンポーネントや機能のコマンドを実行しようとすると、コンポーネントが見つからないというエラーメッセージが表示されます。

コマンド:

```
omconfig chassis volts index=3 minwarnthresh=3.3000
```

メッセージ例:

```
Error! Number with up to 3 digits after decimal point expected, read 3.3000 (Error!数字の期待値は小数点以下 3 桁までです。読み取り値：3.3000)
```

```
The value given by the command specifies more than 3 digits after the decimal point. A valid minimum warning threshold value for volts contains up to 3digits after the decimalpoint. (コマンドで指定された値は、小数点以下 3 桁を超えています。電圧の有効な最小警告しきい値は、小数点 以下 3 桁までです)。
```

次のように入力します。

```
omconfig chassis volts index=3 minwarnthresh=3.300
```

小数点以下 3 桁を使ってもう一度入力すると、別のエラーメッセージが表示されます。

```
Error! This voltage probe min warning threshold must be between 11.400 and 12.480. (Error!電圧プローブの最小警告しきい値は 11.400～12.480 でなければなりません)。
```

変更後のコマンド:

```
omconfig chassis volts index=3 minwarnthresh=11.500
```

メッセージ:

```
Voltage probe warning threshold(s) set successfully. (電圧プローブの警告しきい値は正常に設定されました)。
```

CLI を使ったスクリプトと比較

システム管理者は Server Administrator CLI を使って、バッチプログラムやオペレーティングシステムに実行させるスクリプトを作成できます。多くのシステムを有する企業では、システム管理者が設定スクリプトを使用して、システムの主要コンポーネントの警告しきい値を指定したり、警告やエラーイベントが発生した場合にシステムに実行させる一連の操作を指定します。最悪の場合は、システム管理者がスクリプトを作成してシステムをシャットダウンすると、被害を防ぐことができます。その後で、スクリプトを多数の管理システムに同時に配信して実行することができます。このシナリオでは、会社が大量のシステムを購入した場合でも円滑に設定でき、再設定が必要な既存のシステムに新しいシステム管理ポリシーを実装する場合も容易にできます。

同様のシナリオを使って、新しく購入した多数のシステムに詳細な資産情報を自動入力することも可能です。システムの製造元やリース会社、サポートの外部委託の有無、システムの保険会社名、減価償却方法などの情報の大半は同じです。全システムに共通する変数をスクリプト化し、管理したシステムのすべてに送信して実行します。システムに固有の資産情報はグループとしてスクリプト化し、その管理ノードに送信して実行します。たとえば、スクリプトを使うと、所有者、主要ユーザーの電話番号、管理タグなどの固有の変数をすべて指定できます。固有の値を自動入力するためのスクリプトは、システムのコマンドラインから 1 つずつ設定するのでなく、すべての固有変数を一度に設定します。

多くの場合、CLI は、特定のタスクを念頭に置いたユーザーがシステム情報を迅速に取得するのに役立ちます。CLI は、システムコンポーネントすべての包括的な概要を確認したい場合や、その情報を今後のシステム状態と比較する目的でファイルに保存する場合に理想的です。

CLI コマンドを使うと、システム管理者はバッチ プログラムやスクリプトを作成して、特定の時間に実行することができます。このようなプログラムが実行されると、システム高使用時とシステム最低使用時のファン RPM の比較など、特定コンポーネントに関するレポートをキャプチャできます。コマンド結果はファイルに転送して、あとで分析できます。システム管理者は、レポートを利用して、使用パターンを調整したり、新規システムリソースの購入を正当化したり、問題のあるコンポーネントの状態を監視するための情報を入手できます。

コマンド 構文の概要

コマンドの複雑性はさまざまです。最も単純なコマンドは、コマンドレベルが 1 だけです。たとえば、**omhelp** コマンドは単純なコマンドです。omhelp と入力すると、主要 CLI コマンドのリストが 表示されます。

次に複雑なコマンドレベルには、コマンドレベルの 1 と 2 があります。**about** コマンドはすべてコマンドレベル 2 の複雑性を表します。**omconfig about** および **omreport about**のコマンドは概要を表示します。 概要には、システムにインストールされているシステム管理ソフトウェアのバージョン情報(たとえば Server Administrator 1.*x*)が表示されます。

一部のコマンドには、コマンドレベル 1 とコマンドレベル 2 があり、「名前=値」のペアがあります。次のコマンドは、Server Administrator の環境詳細に関して Server Administrator を指令している例です。

```
omreport about details=true
```

コマンドレベル 1 が **omreport**、コマンドレベル 2 は **about** で、「名前=値」のペアは
details=trueです。

多くのコマンドでは、コマンドレベル 1、コマンドレベル 2、およびコマンドレベル 3 を使いますが、任意のパラメータ(「名前＝値」のペア)を必要としません。**omreport** コマンドはこのタイプに属します。例:

```
omreport system alertaction
```

上の例では、システムのコンポーネントに設定されている警告処置のリストが表示されます。

最も複雑なコマンドには 3 つのコマンドレベルがあり、複数の「名前＝値」のペアを持つことができます。2 つの「名前＝値」ペアの例を次に示します。

```
omconfig system assetinfo info=depreciation duration=3
```

9 つの「名前＝値」ペアの例を次に示します。

```
omconfig system assetinfo info=acquisition
purchasecost=<n> waybill=<n> installdate=<mmddyy> purchasedate=<mmddyy> ponum=<n> signauth=<テキスト>
expensed=<yes | no> costcenter=<テキスト>
```

各セクションでは、コマンド構文とコマンドに関する他の情報は、以下の該当フィールドを使用してフォーマットされます。

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	名前＝値のペア 1	名前＝値のペア 2

目次ページに戻る

[目次ページに戻る]

omreport: 計装サービスを使用したシステム状態の表示

Dell OpenManage Server Administrator バージョン 6.3 コマンドラインインタフェース ユーザーズガイド

- omreport コマンドのコマンド概要
- omreport コマンドのヘルプ
- omreport modularenclosure
- omreport about
- omreport chassis/omreport mainsystem コマンド
- omreport system コマンドまたはomreport servermodule コマンド
- omreport preferences コマンド

omreport コマンドを使用すると、システムコンポーネントの詳細が表示されます。一度に多数のシステムコンポーネントの概要を取得したり、特定のコンポーネントの詳細を取得することができます。この章では必要な詳細レベルを備えたレポートの取得方法について説明します。

この章に記述したコマンドは、特定 **omreport** コマンドの結果に表示されるフィールドを定義するかどうかで異なります。フィールドは特別な用法や、あまり知られていない用法がある場合にのみ定義されています。

他のすべてのコンポーネントについては、**omreport** を使ってコンポーネントの状態を表示し、**omconfig** を使ってコンポーネントを管理できます。管理するコンポーネントの設定方法については、「計装サービスを使ったomconfig: コンポーネントの管理」を参照してください。

omreportコマンドは、**omconfig** コマンドの実行に必要な情報を得るために使用できる場合があります。たとえば、温度プローブの警告イベントの最低温度を編集する場合は、設定するプローブのインデックスを知っておく必要があります。そのような場合は、**omreport chassis temps** を使って、プローブの一覧とそのインデックスを表示することができます。

表 3-1 omreport コマンドに対するシステム可用性

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	適用可能
omreport	*modularenclosure*	モジュラーシステム
	servermodule	モジュラーシステム
	mainsystem	モジュラーシステム
	system	非モジュラーシステム
	chassis	非モジュラーシステム
	preferences	モジュラー/非モジュラーシステム

パラメーター表の規則

コマンドに使えるパラメータをリストにする場合、パラメータはコマンドラインインタフェースに表示される順ではなくアルファベット順に並んでいます。

記号「 | 」はパイプと呼ばれることがあり、排他的論理和または演算子を表します。たとえば、「enable | disable 」はコンポーネントや機能を有効または無効にできますが、同時に有効と無効にすることはできません。

---

omreport コマンドのコマンド概要

メモ: この章では、可能なすべての **omreport** コマンドを一覧にしますが、お使いのシステムで使用できるコマンドはシステム構成によって異なります。**omreport** コマンドの結果の表示は、システムによって異なります。インストールされているコンポーネントのみのデータが表示されます。

メモ: システムに外部シャーシがある場合、表示される結果はオペレーティングシステムによって異なります。SUSE LINUX Enterprise Server および Red Hat Enterprise Linux のシステムでは、**omreport** コマンドは、メインシャーシ情報の後の別の項に外部シャーシ情報を表示します。Microsoft Windows システムでは、外部シャーシのデータは **omreport** 出力には表示されません。

表 3-2 は**omreport** コマンドの高レベルの概要です。「コマンドレベル 1」列には、一般的な **omreport** コマンドを示します。「コマンド レベル 2」には、**omreport** を使って表示できる主要オブジェクトやコンポーネント(バージョン情報、シャーシ、ストレージ、および システム)を示します。「コマンド レベル 3」には、レポートを表示できる特定のオブジェクトとコンポーネントを一覧にします。「ユーザー特権が必要」とは、コマンドを実行するのに必要な特権の種類を表し、U=ユーザー、P=パワーユーザー、A=アドミニストレータを表します。「用途」は **omreport** を使って実行できる操作に関する 一般的な説明です。コマンドの構文と使い方の詳細については、この項で後述します。

表 3-2 は、「バージョン情報」、「システム」、および「メインシステムシャーシ」に使用可能な **omreport** コマンドを示しています。ストレージコンポーネントの表示については、「omreport: 計装サービスを使用したシステム状態の表示」を参照してください。

表 3-2 omreport コマンドレベル 1、2 、3

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンド レベル 3	必要なユーザー権限	用途
omreport				
	modularenclosure		U, P, A	すべてのモジュラーシャーシの情報を表示します。
	about		U, P, A	Server Administrator のバージョン番号とプロパティを表示します。

		details=true	U, P, A	インストールされているすべての Server Administrator プログラムの情報を表示します。
	chassis/mainsystem		U, P, A	すべてのメインコンポネントの一般な状態を表示します。
		acswitch	U, P, A	冗長 AC 電力線がシステムでサポートされているフェールオーバー設定を表示します。
		batteries	U, P, A	バッテリーのプロパティ設定を表示します。
		bios	U, P, A	製造元、バージョン、およびリリース日などの BIOS 情報を表示します。
		biossetup	A	システム起動中に設定された BIOS 設定プロパティを表示します。
		fans	U, P, A	システムファンの状態としきい値を表示します。
		firmware	U, P, A	ファームウェアの名前とバージョンを表示します。
		frontpanel	U, P, A	**電源**ボタンや**マスク不可能割り込み**（NMI）ボタン（ システムに存在する場合）などのフロントパネルボタン設定が有効になっているか無効になっているかを表示します。また、フロントパネルのセキュリティアクセス情報とフロントパネル LCD 情報も表示します。
		fru	U, P, A	フィールドで交換可能なパーツ（FRU）の情報を表示します。
		hwperformance	U, P, A	システムの性能低下の状態および原因を表示します。
		info	U, P, A	メインシステムのシャーシコンポーネントの状態の概要を表示します。
		intrusion	U, P, A	システムのイントルージョンセンサーの状態を表示します。
		leds	U, P, A	色々な警告状況に従って LED が点滅するように設定したプロパティを表示します。
		memory	U, P, A	システムのメモリ配列のプロパティを表示します。
		nics	U, P, A	NIC およびチームインタフェースのプロパティを表示します。
		ports	U, P, A	I/O アドレス、IRQ レベル、コネクタの種類、最大速度など、システムのパラレルポートとシリアルポートのプロパティを表示します。
		processors	U, P, A	速度、製造元、プロセッサ ファミリなど、システムのプロセッサのプロパティを表示します。
		pwrmanagement	U, P, A	システムアイドル電力、システム最大潜在電力、および電力バジェット情報などの電源インベントリの詳細を表示します。
		pwrmonitoring	U, P, A	電源消費のプロパティを表示します。
		pwrsupplies	U, P, A	電源装置のプロパティを表示します。
		remoteaccess	U, P, A	リモートアクセスの一般情報を表示します。
		slots	U, P, A	システムの拡張スロットやその他のスロットタイプのプロパティを表示します。
		temps	U, P, A	システムの温度センサーの状態としきい値を表示します。
		volts	U, P, A	システムの電圧センサーの状態としきい値を表示します。
		removableflashmedia	U, P, A	システムの仮想フラッシュ（vFlash）およびセキュアデジタル（SD）カードの詳細を表示します。
	storage		U, P, A	ストレージ管理サービスの使用 を参照してください。
	system/servermodule		U, P, A	システムコンポーネントの高レベルな概要を表示します。
		alertaction	U, P, A	警告と失敗のしきい値に加え、不可欠なコンポーネントが警告や失敗状況を検出した場合に設定されている処置を表示します。
		alertlog	U, P, A	システム管理者がアラートログを表示できます。
		assetinfo	U, P, A	システムの所有コスト情報を表示します。
		cmdlog	U, P, A	システム管理者がコマンド ログを表示できます。
		esmlog	U, P, A	システム管理者がハードウェア ログを表示できます。
		events	U, P, A	システムの Simple Network Management Protocol（SNMP）イベント設定を表示します。
		operatingsystem	U, P, A	オペレーティング システム名とバージョンを表示します。
		pedestinations	U, P, A	プラットフォームイベント警告に対して設定された送信先を表示します。
		platformevents	U, P, A	リストの各プラットフォームイベントについてシステムの反応を表示します。
		recovery	P, A	ハング状態にあるオペレーティングシステムにシステムが応答する方法の設定を表示します。
		shutdown	P, A	シャットダウン操作の実行方法を表示します。
		summary	U, P, A	メインシステムシャーシ、ソフトウェア、ストレージなど、すべてのシステムコンポーネントの鍵となる事実を表示します。
		thrmshutdown	P, A	温度警告または失敗の状態が検出された場合に、実行されるシャットダウン操作を表示します。
		version	U, P, A	システム上のアップデート可能なコンポーネントすべての概要を表示します。
	preferences	webserver	U, P, A	Server Administrator ウェブサーバーの URL 情報を表示します。

omreport コマンドのヘルプ

omreport -? コマンドを使用すると、**omreport** に使用可能なコマンドの一覧が表示されます。

omreport <コマンドレベル 2> -?を使って レベル 2 のコマンドのバージョン情報、シャーシ、およびシステムのコマンドを表示します。 **omreport system -?** に関する次の情報は、**omreport chassis** コマンドのヘルプの表示にも利用できます。

omreport システムの有効なコマンドを一覧にするには、次のように入力します。

```
omreport system -? | more
```

omreport modularenclosure

モジュラーシステムの詳細を表示するには **omreport modularenclosure** コマンドを使用します。次のように入力します。

```
omreport modularenclosure
```

メモ: この CLI コマンドは、Dell OpenManage Server Administrator が Dell モジュラーシステムにインストールされている場合に利用可能です。

Server Administrator はモジュラーエンクロージャとシャーシ管理コントローラ CMC に関連する情報を表示します(利用可能である場合):

メモ: このガイドに記載されるすべての出力例と同様に、以下は 1 例にすぎず、実際の出力はシステム構成によって異なります。

```
Modular Chassis Information
Chassis Information
Attribute : Model
Value     : Modular Server Enclosure
Attribute : Lock
Value     : true
Attribute : Service Tag
Value     : 8RLNB1S
CMC Information
Attribute : Product
Value     : Chassis Management Controller (CMC)
Attribute : Description
Value     : The system component provides a complete set of remote management functions for Dell systems.
Attribute : Version
Value     : 1.0 (100)
Attribute : IP Address
Value     : 101.102.103.104
Attribute : IP Address Source
Value     : Dynamic
Attribute : IP Address Type
Value     : IPv4
Attribute : Remote Connect Interface
Value     : Launch CMC Web Interface
```

---

omreport about

omreport about コマンドを使用すると、システムにインストールされているシステム管理アプリケーションの製品名とバージョン番号を確認できます。以下は、**omreport about** コマンドの出力例です。

```
Product name : Dell OpenManage Server Administrator
Version      : 6.x.x
Copyright    : Copyright (C) Dell Inc. 1995-2009.All rights reserved.
Company      : Dell Inc.
```

Server Administrator 環境に関する詳細を知るには、以下のように入力します。

```
omreport about details=true
```

Server Administrator には多くのサービスが含まれており、それぞれ独自のバージョン番号を持っています。**内容** フィールドはサービスのバージョン番号やその他の役立つ詳細を報告します。以下の出力はその例です。システムにインストールされている Server Administrator の設定とバージョンによって出力が異なる場合があります。

```
Contains: Instrumentation Service 6.x.x
          Storage Management Service 2.x.x
          Sun JRE - OEM Installed Version 1.x.x
          Secure Port Server 3.x.x
          Core Service 1.x.x
          Instrumentation Service Integration Layer 1.x.x
          Storage Management Service Integration Layer 1.x.x
          Server Administrator 6.x.x
```

---

omreport chassis/omreport mainsystem コマンド

omreport chassis または **omreport mainsystem** コマンドを使用すると、シャーシ全体または特定のコンポーネントの詳細が表示されます。

omreport chassis/omreport mainsystem

次のように入力します。

```
omreport chassis
```
または
```
omreport mainsystem
```

メインシステムのシャーシまたはコンポーネントの一般的な状態が表示されます。

```
SEVERITY : COMPONENT
Ok       : Fans
Critical : Intrusion
Ok       : Memory
Ok       : Power Supplies
Ok       : Temperatures
Ok       : Voltages
```

omreport chassis acswitch/ omreport mainsystem acswitch

フェールオーバー設定された冗長電 AC 電力線がシステムに含まれる場合は、**omreport chassis acswitch または omreport mainsystem acswitch** コマンドを使用します。次のように入力します。

```
omreport chassis acswitch
```
または
```
omreport mainsystem acswitch
```

Server Administrator によって次のように出力されます。

```
AC Failover Switch
AC Switch Redundancy
Redundancy Status                              : Full
Number of devices required for full redundancy : 2
Redundancy Mode                                :
Redundancy Configuration                       : Input Source Line 1, upon redundancy restoration, return to Line 1
AC Power Lines
Status                                         : Ok
Location                                       : AC Power Line 1
AC Present                                     : Power Present
Active Source                                  : Active
Status                                         : Ok
Location                                       : AC Power Line 2
AC Present                                     : Power Present
Active Source                                  : Not Active
```

Server Administrator で **冗長性状態** と **冗長性モード** フィールドの値が報告されます。

omreport chassis batteries/omreport mainsystem batteries

バッテリーのプロパティを表示するには **omreport chassis batteries** または **omreport mainsystem batteries** コマンドを使用します。次のように入力します。

```
omreport chassis batteries
```
または
```
omreport mainsystem batteries
```

Server Administrator によってお使いのシステムのバッテリー情報の概要が表示されます。

omreport chassis bios/omreport mainsystem bios

現在の BIOS 情報を表示するために **omreport chassis bios/omreport mainsystem bios** コマンドを使用します。次のように入力します。

```
omreport chassis bios
```
または
```
omreport mainsystem bios
```

Server Administrator によってお使いの システムの BIOS 情報の概要が表示されます。

omreport chassis biossetup/omreport mainsystem biossetup

omreport chassis biossetup または **omreport mainsystem biossetup** コマンド を使用すると、通常はシステム起動時にのみ使用可能な BIOS セットアップパラメータが表示されます。

次のように入力します。

```
omreport chassis biossetup
```
または
```
omreport mainsystem biossetup
```

表 3-3 使用可能な BIOS セットアップパラメータを表示します。

メモ: BIOS セットアップパラメータがすべて表示されません。システムの起動中に設定された BIOS 設定プロパティのみが表示されます。

表 3-3 BIOS 設定パラメータ

パラメータ	説明
Attribute	
Bootsequence	システムのブートに使用するデバイスを表示します。
Numlock	キーパッドを数字キーとして使用できるかどうかを表示します。
Embedded Video Controller	内蔵ビデオコントローラ オプションが有効または無効になっているかを表示します。
Boot Mode	ブートモードが BIOS または UEFI(Unified Extensible Firmware Interface)に設定されているかを表示します。
Processor C1-E	プロセッサ C1-E の状態を表示します。
CPU Execute Disable	XD(Execute Disable)オプションが有効または無効になっているかを表示します。
Processor C State Control	プロセッサ C ステートコントロールのオプションが有効または無効になっているかを表示します。
Processor CMP	プロセッサごとに有効になっているコア数を表示します。
User accessible USB Ports	ユーザーアクセス可能 USB ポートが有効または無効になっているかを表示します。
CPU Virtualization Technology	仮想化テクノロジによって提供された追加のハードウェア機能を表示します。
AC Power Recovery Mode	停電後に入力電力が復元したときのシステム状態を表示します。
Embedded SATA Controller	内蔵 SATA コントローラが ATA モード、RAID モード、または無効かを表示します。
SATA port 0	SATAポート 0 の状態を表示します。
SATA Port 1	SATAポート 1 の状態を表示します。
Dual NIC (1/2)	PXE が付いた NIC 1 および NIC 2 が有効または無効になっているかを表示します。
Dual NIC (3/4)	PXE/iSCSI が付いた NIC 3 および NIC 4 が有効になっているか無効になっているかを表示します。
NIC 1	システムの起動中に最初の NIC が有効(PXE/iSCSI のあるなしにかかわらず)または無効になっているかを表示します。
NIC 2	システムの起動中に二番目の NIC が有効(PXE/iSCSI のあるなしにかかわらず)または無効になっているかを表示します。
NIC 3	システムの起動中に三番目の NIC が有効(PXE/iSCSI のあるなしにかかわらず)または無効になっているかを表示します。
NIC 4	システムの起動中に四番目の NIC が有効(PXE/iSCSI のあるなしにかかわらず)または無効になっているかを表示します。
Trusted Cryptographic Module (TCM)	TCM がオンまたはオフになっているかを表示します。
Trusted Platform Module (TPM) Security	信頼済みプラットフォームモジュールがオフか、起動前の測定付きでオンになっているか、あるいは起動前の測定なしで有効になっているかを表示します。
Internal USB Port (number)	内蔵 USB が有効または無効かを表示します。 **メモ:** システムに 1 つの USB ポートしか搭載されていない場合、Server Administrator は USB シーケンス番号を表示しない場合があります。
Operating System Watchdog Timer	オペレーティングシステムウォッチドッグタイマーが有効になっているか、無効になっているかを表示します。
HT Assist	プローブフィルタチップセットのオプションの状態を表示します。
Internal SD Card	内蔵 SD カードが有効になっているか、無効になっているかを表示します。
Bezel	システムリブート中にベゼルの削除イントルージョンが有効または無効になっているかを表示します。
Console Redirection	BIOS 画面が特定のシリアルポートにリダイレクト、またはオフになっているかを表示します。
Diskette	ディスケットが無効、自動有効、または 読み取り専用になっているかを表示します。
Demand Based Power Management (DBS)	DBS がシステムで有効または無効になっているかを表示します。
Embedded Hypervisor	内蔵されたハイパーバイザが有効または無効になっているかを表示します。
IDE	ドライブが有効または無効になっているかを表示します。
IDE Primary Drive 0	デバイスが自動検知され有効になっている、または無効になっているかを表示します。
IDE Primary Drive 1	デバイスが自動検知され有効になっている、または無効になっているかを表示します。
Intrusion	システムブート中にイントルージョンチェックが有効または無効になっているかを表示します。
Mouse	マウスが有効または無効になっているかを表示します。
Optical Drive Controller	オプティカルドライブが有効または無効になっているかを表示します。
Parallel port address	アドレスが LPT1、LPT2、LPT3 に存在するか、または無効になっているかを表示します。
Parallel port mode	パラレルポートに関連した設定を表示します。

Primary SCSI	デバイスがオンまたはオフになっているかを表示します。
RAID on motherboard	マザーボード RAID が RAID デバイスまたは SCSI デバイスとして検知されている、またはデバイスがシステムブート中に無効になっているかを表示します。
RAID Channel A	マザーボード RAID チャネル A が RAID デバイスまたは SCSI デバイスとして検知されているかを表示します。
RAID Channel B	マザーボード RAID チャネル B が RAID デバイスまたは SCSI デバイスとして検知されているかを表示します。
SATA	
Serial Port 1	シリアルポート 1 が COM ポート、COM ポート 1、COM ポート 3、COM1 BMC、BMC シリアル、BMC NIC、BMC RAC にマップされている、または無効になっているかかを表示します。
Serial Port 2	シリアルポート 2 が COM ポート、COM ポート 2、COM ポート 4 にマップされている、または無効になっているかを表示します。
Speaker	スピーカーがオンまたはオフになっているかを表示します。
USB or USBB	USB ポートが有効または無効になっているかを表示します。
Secondary SCSI	デバイスが有効または無効になっているかを表示します。
Serial Communications	COM ポート 1 と COM ポート 2 が有効か無効か、またコンソールリダイレクトの有無を表示します。
Console Redirection AfterBoot	システム起動後のコンソールリダイレクトが有効か無効かを表示します。
External Serial Connector	外部シリアルコネクタがシリアルデバイス 1、シリアルデバイス 2、リモートアクセスデバイスのうち、どれにマップされているかを表示します。
Console Redirection Failsafe Baud Rate	コンソールリダイレクト フェイルセーフ ボーレートの設定を表示します。
Serial Address Select	シリアルデバイスのポートアドレスを表示します。

利用可能なすべての起動デバイス、エイリアス名、起動順序を表示するには、次のように入力します。

```
omreport chassis biossetup attribute=bootorder
```

メモ: Linux システムにおいて、システム管理者 / システム管理者グループにアップグレードされたユーザー / ユーザーグループは、起動順序を閲覧することはできません。

omreport chassis currents/omreport mainsystem currents

現在、Server Administrator ではこのコマンドは使用できません。

omreport chassis removableflashmedia/omreport mainsystem removableflashmedia

システム上のリムーバブルフラッシュメディアの詳細とその正常性状態を表示するには、**omreport chassis removableflashmedia** または **omreport mainsystem removableflashmedia** を使用します。次のように入力します。

```
omreport chassis removableflashmedia
```
または
```
omreport mainsystem removableflashmedia
```

Server Administrator は、システムのリムーバブルフラッシュメディア情報の概要を表示します。

システムの構成によっては、以下が出力される場合があります。

```
Removable Flash Media Information

Health : Critical

Internal Dual SD Module Redundancy :
 Attribute : Redundancy

 Value     : Lost
Critical

Internal SD Modules Status
 Status         : OK

 Connector Name : System Board SD Status 1

 State          : Present

 Storage Size   : 512 MB
 Status               : OK

 Connector Name       : System Board SD Status 2

 State                : Present

 Storage Size         : 512 MB

 VFlash Media Details

 Connector Name       : System Board SD Status 1
```

```
Type                 : vFlash SD Card

State                : Present

Available Size       : 472 MB

Storage Size         : 512 MB
```

omreport chassis fans/omreport mainsystem fans

omreport chassis fans または **omreport mainsystem fans** コマンドを使用してファンプローブの状態および設定を表示します。次のように入力します。

```
omreport chassis fans index=n
```
または
```
omreport mainsystem fans index=n
```

index パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合は、Server Administrator によってシステムに存在する可能性のあるファンプローブに設定されている状態、読み取り値、しきい値の概要が表示されます。インデックスを指定する場合は、Server Administrator によって特定のファンプローブの概要が表示されます。

omreport chassis firmware/omreport mainsystem firmware

omreport chassis firmware または **omreport mainsystem firmware** cコマンドを使用すると、現在のファームウェアのプロパティが表示されます。次のように入力します。

```
omreport chassis firmware
```
または
```
omreport mainsystem firmware
```

Server Administrator はシステムのファームウェアのプロパティの概要を表示します。

omreport chassis frontpanel/omreport mainsystem frontpanel

omreport chassis frontpanel または **omreport mainsystem frontpanel** コマンドを使用すると、電源ボタンや**マスク不可能割り込み**（NMI）（システムに存在する場合）などのフロントパネルボタンの制御設定が有効か無効かを確認できます。

お使いのシステムに**電源**ボタンのオーバーライドが存在する場合に、**電源**ボタン オーバーライドが有効かどうかを確認できます。有効になっていると、**電源**ボタンはシステムの電源を**オン**および**オフ**に切り替えます。

システムに **NMI** ボタンが存在する場合に、**NMI** ボタンが有効かどうか確認できます。**NMI** ボタンは一部のオペレーティング システムでは、ソフトウェアとデバイスのエラーのトラブルシューティングに利用できます。

フロンパネル LCD セキュリティアクセス は、フロントパネルのセキュリティアクセス情報が、**表示**、**変更**、または **無効** のいずれに設定されているかを表示します。

フロントパネル LCD 情報 は、サービスタグ、リモート表示ステータスなどの情報を表示します。

omreport chassis fru/omreport mainsystem fru

omreport chassis fru または **omreport mainsystem fru** コマンドを使用すると、FRU 情報を表示することができます。以下 のように入力すると、

```
omreport chassis fru
```
または
```
omreport mainsystem fru
```

Server Administrator でシステムの FRU 情報の要約が表示されます。この情報は Server Administrator GUI、SNMP、CIM を経由して入手でき、主にトラブルシューティングに使用されます。

omreport chassis hwperformance/omreport mainsystem hwperformance

omreport chassis hwperformance または **omreport mainsystem hwperformance** コマンドを使用すると、システムのパフォーマンス低下の状態および原因を分かります。以下 のように入力すると、

```
omreport chassis hwperformance
```
または
```
omreport mainsystem hwperformance
```

Server Administrator でシステムのハードウェアパフォーマンスの低下情報の要約が表示されます。

メモ: このコマンドは、PMBus をサポートする一部の Dell *xx0x* システムにのみ適用できます。

システムの構成によっては、以下が出力される場合があります。

```
Hardware Performance

Index                : 0
```

```
Probe Name           : System Board Power Optimized

Status               : Normal

Cause                : [N/A]
```

omreport chassis info/omreport mainsystem info

omreport chassis info または **omreport mainsystem info** コマンドを使用すると、インストールされているコンポーネントのバージョンの概要が表示されます。

omreport chassis info index=*n*
または
omreport mainsystem info *index*=*n*

index パラメータはシャーシ番号を指定し、オプションになっています。インデックスを指定しない場合は、Server Administratorによって各シャーシの概要が表示されます。インデックスを指定する場合は、Server Administrator によって特定のシャーシの概要が表示されます。

システムの構成によっては、以下が出力される場合があります。

```
Index                                     : 0
Chassis Name                              : Main System Chassis
Host Name                                 : everglades
Baseboard Management Controller Version   : 1.80
Primary Backplane Version                 : 1.01
Sensor Data Record Version                : SDR Version 0.33
Chassis Model                             : PowerEdge 1750
System Revision Name                      : II
Chassis Lock                              : Present
Chassis Service Tag                       : 8RLNB1S
Chassis Asset Tag                         :
Flash chassis indentify LED state         : Off
Flash chassis indentify LED timeout value : 300
```

omreport chassis intrusion

omreport chassis intrusion コマンドを使用すると、システムのカバーが開いているかどうかを確認できます。イントルージョンは、システムのコンポーネントを盗んだり、システムを無断で保守しようとする者がいる可能性を示している場合があるため、Server Administrator ではシャーシイントルージョンを記録します。次のように入力します。

omreport chassis intrusion

次のようなメッセージが表示されます。

```
Status (状態)          : OK

Probe Name (プローブ名) : Main chassis intrusion (メインシャーシイントルージョン)

State (状態)           : Chassis is closed (シャーシは閉じています)
```

omreport chassis leds/omreport mainsystem leds

omreport chassis leds または **omreport mainsystem leds** コマンドを使用すると、ハードドライブフォールトのクリアがサポートされているかどうかと、どの重大度レベルで LED が点滅するかを確認できます。次のように入力します。

omreport chassis leds index=*n*
または
omreport mainsystem leds index=*n*

index パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合は、Server Administrator によってシャーシ 0 の LED 情報の概要が表示されます。インデックスを指定する場合は、Server Administrator によって特定のシャーシの概要が表示されます。

次に出力例を示します。

```
Flash chassis indentify LED state         : オフ

Flash chassis indentify LED timeout value : 300
```

omreport chassis memory/omreport mainsystem memory

omreport chassis memory or **omreport mainsystem memory** コマンドを使用するとシステムの各メモリモジュールスロットの詳細を表示できます。システムが冗長メモリをサポートしている場合は、システムに実装されているメモリ冗長のステータス、状態、種類も表示されます。次のように入力します。

```
omreport chassis memory index=n
または
omreport mainsystem index=n
```

index パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合は、Server Administrator によってシステムのすべてのメモリモジュール情報が表示されます。インデックスを指定する場合は、Server Administrator によって特定のメモリモジュールの概要が表示されます。

以下は、使用中のメモリスロットの出力例です。

```
Index          : 1
Status         : OK
Connector Name : DIMM_B
Type           : SDRAM-SYNCHRONOUS
Size           : 256 MB
```

使用されていないメモリスロットには、まだコネクタ名が付いています。以下は、使用されていないメモリスロットの出力例です。

```
Index          : 2
Status         : Unknown
Connector Name : DIMM_D
Type           : Not Occupied
Size           : Unknown
```

システムが冗長メモリをサポートしている場合は、冗長出力が次のように表示されます。

```
Memory Redundancy
Redundancy Status        : Full
Fail Over State          : Inactive
Redundancy Configuration : SpareBank
Attributes               : Location
Memory Array 1           : Proprietary Add-on Card
Attributes               : Use
Memory Array 1           : Unknown
Attributes               : Installed Capacity
Memory Array 1           : 1536 MB
Attributes               : Maximum Capacity
Memory Array 1           : 12288 MB
Attributes               : Slots Available
Memory Array 1           : 12
```

omreport chassis nics/omreport mainsystem nics

NIC およびチームインタフェースのプロパティを表示するには **omreport chassis nics** または **omreport mainsystem nics** コマンドを使用します。

NIC プロパティを表示するには、次のように入力します。

```
omreport chassis nics index=n
または
omreport mainsystem nics index=n
```

index パラメータはオプションです。index パラメータを指定しない場合、Server Administrator は、システムのすべての NIC のプロパティと **インデックス**(NIC カード番号)、**インタフェース名**、**ベンダー**、**説明**、**接続状態**、および **スロット** の各フィールドの値を表示します。

index パラメータを指定した場合、Server Administrator は、特定の NIC のプロパティと **物理インタフェース**、**インタフェース**、**IPv4 アドレス**、**IPv6 アドレス**、**物理インタフェースの受信統計**、**物理インタフェースの送信統計**、**インタフェースの受信統計**、および **インタフェースの送信統計** の各フィールドの値を表示します。

チームインタフェースのプロパティを表示するには、次のように入力します。

```
omreport chassis nics config=team index=n
または
omreport mainsystem nics config=team index=n
```

メモ: このコマンドは、システムでチームインタフェースが設定されている場合のみ、適用できます。チームインタフェースは、Broadcom などの NIC ベンダーツールを使用して設定できます。

index パラメータはオプションです。index パラメータを指定しない場合、Server Administrator は、システムのすべてのチームインタフェースのプロパティと **インデックス**(NIC カード番号)、**インタフェース名**、**ベンダー**、**説明**、および **冗長性状態** の各フィールドの値を表示します。

index パラメータを指定した場合、Server Administrator は、特定 NIC のチームインタフェースの詳細と チームインタフェース、**インタフェース**、**IPv4 アドレス**、**IPv6 AhX**、**チームインタフェースの受信統計**、**チームインタフェースの送信統計**、**インタフェースの受信統計**、および **インタフェースの送信統計** の各フィールドの値を表示します。

omreport chassis ports/omreport mainsystem ports

omreport chassis ports または **omreport mainsystem ports** コマンドを使用すると、システムのパラレルポートとシリアルポートのプロパティが表示されます。

ポート タイプ、**外部名**、**ベース I/O アドレス**、**IRQ レベル**、**コネクタタイプ**、 および **最大速度**フィールドの値が表示されます。

ポートのタイプ は各システムポートタイプの詳細で、シリアル、パラレル、USB などのポートや、ポインティングデバイス、キーボードなどポートに接続されるデバイス種類ごとのポート名が示されます。

外部名 はシリアルまたはパラレル、USB、マウス、キーボードなどのポート名です。

ベース I/O アドレス は 16 進数で表される開始 I/O アドレスです。

IRQ レベル はシステムのハードウェア割り込みです。ハードウェア割り込みはイベントがモデムまたはプリンタのような周辺機器で開始または終了したことをシステムの CPU に通知します。周辺機器内部接続カードで通信する場合、IRQ レベルは、割り込み要求を送信しているデバイスの種類を 識別する一般的な方法です。

コネクタタイプ はプラグまたはケーブルの種類と 2 つ のデバイスを接続するプラグを指し、この場合は外付けデバイスをシステムに取り付けるコネクタの種類を指します。コネクタタイプは数多く、それぞれ異なる種類をシステムに接続するように設計されています。例としては DB-9 Male、AT、アクセス バス、PS/2 などが挙げられます。

最大 速度 はポート速度です。ポート速度は入力/出力 チャネルのデータ転送レートを指し、1 秒あたりのビット数で測定されます。通常、シリアルポートの最大速度は 115 Kbps で、USB バージョン 1 *x* ポートの最大速度は 12 Kbps です。

omreport chassis processors/omreport mainsystem processors

omreport chassis processors または **omreport mainsystem processors** コマンドを使用してシステムのプロセッサのプロパティ を表示できます。

次のフィールドの値が表示されます:**インデックス、状態**、**コネクタ名**、**プロセッサのブランド、プロセッサバージョン、現在の速度、状況**、および **コア数**。

インデックス は、プロセッサの番号を指します。

状態 は、プロセッサの現在の状態を指します。

コネクタ名は、システムのプロセッサ スロットを占有するデバイス名またはデバイス番号を指します。

プロセッサのブランド は、Intel Itanium、Intel Pentium III、Intel Xeon、または AMD Opteron などのメーカーが製造するプロセッサの種類です。

プロセッサバージョン は、プロセッサのモデルとステッピング番号を指します。

現在の スピード はシステム起動時の実際のプロセッサの速度を MHz で表したものです。

状況 は、プロセッサスロットが有効か無効かを示します。

コアカウント は、1 つのチップに内蔵されたプロセッサ数を表したものです。

特定のプロセッサの機能およびキャッシュプロパティ

特定のコネクタ上のプロセッサのキャッシュプロパティを調べるには、次のように入力します。

```
omreport chassis processors index=n
または
omreport mainsystem processors index=n
```

index パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合は、すべてのプロセッサのプロパティが表示されます。インデックスを指定する場合は、特定のプロセッサのプロパティが表示されます。

以下のフィールドは特定のマイクロプロセッサの現在の能力のために定義されます。

Intel プロセッサの場合

- 64-bit サポート
- ハイパースレディング (HT)
- Virtualization Technology (VT)
- Demand-Based Switching (DBS)
- Execute Disable (XD)
- ターボモード

AMD プロセッサの場合

- 64-bit サポート
- AMD-V
- AMD PowerNow!
- No Execute (NX)

特定のマイクロプロセッサ上のキャッシュには、以下のフィールドが定義されます。そのキャッシュがプロセッサの内部にある場合、キャッシュレポートにフィールドは表示されません。

- 速度
- キャッシュデバイスがサポートしている種類
- キャッシュデバイス現在の種類
- 外部ソケット名

メモ: 一部のオペレーティングシステム(例:VMware ESXi)の制限により、本リリースの OpenManage Server Administrator ですべての機能を利用できない場合もあります。

特定プロセッサ上のキャッシュごとに報告されるフィールド

特定プロセッサ上のキャッシュごとに対して以下のフィールドが表示されます。

状態 は、そのプロセッサ上のキャッシュの状態が有効か無効かを報告します。

レベル は、それが 1 次キャッシュか 2 次キャッシュかを示します。1 次キャッシュは、プロセッサに内蔵されたメモリバンクです。2 次キャッシュは、1 次キャッシュに転送されるデータのステージ領域です。2 次キャッシュは、プロセッサ内に内蔵される場合とプロセッサ外部のメモリチップに搭載される場合があります。内部プロセッサキャッシュはレベル 1（または L1）と呼びます。L2 キャッシュは Intel Pentium プロセッサ システムの外部キャッシュで、2 次的 にアクセスされるキャッシュです。L1 または L2 という呼び名は、そのキャッシュの物理的な場所（内部または外部）を示すものではなく、どちらのキャッシュが最初にアクセスされるかを示しています（L1、つまり内部）。

速度 はキャッシュがメインメモリからプロセッサへデータを転送するときの速度レートを示します。

最大サイズ はそのキャッシュの最大メモリ容量を KB で表します。

インストールサイズ はそのキャッシュの実サイズです。

種類 はそれが 1 次キャッシュか 2 次キャッシュかを示します。

場所 はプロセッサ上、またはプロセッサ外のチップセット上のキャッシュの場所です。

書き込みポリシー はキャッシュの書き込みサイクル方法を示します。書き戻しポリシーでは、キャッシュはバッファとして機能します。プロセッサが書き込みサイクルを開始すると、キャッシュはデータを受け取ってサイクルを停止します。その 後、システムバスが利用可能になると、キャッシュはそのデータをメインメモリに書き戻します。

ライトスルーポリシーでは、プロセッサがキャッシュ経由でメインメモリに書き込みます。データがメインメモリに格納されるまで書き込みサイクルは完了しません。

結合性はメインメモリの内容を キャッシュに格納するときの方法を示します。

- フルアソシエーティブキャッシュ方式では、メインメモリのラインはキャッシュのどの場所にでも格納できます。
- 4 ウェイセットアソシエーティブキャッシュ方式では、メモリ内の特定の 4 ラインをキャッシュ内の同一の 4 ラインに直接マップします。
- 3 ウェイセットアソシエーティブキャッシュ方式では、メモリ内の特定の 3 ラインをキャッシュ内の同一の 3 ラインに直接マップします。
- 2 ウェイセットアソシエーティブキャッシュ方式では、メモリ内の特定の 2 ラインをキャッシュ内の同一の 2 ラインに直接マップします。
- 1 ウェイセットアソシエーティブキャッシュ方式では、メモリ内の特定ラインをキャッシュ内の同一ラインに直接マップします。

たとえば、メモリ内のページのライン 0 はキャッシュメモリ内のライン 0 に格納されます。

キャッシュデバイス対応の種類 は、そのデバイスが サポートできる SRAM（Static Random Access Memory）の種類を示します。

キャッシュデバイス現在の種類は、現在搭載済みで、そのキャッシュが サポートしている SRAM の種類を示します。

外部ソケットシルクスクリーン名は、ソケットの隣りのシステムボードに刻印される名前です。

エラー修正の種類 は、このメモリで実行される ECC（エラー検査と訂正）の種類を示します。たとえば、訂正可能な ECC または訂正不可能な ECC が挙げられます。

この報告には、マイクロプロセッサ上に存在する各キャッシュ情報が示されます。

omreport chassis pwrmanagement/omreport mainsystem pwrmanagement

omreport chassis pwrmanagement または **omreport mainsystem pwrmanagement** コマンドを使うと、システムの電力バジェットキャップと電源管理プロファイルを表示できます。値は、設定に基づいて、ワットまたは英熱量毎時単位で表示されます。次のように入力します。

```
omreport chassis pwrmanagement
```
または
```
omreport mainsystem pwrmanagement
```

システムの各電源装置の以下のフィールドの値が表示されます。

最大性能、アクティブ電源コントローラ、OS 制御、カスタム

カスタム属性には次のようなものがあります。

CPU 電源と性能管理、メモリ電源と性能管理、ファン電源と性能管理

メモ: **omreport chassis pwrmanagement** と **omreport mainsystem pwrmanagement** コマンドは、電源管理バス（PMBus）をサポートするいくつかの Dell *xx1x* システムにのみ適用されます。

```
Power Inventory

      Attribute :   System Idle Power
      Value     :   153 W
      Attribute : : System Maximum Potential Power
      Value         597 W

Power Budget

      Attribute : : Enable Power Cap
      Values        Enabled
                :
      Attribute :   Power Cap
      Values        400 W (56%)
```

omreport chassis pwrmonitoring/omreport mainsystem pwrmonitoring

omreport chassis pwrmonitoring または **omreport mainsystem pwrmonitoring** コマンドを使用してシステムの電力消費のプロパティ を表示できます。値は、設定に基づいて、ワッ

トまたは 英熱量毎時単位で表示されます。次のように入力します。

```
omreport chassis pwrmonitoring
```
または
```
omreport mainsystem pwrmonitoring
```

システムの各電源監視プロファイルの以下のフィールドの値が表示されます。

- 電力消費量ステータス
- プローブ名
- 読み取り値
- 警告しきい値
- エラー警告しきい値
- アンペア数：場所と読み取り値
- 電源 トラッキング統計
- エネルギー消費量
- 測定開始時刻
- 測定終了時刻
- 読み取り値
- システムピーク電力
- システムピークアンペア数

メモ： **omreport chassis pwrmonitoring** または **omreport mainsystem pwrmonitoring** コマンドは PMBus をサポートするいくつかの Dell *xx0x* と *xx1x* システムにのみ適用できます。

表 3-4 omreport chassis pwrmonitoring/omreport mainsystem pwrmonitoring

「名前=値」のペア	説明
config=stats	電力統計をワット数で表示します。

```
Power Consumption Information
Power Consumption
      Index                  : 2
      Status                 : OK
      Probe Name             : System Board
      Reading                : System Level
      Warning Threshold      : 539 W
      Failure Threshold      : 994 W
                             : 1400 W
Power Headroom
      Name                   : System Instantaneous Headroom
                             : 300 W
      Reading
                             : System Peak Headroom
      Name
                             : 340 W
      Reading
Amperage
      Location               : PS 1 Current 1
      Reading                : 1.2 A
      Location               : PS 2 Current 2
      Reading                : 1.0 A
Power Tracking Statistics
      Statistics             : Energy consumption
      Measurement Start Time : Thu Jun 28 11:03:20 2007
```

```
Measurement Finish Time : FRI Jun 28 11:05:46 2007

Reading
                        : 5.9 KWH


Statistics
                        : System Peak Power
Measurement Start Time
                        : Mon Jun 18 16:03:20 2007
Peak Time
                        : Wed Jun 27 00:23:46 2007
Peak Reading
                        : 630 W

Statistics
                        : System Peak Amperage
Measured Since
                        : Mon Jun 18 16:03:20 2007
Read Time
                        : Tue Jun 19 04:06:32 2007
Peak Reading
                        : 2.5 A
```

omreport chassis pwrsupplies/omreport mainsystem pwrsupplies

omreport chassis processors または **omreport mainsystem processors** コマンドを使用してシステムの電源装置のプロパティ を表示できます。次のように入力します。

```
omreport chassis pwrsupplies
```
または
```
omreport mainsystem pwrsupplies
```

システムの各電源監視プロファイルの以下のフィールドの値が表示されます。

- 状態
- 場所
- タイプ
- 低角入力電圧（ワット単位）
- 最大出力ワット数
- オンライン状態
- 電源監視対応

omreport chassis remoteaccess/omreport mainsystem remoteaccess

DRAC がインストールされている場合、**omreport chassis remoteaccess** または **omreport mainsystem remoteaccess** コマンドを使って、ベースボード管理コントローラまたは Integrated Dell Remote Access Controller（BMC/iDRAC）および Remote Access Controller の一般情報を表示できます。

次のように入力します。

```
omreport chassis remoteaccess
```
または
```
omreport mainsystem remoteaccess
```

omreport chassis remoteaccess/omreport mainsystem remoteaccess コマンドの出力では各有効なパラメータをリストします。表 3-5 に、使用可能な設定を示します。

表 3-5 omreport chassis remoteaccess/omreport mainsystem remoteaccess

「名前=値」のペア	説明
config=additional	iDRAC6 上での IPv4 と IPv6 アドレスの現在の状態を報告します。
config=advsol	シリアルオーバーローカルエリアネットワーク（LAN）接続の BMC/iDRAC6 または リモートアクセス の詳細情報を報告します。
config=nic	LAN 接続に対する BMC/iDRAC6 またはた リモートアクセス の情報を報告します。
config=serial	BMC または リモートアクセスのシリアルポート情報を報告します。
config=serialoverlan	シリアルオーバー LAN 接続の BMC/iDRAC6 またはたリモートアクセスの詳細情報を報告します。
config=terminalmode	シリアルポートのターミナルモード設定を報告します。
config=user	BMC/iDRAC6 またはリモートアクセスユーザーの情報を報告します。

omreport chassis slots/omreport mainsystem slots

omreport chassis slots または **omreport mainsystem slots** コマンドを使用してシステムのスロットのプロパティ を表示できます。

次のように入力します。

```
omreport chassis slots index=n
```
または
```
omreport mainsystem slots index=n
```

index パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合は、システムのすべてのスロットのプロパティが表示されます。インデックスを指定する場合は、特定のスロットのプロパティが表示されます。

システムの各スロットの：**索引**、**スロット ID**、**アダプタ**、および **データ バス 幅**フィールドの値が表示されます。

索引 はシステムにあるスロットの数です。

スロット ID は、スロットの隣のシステムのマザーボードに印刷されたシルクスクリーン名です。英数字テキストはシステムの各スロットを独自に識別します。

アダプタ はスロットに合ったカード名とタイプを指し、たとえばストレージアレイコントローラ、SCSI アダプタ、iDRAC6 Enterprise、HBA などが含まれます。

データバスの幅 は、システムのコンポーネント間の情報経路の幅をビットで表したものです。データバスの幅の範囲は16～ 64 ビットです。

omreport chassis temps/omreport mainsystem temps

omreport chassis temps または **omreport mainsystem temps** コマンドを使用してシステムの温度プローブのプロパティ を表示できます。次のように入力します。

```
omreport chassis temps index=n
```
または
```
omreport mainsystem temps index=n
```

index パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合は、システムにある可能性のある温度プローブ用に設定された状態、読み取り値、しきい値などの概要が表示されます。インデックスを指定する場合は、特定の温度プローブの概要が表示されます。

omreport chassis volts/omreport mainsystem volts

omreport chassis volts または **omreport mainsystem volts** コマンドを使用してシステムの温度プローブのプロパティ を表示できます。次のように入力します。

```
omreport chassis volts index=n
```
または
```
omreport mainsystem volts index=n
```

index パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合は、システムにある可能性のある電圧プローブ用に設定された状態、読み取り値、しきい値などの概要が表示されます。インデックスを指定する場合は、特定の電圧プローブの概要が表示されます。

---

omreport system コマンドまたはomreport servermodule コマンド

omreport system または **omreport servermodule** コマンドを使用してログ、しきい値、所有コスト情報、およびシャットダウン処置と回復処理の設定方法の情報を表示できます。

omreport system/omreport servermodule

omreport system または **omreport servermodule** cコマンドを使用してシステムのコンポーネントの一般ステータスを表示できます。 **omreport system shutdown/omreport servermodule shutdown** のようなレベル 3 コマンドを指定すると **omreport system** または **omreport servermodule** で取得できる高レベルステータスの代わりに 1 つのコンポーネントの詳細な情報を取得できます。'

次のように入力します。

```
omreport system
```
または
```
omreport servermodule
```

システムに、メインシステムシャーシと直接接続している 最低 1 つのストレージデバイスの両方がある場合は、Server Administrator は以下の例に示すような概要が表示されます。

```
SEVERITY : COMPONENT
Ok       : Main System Chassis
Critical : Storage
```

ログ表示のコマンド

omreport system または **omreport servermodule** コマンドを使用して警告ログ、コマンドログおよびハードウェアまたは ESM ログのログを表示できまう。

メモ: 警告ログまたはコマンドログで無効な XML データ(選択対象で生成された XML データがうまくできていなかった場合など)、`omconfig system alertlog action=clear` または `omconfig system cmdlog action=clear` とタイプしてログをクリアすると問題を解決できます。今後のためにログ情報を保管しておきたい場合は、ログをクリアする前にログのコピーを保存しておくとよいでしょう。ログのクリアの詳細については、「ログをクリアするコマンド」を参照してください。

アラートログの内容を表示するには、次のように入力します。

```
omreport system alertlog
```
または
```
omreport servermodule alertlog
```

コマンドログのコンテンツを表示するには、次のように入力します。

```
omreport system cmdlog
```
または
```
omreport servermodule cmdlog
```

ESM ログのコンテンツを表示するには、次のように入力します。

```
omreport system esmlog
```
または
```
omreport servermodule esmlog
```

ESM ログの全般的な正常性の状態

omreport system esmlog または **omreport servermodule esmlog**, を入力すると、ESM ログが表示されます。報告の 1 行目はシステムハードウェアの総合的な正常性を反映しています。たとえば、Health: OKとなっている場合、ESM ログ に割り当てられている容量におけるメッセージの占有率がまだ 80 % 未満という意味です。ESM ログに割り当てられている容量の 80 % 以上が占有されると、次の警告 が表示されます。

```
Health: Non-Critical
```

警告が表示されたら、警告と重要の重大度の要因をすべて解決してから、ログをクリアします。

omreport system alertaction / omreport servermodule alertaction

omreport system alertaction または **omreport servermodule alertaction** コマンドを使用すると、システムコンポーネントでの警告やエラーイベントに対して設定されている警告処置の概要が表示されます。警告処置はコンポーネントに警告またはエラー イベントがある場合に、Server Administrator の応答方法を決定します。

omreport system alertaction または **omreport servermodule alertaction** コマンドは、コンポーネントに指定された警告処置を表示するのに役立ちます。コンポーネントの警告処置を設定するには **omconfig system alertaction** または **omconfig servermodule alertaction** コマンドを使用します。詳細については、「計装サービスを使ったomconfig: コンポーネントの管理」を参照してください。

メモ: 一部のオペレーティングシステム(例:VMware ESXi)の制限により、本リリースの OpenManage Server Administrator ですべての機能を利用できない場合もあります。

警告処置を表示できるコンポーネントとイベント

システムにコンポーネントまたはイベントが存在する場合、次のようなコンポーネントやイベントに関して警告処置のプロパティを表示できます。

- バッテリ警告
- バッテリエラー
- シャーシイントルージョン
- 電流プローブ警告
- 電流プローブエラー
- ファン警告
- ファン障害
- メモリプリエラー
- メモリエラー
- システム電源プローブ警告
- システム電源プローブはエラーを検出します。
- システムピーク電力
- 電源装置警告
- 電源装置エラー
- 冗長の低下
- 冗長の喪失
- 温度警告
- 不適切な温度

- 電圧警告
- 不適切な電圧
- プロセッサ警告
- プロセッサエラー
- ハードウェアログ警告
- ハードウェアログが一杯です
- ウォッチドッグ ASR
- ストレージシステム警告
- ストレージシステム 失敗
- ストレージ コントローラ 警告
- ストレージ コントローラ失敗
- 物理ディスク 警告
- 物理ディスク失敗
- 仮想ディスク警告
- 仮想ディスク失敗
- エンクロージャ警告
- エンクロージャ失敗
- ストレージ コントローラ バッテリー 警告
- ストレージ コントローラ バッテリー 失敗
- リムーバブルフラッシュメディア存在
- リムーバブルフラッシュメディア取り外し
- リムーバブルフラッシュメディア失敗

メモ: ストレージ コントローラバッテリー 警告 および ストレージ コントローラバッテリー 失敗 イベントはモジュラーシステムで利用できません。

メモ: システム電源プローブ警告はモジュラーシステムには適用されません。

omreport system assetinfo/omreport servermodule assetinfo

omreport system assetinfo または **omreport servermodule assetinfo** コマンドを使用すると、取得、減価償却、および保証情報などのシステムの所有コストデータが表示されます。このフィールドを設定するには、**omconfig system assetinfo** または **omconfig servermodule assetinfo** コマンドを使用します。詳細については、「omconfig システムまたは servermodule assetinfo: 所有コスト(Cost of Ownership)の編集」を参照してください。

omreport system events/omreport servermodule events

omreport system events または **omreport servermodule events** コマンドを使用すると、現在有効または無効の SNMP トラップが表示されます。この コマンドは、イベントが生成される各コンポーネントの概要を表示します。各コンポーネントについて、報告するように設定されている重大度と、報告されないように設定されている重大度がレポートに示されます。いくつか のコンポーネントの出力例を次に示します。

```
omreport system events
または
omreport servermodule events

Current SNMP Trap Configuration
-----------
System
-----------
Settings
Enable: Informational, Warning and Critical
Disable: None

---------------
Power Supplies
-----------
Settings
Enable: Informational, Warning and Critical
Disable: None

-----------
Fans
-----------
Settings
Enable: Critical
Disable: Informational and Warning

---------------------
Removable Flash Media
```

```
---------------------
Settings
Enable: Informational, Warning and Critical
Disable: None
```

完全なレポートには、イベントを生成できるシステムのすべてのコンポーネントの設定が一覧に なります。

特定タイプのコンポーネントを表示するには **omreport system events type=<コンポーネント名 >** または **omreport servermodule event type=<コンポーネント名 >コマンドを使用します。このコマンドは、イベントが生 成される各コンポーネントの概要を表 示します。** [表 3-6](#) **は、さまざまな種 類のコンポーネントのイベントを表 示します。**

メモ: 一部のオペレーティングシステム(例:VMware ESXi)の制限により、本リリースの OpenManage Server Administrator ですべての機能を利用できない場合もあります。

表 3-6 コンポーネントの種 類 別のシステムイベント

「名 前=値」のペア	説明
type=accords	AC 電源コードのイベントを報告します。
type=battery	バッテリのイベントを報告します。
type=fanenclosures	ファンエンクロージャのイベントを報告します。
type=fans	ファンのイベントを報告します。
type=intrusion	シャーシイントルージョンのイベントを報告します。
type=log	ログのイベントを報告します。
type=memory	メモリのイベントを報告します。
type=powersupplies	電源装置のイベントを報告します。
type=redundancy	冗長性のイベントを報告します。
type=systempower	システム電源のイベントを報告します。
type=temps	温度のイベントを報告します。
type=removableflashmedia	リムーバブルフラッシュメディアのイベントを報告します。
type=volts	電圧のイベントを報告します。

イベントの種 類のコマンド例

次のように入 力します。

```
omreport system events type=fans
または
omreport servermodule events type=fans
```

次に出 力 例を示します。

```
-----------
Fans
-----------
Settings
Enable: Critical
Disable: Informational and Warning
```

omreport system operatingsystem / omreport servermodule operatingsystem

omreport system operatingsystem または omreport servermodule operatingsystem coコマンドを使 用してオペレーティング システムの情 報を表 示できます。

omreport system pedestinations / omreport servermodule pedestinations

omreport system pedestinations または omreport servermodule pedestinations コマンドを使 用すると、プラットフォームイベントの警 告に対して設 定された送 信 先が表 示されます。表 示される送 信 先の数によっては、各 送 信 先アドレスに個 別の IP アドレスを設定できます。

次のように入 力します。

```
omreport system pedestinations
または
omreport servermodule pedestinations
```

omreport system pedestinations または omreport servermodule pedestinations コマンドの出 力では各 有効な パラメータをリストします。

メモ: システム上で設定できる実際の宛先数は、システムによって異なります。

[表 3-7](#) **に、使 用 可 能な設 定を示します。**

表 3-7 omreport system pedestinations/omreport servermodule pedestinations の設 定

出力	属性	説明
送信先リスト		
	宛先番号: 宛先1 宛先 IP アドレス: 101.102.103.104	**宛先 1**: 最初の宛先を表示します。 **101.102.103.104**: 最初の宛先の IP アドレス
	宛先番号: 宛先 2 宛先 IP アドレス: 110.120.130.140	**宛先 2**: 二番目の宛先を表示します。 **110.120.130.140**: 二番目の宛先のIP アドレス
	宛先番号: 宛先 3 宛先 IP アドレス: 201.202.203.204	**宛先 3**: 三番目の宛先を表示します。 **201:202:203:204**: 三番目の宛先のIP アドレス
	宛先番号: 宛先 4 宛先 IP アドレス: 210.211.212.213	**宛先 4**: 四番目の宛先を表示します。 **210.211.212.213**: 四番目の宛先のIP アドレス
送信先設定		
	attribute=communitystring	**communitystring**: パスワードとして機能し、BMC と送信先管理ステーションの間で送信される SNMP メッセージを認証するのに使用されるテキストを設定します。.

omreport system platformevents/omreport servermodule platformevents

omreport system platformevents または omreport servermodule platformevents コマンドを使用すると、リストの各プラットフォームイベントにシステムがどのように反応するかが表示されます。

omreport system recovery/omreport servermodule recovery

omreport system recovery または omreport servermodule recovery コマンドを使用すると、オペレーティングシステムがハング状態になった場合の対応方法が設定されているかどうかを確認できます。何秒経ったらオペレーティングシステムがハング状態にあると判断するかを表示することもできます。

omreport system shutdown/omreport servermodule shutdown

omreport system shutdown または omreport servermodule shutdown コマンドを使用すると、システムで保留中のシャットダウン処理が表示されます。シャットダウンのプロパティが設定されている場合は、このコマンドを実行するとプロパティが表示されます。

メモ: 一部のオペレーティングシステム（例:VMware ESXi）の制限により、本リリースの OpenManage Server Administrator ですべての機能を利用できない場合もあります。

omreport system summary/omreport servermodule summary

omreport system summary または omreport servermodule summary コマンドを使用すると、現在システムにインストールされているソフトウェアとハードウェアコンポーネントの包括的な概要が表示されます。

コマンド出力例

次のように入力します。

```
omreport system summary
または
omreport servermodule summary
```

CLI ウィンドウに表示される出力は、システムにインストールされているシステム管理ソフトウェア、オペレーティングシステム、およびハードウェアコンポーネントとオプションによって異なります。次の部分的コマンド結果は特有のもので、ご使いのシステムのハードウェア構成とソフトウェア 設定とは異なる場合があります。

```
System Summary
------------------
Software Profile
------------------
System Management

Name                          : Dell OpenManage Server Administrator

Version                       : 6.x.x

Description                   : Systems Management Software

Contains                      : Instrumentation Service 6.x.x
```

```
                            : Storage Management Service 3.x.x
                            : Sun JRE - OEM Installed Version 3.x.x
                            : Secure Port Server 1.x.x
                            : Dell OpenManage Core Service 1.x.x
                            : Instrumentation Service Integration Layer 1.x.x
                            : Storage Management Service Integration Layer 1.x.x
Operating System
Name                        : Microsoft Windows 2003 Server
Version                     : Service Pack 2(Build 2XXX)
System Time                 : Fri Sep 20 18:02:52 2XXX
System Bootup Time          : Wed Sep 18 18:37:58 2XXX
System
--------------
Host Name                   : svctag-dxxxxs
System Location             : Please set the value
Model                       : PowerEdge 1955
Life Cycle Controller       : Enabled
Asset Tag                   : Test
Service Tag                 : DXXXXS
Slot Number                 : Slot 01-02
Form Factor                 : Half Height Dual Width
Remote Access Information
Remote Access Device        : iDRAC6 Enterprise
vFlash Media                : Present
vFlash Media Type           : vFlash SD Card
vFlash Media Available Size : 922 MB
vFlash Media Size           : 976 MB
Processor 1
Processor Brand             : Intel(R) Xeon(R) CPU
Processor Version           : Model 15 Stepping 6
Voltage                     : 1400 mV
Processor 2
Processor Brand             : Intel(R) Xeon(R) CPU
Processor Version           : Model 15 Stepping 6
Voltage                     : 1400 mV
Memory
Total Installed Capacity    : 2048 MB
Memory Available to the OS  : 2048 MB
Total Maximum Capacity      : 32768 MB
Memory Array Count          : 1
Remote Access Controller
Remote Access Controller Information
Product                     : iDRAC6 Enterprise
IP Address                  : 192.xxx.x.xxx
IP Subnet                   : 255.xxx.x.xxx
IP Gateway                  : 192.xxx.x.xxx
IPv6 Address 1              : ::
IPv6 Address 2              : ::
IPv6 Gateway                : ::
Network Data
Network Interface 0
IP Address                  : [No Value]
Network Interface 1
IP Address                  : [No Value]
```

システム概要ハードウェア情報には、システムに存在するインストール済みの次の種類のコンポーネントに関するデータ値が含まれます。

システムの属性

- **ホスト名**
- **システムの場所**

- ライフサイクルコントローラ

メインシステムシャーシ / メインシステム

シャーシ

- シャーシモデル
- シャーシサービスタグ
- シャーシロック
- シャーシ管理タグ

リモートアクセス情報

- リモートアクセスデバイス
- VFlash メディア
- vFlash メディアサイズ

プロセッサ

システムの各プロセッサにつき、次の情報が一覧になります。

- プロセッサバンド
- プロセッサシリーズ
- プロセッサバージョン
- 現在の速度
- 最大速度
- 外部クロック速度
- 電圧

メモリ

- インストール合計容量
- オペレーティングシステムで使用可能なメモリ
- 最大容量
- メモリアレイカウント

メモリアレイ

システムの各メモリボードやモジュールについて、以下の詳細が一覧になります(たとえば、指定のスロット番号のシステムボードやメモリモジュール)。

- 場所
- 用途
- インストール済み容量
- 最大容量
- 使用できるスロット
- 使用中のスロット
- ECC の種類

BIOS

- メーカー
- BIOS バージョン
- リリース日

ファームウェア

- 名前
- バージョン

ネットワークデータ

システムでチームインタフェースが設定されている場合、各 NIC およびチームインタフェースの下記の詳細が表示されます。

- IP アドレス
- サブネットマスク
- デフォルトゲートウェイ
- MAC アドレス

ストレージエンクロージャ

システムに接続されている各ストレージエンクロージャについて、次の詳細が一覧表示されます。

- 名前
- サービスタグ

omreport system thrmshutdown / omreport servermodule thrmshutdown

omreport system thrmshutdown または omreport servermodule thrmshutdown コマンドを使用すると、サーマルシャットダウン処置に対して設定されているプロパティを表示できます。

サーマルシャットダウンで表示される 3 つのプロパティには、無効、警告、エラーがあります。CLI が次のメッセージを表示する場合、サーマルシャットダウン機能は無効になっています。

```
Thermal protect shutdown severity: disabled (サーマル保護シャットダウン重大度： 無効)
```

温度プローブが警告またはエラーイベントを検出したときにシャットダウンするようにシステムが設定されている場合は、次のどちらかのメッセージが表示されます。

```
Thermal protect shutdown severity: warning
Thermal protect shutdown severity: failure
(サーマル保護シャットダウン重大度： 警告)
(サーマル保護シャットダウン重大度：エラー)
```

omreport system version / omreport servermodule version

omreport system version または omreport servermodule versionコマンドを使用すると、システムにインストールされている BIOS、ファームウェア、システム管理ソフトウェア、およびオペレーティングシステムのバージョン番号が表示されます。

コマンド出力例

次のように入力します。

```
omreport system version
または
omreport servermodule version
```

CLI ウィンドウに表示される出力は、システムにインストールされている BIOS、RAID コントローラ、およびファームウェアのバージョンによって異なります。次の部分的コマンド結果は特有の結果で、ご使用のシステムの設定結果と異なる場合があります。

```
Version Report

---------------------
Main System Chassis
---------------------

Name : BIOS
Version : 0.2.16

Name : BMC
Version : 0.26


Name : Primary Backplane
Version : 1.01
```

```
---------------
Software
---------------

Name : Microsoft Windows Server 2003, Enterprise Edition


Version : 5.2 <Build 3790: Service Pack 2><x86>


Name : Dell Server Administrator
Version : 6.x.x
```

omreport preferences コマンド

Server Administrator ウェブサーバーの URL 情報を表示するには、omreport preferences コマンドを使用します。

表 3-8 **は利用可能な属性を表示します。**

表 3-8 omreport preferences webserver

「名前=値」のペア	説明
attribute=geturl	ウェブサーバーの URL 情報をレポートします。
attribute=getsignalgorithm	現在のキー署名アルゴリズムを報告します。

目次ページに戻る

目次ページに戻る

CLI コマンド結果の使用方法

Dell OpenManage Server Administrator バージョン 6.3 コマンドラインインタフェース ユーザーズガイド

Server Administrator コマンドラインインタフェース（CLI）のユーザーはさまざまな方法でコマンド出力を利用できます。この項では、コマンド出力をファイルに保存する方法と、コマンド結果のフォーマットを目的に合わせて選択する方法について説明します。

表 7-1 omreport コマンドに対するシステム可用性

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	適用可能
omreport	*modularenclosure*	モジュラーシステム
	servermodule	モジュラーシステム
	mainsystem	モジュラーシステム
	system	非モジュラーシステム
	chassis	非モジュラーシステム

コマンド結果の出力オプション

CLI コマンド出力はオペレーティングシステムのタイプによって、コマンドウィンドウ、X-ターミナル、または画面上でシステムの標準出力に表示されます。

コマンド結果を標準出力に表示する代わりに、ファイルにリダイレクトすることができます。コマンド出力をファイルに保存するとあとで分析または比較に使用することができます。

コマンド結果を標準出力に表示する場合もファイルに書き込む場合も、結果をフォーマットできます。選択するフォーマットによって、コマンド出力の表示形式やファイルへの書き込み方法が決まります。

管理コマンド出力の表示

各オペレーティングシステムには、コマンド結果の標準出力表示方法を管理する手段が備わっています。次のコマンドは、コマンド結果を確認する前に、スクロールして消えてしまわないようにする場合に使用します。Microsoft Windows コマンドプロンプト、Red Hat Enterprise Linux ターミナル、および SUSE LINUX Enterprise Server ターミナルで、同じコマンド構文を使用できます。スクロール制御機能を備えたコマンド出力を表示するには、CLI コマンドを入力してパイプ記号の後に more を付加します。たとえば、次のように入力します。

```
omreport system summary | more
```
または
```
omreport servermodule summary | more
```

マルチスクリーンシステムの概要では、最初の画面が表示されます。コマンド出力の次の画面を表示するには、スペースバーを押します。

書き込み コマンド出力のファイルへの書き込み

コマンド結果をファイルにリダイレクトする場合は、コマンド結果の書き込み先のファイル名と、必要に応じてディレクトリパスを指定できます。ファイルの書き込み先のパスを指定する場合は、オペレーティングシステムに適した構文を使してください。

コマンド結果の保存には 2 つの方法があります。指定する出力ファイルと同じ名前の任意のファイルを上書きするか、コマンド結果を同じ名前のファイルに追加し続けることができます。

上書き可能なファイルへのコマンド結果の保存

-outc オプションは、以前に書き込まれたファイルに保存されているデータを上書きする場合に使います。例えば、午前 11:00 時に システム上のファンプローブ 0 のファンプローブ RPM 読み取り値をキャプチャして **fans.txt** というファイルに結果を書き込みます。この場合、次のように入力します。

```
omreport chassis fans index=0 -outc fans.txt
```
または
```
omreport chassis fans index=0 -outc fans.txt
```

以下は、ファイルに書き込まれた結果の一部です。

```
Index                      : 0
Status                     : OK
Probe Name                 : System Board Fan 1 RPM
Reading                    : 2380RPM
Minimum Warning Threshold  : 600RPM
Maximum Warning Threshold  : 5700RPM
Minimum Failure Threshold  : 500RPM
Maximum Failure Threshold  : 6000RPM
```

4 時間後、コマンドを繰り返します。午前 11:00 時の **fans.txt** に書き込まれたスナップショットは必要ないとします。同じコマンドを次のように入力します。

```
omreport chassis fans index=0 -outc fans.txt
```
または
```
omreport chassis fans index=0 -outc fans.txt
```

午後 3:00 時 のデータによって午前 11:00 時のデータが上書きされます。**fans.txt** ファイルのデータ

Fans.txt の内容が今度は以下のようになります。

```
Index                      : 0
Status                     : OK
Probe Name                 : System Board Fan 1 RPM
Reading                    : 3001RPM
Minimum Warning Threshold : 700RPM
Maximum Warning Threshold : 5500RPM
Minimum Failure Threshold : 500RPM
Maximum Failure Threshold : 6000RPM
```

前のコマンド結果を参照して、前のファンプローブ 0 出力を現在の出力と比較することはできません。**-outc** オプションを使って **fans.txt** ファイルを上書きしたからです。

既存のファイルへのコマンド結果の追加

-outa オプションは、以前に書き込まれたファイルに保存されているデータに新しいコマンド結果を追加する場合に使います。例えば、午前 11:00 時に システム上のファンプローブ 0 のファンプローブ RPM 読み取り値をキャプチャして **fans.txt** というファイルに結果を書き込みます。この結果を 4 時間後に得た同じプローブの出力と比較する場合、**-outa** コマンドを使って新しい出力を **fans.txt**に追加できます。

次のように入力します。

```
omreport chassis fans index=0 -outa fans.txt
```
または
```
omreport mainsystem fans index=0 -outa fans.txt
```

Fans.txt の内容が今度は以下のようになります。

```
Index                      : 0
Status                     : OK
Probe Name                 : System Board Fan 1 RPM
Reading                    : 2380RPM
Minimum Warning Threshold : 600RPM
Maximum Warning Threshold : 5700RPM
Minimum Failure Threshold : 500RPM
Maximum Failure Threshold : 6000RPM

Index                      : 0
Status                     : OK
Probe Name                 : System Board Fan 1 RPM
Reading                    : 3001RPM
Minimum Warning Threshold : 700RPM
Maximum Warning Threshold : 5500RPM
Minimum Failure Threshold : 500RPM
Maximum Failure Threshold : 6000RPM
```

テキストエディタを使用すると、各データブロックがキャプチャされた時間を挿入できます。ファンプローブ 0 の 2 つのスナップショットを比較すると、2 回目の報告で数か所に変更があります。ファン RPM の 読み取り値は 621 RPM 増加しましたが、まだ標準範囲内にあります。最小警告しきい値が 200 RPM に上げられ、最大警告しきい値が 2000 RPM に下げられました。

CLI コマンド出力のフォーマットの選択

CLI コマンド結果のフォーマットを指定できます。フォーマットはコマンド出力の表示形式を決定します。コマンド結果がファイルに転送されると、コマンド結果の書き込み先ファイルによってフォーマットがキャプチャされます。

メモ: **omconfig** コマンドは、ほとんどの出力形式オプションを無視して、標準テキストのメッセージを返します。しかし、XML フォーマットで表示を選択すると、**omconfig** コマンドは XML コードを返します。.

以下のようなフォーマットを使用できます。

- リスト（lst）
- セミコロン区切りの値（ssv）
- テーブル（tbl）
- 生の XML（xml）
- カスタム区切りの形式（cdv）

フォーマットオプションの構文は次のようになります。

```
<コマンド> -fmt <フォーマットオプション>
```

たとえば、次のように入力します。

```
omreport system summary -fmt tbl
```
または
```
omreport servermodule summary -fmt tbl
```

-fmt tbl はテーブル形式を指定します。

フォーマットオプションを、出力をファイルに転送するオプションと組み合わせることができます。たとえば、次のように入力します。

```
omreport system summary -fmt tbl -outa summary.txt
```
または
```
omreport servermodule summary -fmt tbl -outa summary.txt
```

-fmt tbl はテーブル形式を指定し、**-outa** はコマンド結果を **summary.txt** という名前ファイルに追加することを指定します。

リスト（lst）

デフォルトのフォーマットは **lst**（リスト形式）です。出力の読みやすさを最適化する場合に、この形式を使います。**lst** 以外のフォーマットが必要であれば、コマンド出力のフォーマットを指定する必要があります。

次のコマンド出力例を **lst** 形式で表示するには、次のように入力します。

```
omreport system summary
```
または
```
omreport servermodule summary
```

リスト形式はデフォルトの表示形式なので、特別なフォーマットオプションは不要です。例のシステム概要例のネットーワークデータの一部は、以下のように表示されます。

```
--------------

Network Data

--------------

Network Interface Card 0 Data
IP Address : 143.166.152.108
Subnet Mask : 255.255.255.0
Default Gateway : 143.166.152.1
MAC Address : 00-02-b3-23-d2-ca
```

テーブル（tbl）

tbl（テーブル）フォーマットオプションを使うと、データがテーブルの行と列でフォーマットされます。次のコマンド出力例をテーブル形式で表示するには、次のように入力します。

```
omreport system summary -fmt tbl
```
または
```
omreport servermodule summary -fmt tbl
```

出力例は以下のように表示されます。

```
------------------------------
Network Interface Card 0 Data
------------------------------

| ATTRIBUTE | VALUE
| IP Address | 143.166.152.108
| Subnet Mask | 255.255.255.0
| Default Gateway | 143.166.152.1
| MAC Address | 00-02-b3-23-d2-ca
```

セミコロン区切りの値（ssv）

ssv フォーマットオプションを使うと、出力がセミコロンで区切った値の形式にフォーマットされます。この 形式は、コマンド出力結果を Microsoft Excel などの表計算プログラムやデータベースプログラムにインポートすることもできます。次のコマンド出力例をセミコロンで区切った値の形式で表示するには、次のように入力します。

```
omreport system summary -fmt ssv
```
または
```
omreport servermodule summary -fmt ssv
```

出力例は以下のように表示されます。

```
------------------------------
Network Data
------------------------------
```

```
Network Interface Card 0 Data
IP Address;143.166.152.108
Subnet Mask;255.255.255.0
Default Gateway;143.166.152.1
MAC Address;00-02-b3-23-d2-ca
```

生の XML（xml）

xml フォーマットオプションを使うと、システム管理アプリケーションでの使用や、xml を使う他のアプリケーションへの入力に適した出力が生成されます。次のコマンド出力例を raw xml 形式で表示するには、次のように入力します。

```
omreport system summary -fmt xml
```
または
```
omreport servermodule summary -fmt xml
```

出力例は以下のように表示されます。

```
<NICStatus>1</NICStatus><IPAddress>143.166.152.108</IPAddress><SubnetMask>255.255.255.0</SubnetMask><DefaultGateway>143.166.152.1</DefaultG
-02-b3-23-d2-ca</MACAddr>
```

カスタム区切りの形式（cdv）

cdv フォーマットオプションを使うと、エクスポートされたデータがカスタム区切りの形式でレポートされます。このオプションは他の **omreport** コマンドと一緒に指定できます。たとえば、カスタム区切り形式でシステム概要を生成するには、次のように入力します。

```
omreport system summary -fmt cdv
```
または
```
omreport servermodule summary -fmt cdv
```

omconfig コマンドを使うと、カスタム区切り形式のプリファランスを設定できます。デリミタ のための有効値は以下の通りです。: 感嘆符、セミコロン、アット、細切れ肉料理、ドル、パーセント、脱字記号、アスタリスク、ティルド、質問、コロン、コンマ、およびパイプ

アスタリスクを使ってデータフィールドを分けるデリミタの設定の例は以下のとおりです。

```
omconfig preferences cdvformat delimiter=asterisk
```

目次ページに戻る

[目次ページに戻る](#)

ストレージ管理サービスの使用

Dell OpenManage Server Administrator バージョン 6.3 コマンドラインインタフェース ユーザーズガイド

- CLI のコマンド構文
- 必須、オプション、変数のコマンド 要素の 構文
- omreport storage と omconfig storage のユー ザー特権
- omreport コマンド
- omreport ストレージヘルプ
- omconfig グローバルのコマンド
- omconfig コントローラのコマンド
- omconfig 仮想ディスクのコマンド
- omconfig 物理ディスクのコマンド
- omconfig バッテリーのコマンド
- omconfig コネクタコマンド
- omconfig エンクロージャのコマンド

Storage Management の CLI では、オペレーティングシステムのコマンドシェルからのStorage Management の報告、設定および管理機能すべての実行も可能です。また、Storage Management CLI を使用すると、コマンド シーケンスのスクリプトを作成することもできます。

Storage Management CLI は、Dell OpenManage Server Administrator の **omreport** コマンドと **omconfig** コマンドのオプションを拡張するものです。本章では、Storage Management に適用する **omreport** と **omconfig** コマンドについてのみ述べられています。詳細については、『*Dell OpenManage* インストールとセキュリティユーザーズガイド』を参照してください。Storage Management の詳細に関しては、Storage Management オンラインヘルプまたは『*Dell OpenManage Server Administrator Storage Management* ユーザーズガイド』を参照してください。

CLI のコマンド構文

すべての Server Administrator コマンドと同様、 **omreport** および **omconfig** のコマンド構文は、コマンド「レベル」を指定することで成り立ちます。最初のコマンドレベルは、**omreport** または **omconfig** のコマンド名です。次のコマンドレベルでは、コマンドの対象となるオブジェクトの種類や、コマンドで表示される情報をより細かく特定します。

たとえば、次の **omconfig** コマンド構文には 3 つのレベルがあります。

```
omconfig storage pdisk
```

表 6-1 では、これらのコマンドレベルについて説明します。

表 6-1 コマンドレベルの例

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	用途
omconfig			コマンドを指定します。
	storage		コマンドを実装する Server Administrator のサービス（この場合は Storage Management）を示します。
		pdisk	コマンドの対象となるオブジェクトの種類を指定します。

omreport と **omconfig** のコマンド構文では、コマンドレベルに続いて、「名前=値」のペアが 1 つまたは複数必要になることがあります。「名前=値」のペアは、オブジェクト自体（特定の物理ディスクなど）またはコマンドが実装するオプション（"blink" または "unblink"）を指定します。

たとえば、物理ディスクを点滅させる次の **omconfig** コマンド構文には、3 つのレベルと 3 つの「名前=値」のペアがあります。

```
omconfig storage pdisk action=blink controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

ここで、 PDISKID=<connector:enclosureID:portID | connector:targetID>

この例では、controller=id の *id* はコントローラ番号のことで、たとえばコントローラ 1 は controller=1 と指定されます。

必須、オプション、変数のコマンド 要素の構文

omreport および **omconfig** コマンドには、複数の「名前=値」のペアがあります。これらの「名前=値」ペアには、必須、オプション、および変数のパラメータが含まれる場合があります。表 6-2 では、これらのパラメータを指示する構文を説明しています。

表 6-2 パラメータの「名前=値」ペアの構文

構文	説明
controller=id	**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ IDを示します。これらの値を取得するには、omreport storage controller と入力してコントローラ ID を表示してから、omreport storage pdisk controller=id と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。 たとえば、**controller=id** パラメータは **controller=1** と指定します。
connector=id	**omreport** コマンドによって報告されるコネクタ ID を示します。これらの値を取得するには、omreport storage controller と入力してコントローラ ID を表示してから、omreport storage connector controller=id と入力し、コントローラに接続しているコネクタの ID を表示します。 たとえば、**connector=id** パラメータは **connector=2** と指定します。

vdisk=id	**omreport** コマンドによって報告される仮想ディスク ID を示します。これらの値を取得するには、 omreport storage controller と入力してコントローラ IDを表示してから、 omreport storage vdisk controller=id と入力し、コントローラ上の仮想ディスクの ID を表示します。 たとえば、**vdisk=id** パラメータは **vdisk=3** と指定します。
enclosure=<エンクロージャ ID>	**enclosure=connector** または **enclosure=connector:enclosureID** のどちらかを指定することで、特定のエンクロージャを示します。 これらの値を取得するには、omreport storage controller と入力してコントローラ ID を表示してから、omreport storage enclosure controller=id と入力し、コントローラに接続しているエンクロージャの ID を表示します。
pdisk=<物理ディスク ID>	**connector:targetID** または **connector:enclosureID:portID** のどちらかで指定することで、特定の物理ディスクを示します。 コネクタ、エンクロージャ、および物理ディスクの値（ターゲット ID またはポート ID）を取得するには、omreport storage controller を入力してコントローラ ID を表示してから、omreport storage pdisk controller=id と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。
battery=id	**omreport** コマンドによって報告されるバッテリー ID を示します。この値を取得するには、omreport storage controller と入力してコントローラの ID を表示してから、omreport storage battery controller=id と入力し、コントローラの バッテリーの ID を表示します。
< >	キャレット記号（< >）は、指定すべき変数要素を囲みます。 たとえば、**name=<文字列>** パラメータは **name=VirtualDisk1** のように指定します。
[ ]	ブラケット記号（[ ]）は指定するかしないかを選択できるオプションの要素を示します。 たとえば、仮想ディスクを作成する場合、**[name=<文字列>]** パラメータは仮想ディスク名を指定するかどうかを選択できるという意味です。このパラメータを構文から省略すると、仮想ディスクのデフォルト名が 選択されます。
|	パイプ記号（ | ）は、複数のオプションから 1 つだけを選択する必要がある場合に、オプションを 区切ります。 たとえば、仮想ディスクを作成する場合、**cachepolicy=d|c** はキャッシュポリシーを **cachepolicy=d** か **cachepolicy=c** のどちらかに指定しなければならないという意味です。

omreport storage と omconfig storage のユーザー特権

Storage Management で **omconfig storage** コマンドを使用するには、システム管理者権限が必要です。**omreport storage** コマンドを使用するには、ユーザー権限とパワーユーザー権限で十分です。

omreport コマンド

以下の項では、各種ストレージコンポーネントを表示するために必要な **omreport** コマンド構文について説明します。

omreport ストレージヘルプ

表 6-3では、**omreport storage** コマンド構文を提供しています。

表 6-3 omreport ストレージヘルプ

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	用途
omreport			
	storage		**omreport** コマンドを使用できるストレージコンポーネントのリストを表示します。
		pdisk	**omreport storage pdisk** パラメータのリストを表示し、物理ディスク情報を表示します。
		vdisk	**omreport storage vdisk** パラメータのリストを表示し、仮想ディスク情報を表示します。
		controller	**omreport storage controller** パラメータのリストを表示し、コントローラ情報を表示します。
		enclosure	**omreport storage enclosure** パラメータのリストを表示し、エンクロージャ情報を表示します。
		connector	**omreport storage connector** パラメータのリストを表示し、コネクタ情報を表示します。
		battery	**omreport storage battery** パラメータのリストを表示し、バッテリー情報を表示します。
		globalinfo	**omreport storage globalinfo** パラメータのリストを表示し、グローバルストレージ情報を表示します。

omreport コントローラ状態

表 6-4 では、**omreport Controller** コマンドの構文について説明します。

表 6-4 omreport コントローラのコマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage controller		システムに接続されたすべてのコントローラのプロパティ情報を表示します。
	controller=id *id* はコントローラ番号です。例：controller=0	指定したコントローラと、それに接続しているエンクロージャ、仮想ディスク、物理ディスクなどのコンポーネントすべてを表示します。
omreport storage controller		
	controller=id info=foreignkeyids	インポートまたはクリア操作ができないようにロックされた外部設定情報を表示します。
	info=pdslotreport	コントローラ内のエンクロージャの空きスロットおよび占有スロットの詳細を表示します。 **メモ：** このコマンドは、バックプレーン、SCSI、および SWRAID コントローラ上ではサポートされていません。

omreport グローバル情報（Smart サーマルシャットダウンのステータス、ホットスペアプロテクションポリシー）

表 6-5 では、**omreport Global Information** コマンドの構文について説明します。

表 6-5 omreport グローバル情報のコマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage globalinfo		Smart サーマルシャットダウンが有効か無効かを表示します。詳細については、「omconfig グローバル Smart サーマルシャットダウンを有効にする 」を参照してください。 設定したホットスペアプロテクションポリシーを表示します。ホットスペアプロテクションポリシーの設定方法については、『*Dell OpenManage Server Administrator Storage Management* ユーザーズガイド』を参照してください。

omreport バッテリー状態

表 6-6 では、**omreport Battery** コマンドの構文について説明します。

表 6-6 omreport バッテリーのコマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage battery		システム上のすべてのコントローラに存在するあらゆるバッテリーを表示します （一部のコントローラにはバッテリーがありません）。
	controller=id *id* はコントローラ番号です。例：controller=0	指定したコントローラのバッテリーを表示します。

omreport コネクタ状態

表 6-7 では、**omreport Connector** コマンドの構文について説明します。

表 6-7 omreport コネクタコマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage connector		システム上のすべてのコントローラに存在するあらゆるコネクタを表示します。 **メモ：** このコマンドはコントローラ ID が指定されている場合のみ有効です。
	controller=id *id* はコントローラ番号です。例：	指定したコントローラのコネクタを表示します。

	controller=0	
	controller=id *id* はコントローラ番号です。例：controller=0 **connector=id** *id* はコネクタ番号です。例: connector=0	コントローラ上の指定したコネクタの情報を表示します。 **メモ：** 冗長パスモードでコネクタをエンクロージャに接続すると、コネクタの **名前** が **論理コネクタ** として表示されます。

omreport エンクロージャ状態

表 6-8 では、**omreport Enclosure** コマンドの構文について説明します。

表 6-8 omreport エンクロージャのコマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage enclosure		システムに接続されたすべてのエンクロージャのプロパティ情報を表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> *id* はコントローラ番号で、<エンクロージャ ID> はエンクロージャ番号です。SCSI コントローラの例: controller=0 enclosure=2. SAS コントローラの例: controller=0 enclosure=1:2.	指定したエンクロージャとそのコンポーネントを表示します。

omreport 温度プローブ状態

表 6-9 では、**omreport Probe** コマンドの構文について説明します。

表 6-9 omreport 温度プローブのコマンド

必須なコマンドレベル（1、2、3）および「名前=値」のペア	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage enclosure		システム に接続されたすべてのエンクロージャのプロパティ情報を表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> info=temps *id* はコントローラ番号で、**<エンクロージャ ID>** はエンクロージャ番号です。SCSI コントローラの例: controller=0 enclosure=2 info=temps. SAS コントローラの例: controller=0 enclosure=1:2 info=temps.	指定したエンクロージャの温度プローブを表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> info=temps index=n *id* はコントローラ番号、**<エンクロージャ ID>** はエンクロージャ番号で、"n" は温度プローブの番号です。例: controller=0 enclosure=2 info=temps index=1	指定したエンクロージャの温度プローブを表示します。

omreport ファン状態

表 6-10 では、**omreport Fan** コマンドの構文について説明します。

表 6-10 omreport ファン状態

必要なコマンドレベル（1、2、3）と名前=値」のペア	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage enclosure		システムに接続されたすべてのエンクロージャのプロパティ情報を表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> info=fans id はコントローラ番号で、エンクロージャ ID はエンクロージャ番号です。 例: controller=0 enclosure=2	指定したエンクロージャのファンを表示します。

	メモ： SCSI コントローラでは enclosure=<エンクロージャ ID> で指定された ID がコネクタ番号で、Serial Attached SCSI（SAS）コントローラでは ID は connectorNumber:EnclosureIndex です。	
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> info=fans index=n id はコントローラ番号、エンクロージャ ID はエンクロージャ番号で、"n" は温度プローブの番号です。 例: controller=0 enclosure=2 info=temps index=1	指定したファンを表示します。

omreport 電源装置状態

表 6-11 では、**omreport 電源装置コマンド**の構文について説明します。

表 6-11 omreport 電源装置コマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）と名前=値」のペア	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage enclosure		システムに接続されたすべてのエンクロージャのプロパティ情報を表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> info=pwrsupplies id はコントローラ番号で、エンクロージャ ID はエンクロージャ番号です。 例: controller=0 enclosure=2	指定したエンクロージャの電源装置を表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> info=pwrsupplies index=n id はコントローラ番号、エンクロージャ ID はエンクロージャ番号で、"n" は電源装置の番号です。 例: controller=0 enclosure=2 info=pwrsupplies index=1	指定した電源装置を表示します。

omreport EMM 状態

メモ： EMM ファームウェア間に不一致があると、EMM のステータスは低下として表示されます。

表 6-12 では、**omreport EMM** コマンドの構文について説明します。

表 6-12 omreport EMM のコマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）と名前=値」のペア	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage enclosure		システムに接続されたすべてのエンクロージャのプロパティ情報を表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> info=emms id はコントローラ番号で、エンクロージャ ID はエンクロージャ番号です。 例: controller=0 enclosure=2	指定したエンクロージャのエンクロージャ管理モジュール（EMM）を表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> info=emms index=n id はコントローラ番号、エンクロージャ ID はエンクロージャ番号で、"n" は EMM の番号です。 例: controller=0 enclosure=2 info=emms index=1	指定した EMM を表示します。

omreport エンクロージャのスロット占有レポート

表 6-13 は、**omreport Enclosure Slot Occupancy Report** コマンドの構文を説明します。

表 6-13 omreport エンクロージャのスロット占有レポートコマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）と名前=値」のペア	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage enclosure		システムに接続されたすべてのエンクロージャのプロパティ情報を表示します。

	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> info=pdslotreport id はコントローラ番号で、エンクロージャ ID はエンクロージャ番号です。 例: controller=0 enclosure=2	指定したエンクロージャの空きスロットおよび占有スロットの詳細を表示します。 **メモ：** このコマンドは、バックプレーン、SCSI、および SWRAID コントローラ上ではサポートされていません。

omreport 物理ディスク状態

表 6-14 では、**omreport Physical Disk**の構文について説明します。

表 6-14 omreport 物理ディスクのコマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）と名前=値」のペア	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage pdisk	**controller=id** *id* はコントローラ番号です。例：controller=0	指定したコントローラに接続している物理ディスクをすべて表示します。 **メモ：** メンバー交換操作の一環として 1 台の物理ディスクが別の物理ディスクで交換された場合、その物理ディスクの状態はReplacingとして表示されます。
	connector=id *id* はコネクタ番号です。例: connector=1	コントローラ上の指定したコネクタに接続している物理ディスクをすべて表示します。
	vdisk=id *id* は仮想ディスク番号です。例： vdisk=1	コントローラ上の指定した仮想ディスクに含まれている物理ディスクをすべて表示します。
	pdisk=connectorID : targetID | connectorID : enclosureID : slotID ただし、*connectorID:targetID* はコネクタ番号と物理ディスク番号で、*connectorID:enclosureID:slotID* はコネクタ番号、エンクロージャ番号、およびスロット番号です。 例: pdisk=0:2 or pdisk=0:1:2	コントローラ上の指定したコネクタの指定した物理ディスクを表示します。

omreport 仮想ディスク状態

表 6-15 では、**omreport 仮想ディスク**コマンドの構文について説明します

表 6-15 omreport 仮想ディスクのコマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage vdisk		コントローラ上のすべての仮想ディスクのプロパティ情報を表示します。
	controller=id *id* はコントローラ番号です。例：controller=0	指定したコントローラ上のすべての仮想ディスクを表示します。
	controller=id vdisk=id *id* はコントローラ番号と仮想ディスク番号です。例: controller=0 vdisk=1.	コントローラ上の指定した仮想ディスクを表示します。

---

omconfig グローバルのコマンド

以下の項では、グローバルコマンドを実行するために必要な **omconfig** コマンド構文について説明します。実行すると、これらのコマンドはすべてのコントローラに適用されます。また、これらのグローバルコマンドは、Storage ツリービューオブジェクトの **情報 / 設定** サブタブ に表示されるグローバルタスクにも対応しています。

表 6-16 omconfig グローバルのコマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）	オプション「名前=値」のペア
omconfig storage globalinfo	
	action=enablests

	action=disablests
	action=globalrescan
	action=setprotectionpolicies type=ghs or dhs

omconfig グローバル Smart サーマルシャットダウンを有効にする

デフォルトでは、PV220S および PV221S エンクロージャが臨界温度の摂氏 0 または 50°に達すると、オペレーティングシステムとサーバーがシャットダウンします。ただし、PV220S および PV221S エンクロージャに コネクタ の冗長性を実装している場合は、エンクロージャが臨界温度の摂氏 0 または 50°に達したときにエンクロージャだけをシャットダウンし、オペレーティングシステムとサーバーはシャットダウンしないように指定できます。温度が高すぎる間エンクロージャだけをシャットダウンするように指定する操作を「スマート サーマルシャットダウン」と呼びます。Smart サーマルシャットダウンの詳細については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。

Smart サーマルシャットダウンを有効にするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage globalinfo action=enablests
```

構文例

サーマルシャットダウンを有効にするため、**omconfig** コマンド構文では、コントローラやエンクロージャの ID を指定する必要はありません。サーマルシャットダウンを有効にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage globalinfo action=enablests
```

メモ： **omreport storage globalinfo** コマンドを使用すると、現在 Smart サーマルシャットダウンが有効か無効かを確認できます。Smart サーマルシャットダウンの状態は、Server Administrator のグラフィカルユーザーインタフェース (GU) にも表示されます。この状態を見つけるには、**Storage** オブジェクトと **情報 / 設定** タブ選択します。

omconfig グローバル Smart サーマルシャットダウンを無効にする

omconfig コマンドを使って Samrt サーマルシャットダウンを有効にしている場合、Smart サーマルシャットダウンを無効にしてシステムをデフォルト設定に戻すことができます。Smart サーマルシャットダウンを無効にすると、PV220S および PV221S エンクロージャが臨界温度の摂氏 0 または 50 C に達したときにオペレーティングシステムとサーバーがシャットダウンします。

Smart サーマルシャットダウンを無効にするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage globalinfo action=disablests
```

構文例

サーマルシャットダウンを無効にする **omconfig** コマンド構文では、コントローラやエンクロージャの ID を指定する必要はありません。サーマルシャットダウンを無効にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage globalinfo action=disablests
```

メモ： **omreport storage globalinfo** コマンドを使用すると、現在 Smart サーマルシャットダウンが有効か無効かを確認できます。Smart サーマルシャットダウンの状態は、Server Administrator の GUI 内にも表示します。この状態を見つけるには、**Storage** オブジェクトと **情報 / 設定** タブ選択します。

omconfig グローバルコントローラの再スキャン

次の **omconfig** コマンド構文を使用すると、システムのすべてのコントロールが再スキャンされます。グローバル再スキャンコントローラの詳細については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage globalinfo action=globalrescan
```

構文例

システムのすべてのコントローラを再スキャンする **omconfig** コマンド構文では、コントローラ ID を指定する必要はありません。すべてのコントローラをグローバルに再スキャンするには、次のコマンドを入力します。

```
omconfig storage globalinfo action=globalrescan
```

メモ： グローバル再スキャンは、非 RAID SCSI および SAS コントローラではサポートされていません。非 RAID SCSI コントローラの設定変更を表示されるには、システムを再起動してください。

omconfig ホットスペアプロテクションポリシーの設定

専用またはグローバルホットスペア用にホットスペアプロテクションポリシーを設定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。ホットスペアプロテクションポリシーの設定方法については、『*Dell OpenManage Server Administrator Storage Management* ユーザーズガイド』を参照してください。

完全な構文

専用のホットスペアプロテクションポリシーの場合、次のように入力します。

```
omconfig storage globalinfo action=setprotectionpolicies type=dhs raid=<r1 | r5 | r6 | r10 | r50 | r60 | all> hscount=<1 ～ 16>
warnlevel=<0-3>
```

ここで、hscount は、仮想ディスクに割り当てるホットスペア数です。

warnlevel は、このポリシーの違反があった場合に、生成する警告に割り当てたい重要度レベルです。RAID レベルの専用ホットスペアプロテクションポリシーをリセットするには、hscount=0 warnlevel=0 を使用します。

グローバルホットスペアプロテクションポリシーの場合、次のように入力します。

```
omconfig storage globalinfo action=setprotectionpolicies type=ghs hscount=<1 ～ 16> warnlevel=<0 ～ 3> includeghsinvdstate=<はい | いいえ>
```

ここで、hscount は、仮想ディスクに割り当てるホットスペア数です。

そして、warnlevel は、このポリシーの違反があった場合に、生成する警告に割り当てたい重要度レベルです。RAID レベルのグローバルホットスペアプロテクションポリシーをリセットするには、hscount=0 warnlevel=0 を使用します。

---

omconfig コントローラのコマンド

以下の項では、コントローラタスクを実行するために必要な **omconfig** コマンドについて説明します。

注意: omconfig storage controller action=resetconfig controller=id は、コントローラの設定をリセットします。コントローラの設定をリセットすると、コントローラに接続している仮想ディスク上のすべてのデータが完全に破壊されます。 仮想ディスクに存在するシステムまたはブート可能なパーティションを破壊します。

表 6-17 omconfig コントローラのコマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）	オプション「名前=値」のペア
omconfig storage controller	
	action=rescan controller=id
	action=enablealarm controller=id
	action=disablealarm controller=id
	action=quietalarm controller=id
	action=testalarm controller=id
	action=resetconfig controller=id [force=yes]
	action=createvdisk controller=id raid=<c| r0| r1| r1c| r5|r6| r10| r50|r60> size=<数値 | 最大 | 最小> pdisk=<PDISKID> [stripesize=< 2kb| 4kb| 8kb| 16kb| 32kb| 64kb| 128kb>] [cachepolicy=<d | c>] [diskcachepolicy=<無効 | 有効>] [readpolicy=<ra| nra| ara| rc| nrc>] [writepolicy=<wb | wt | wc | nwc | fwb>] [name=<文字列>] [spanlength=<n>] | [secureflag=yes] **メモ：** ファームウェアバージョン 6.1 以降を持つ SAS コントローラ上の RAID 10 では、**spanlength** は任意選択パラメータです（デフォルト=2）。
	action=createsecuritykey controller=id keyid=<キー ID> passphrase=<パスフレーズ文字列> [escrow=yes] [filepath=<エスクローファイルへの絶対パス>] **メモ：** **escrow=yes** と設定する場合、エスクローファイルへのパスを指定します。 action=changesecuritykey controller=id keyid=<キー ID> passphrase=<パスフレーズ文字列> oldpassphrase=<古いパスフレーズ文字列> [escrow=yes] [filepath=<エスクローファイルへの絶対パス>]

	メモ： **escrow=yes** と設定する場合、エスクローファイルへのパスを指定します。 action=changesecuritykey controller=id keyid=<キー ID> passphrase=<パスフレーズ文字列> [escrow=yes] action=deletesecuritykey controller=id action=importsecureforeignconfig controller=id passphrase=<インポートする外部設定のパスフレーズ>
	action=setbgirate controller=id rate=<0 ～ 100>
	action=setreconstructrate controller=id rate=<0 ～ 100>
	action=setcheckconsistencyrate controller=id rate=<0 ～ 100>
	action=exportlog controller=id
	action=importforeignconfig controller=id
	action=importrecoverforeignconfig controller=id
	action=clearforeignconfig controller=id
	action=setpdiskpwrmanagement spindownunconfigureddrives=<enabled/disabled> spindownhotspares=<enabled/disabled> spindowntimeinterval=<30～1440><分> controller=id
	action=setpatrolreadmode controller=id mode=manual | auto | disable
	action=startpatrolread controller=id
	action=stoppatrolread controller=id
omconfig storage controller（続き）	action=setchangecontrollerproperties controller=<ID> [bgirate=<率>][reconstructrate=<率>][checkconsistencyrate=<率>][rebuildrate=<率>][clearredundantpath=clear][abortcheckconsistencyonerror=<有効/無効>][loadbalance=<自動/無効>][allowrevertibilehotspareandreplacemember=enabled/disabled] [autoreplacememberonpredictivefailure=<有効/無効>][persistenthotspare=enabled/disabled] rate=<0～100>
	action=discardpreservedcache controller=id forcepreservedcachediscard=<有効/無効>

omconfig コントローラの再スキャン

コントローラを再スキャンするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。コントローラの再スキャンの詳細については、 Dell OpenManage オンラインヘルプを参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=rescan controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

コントローラ 1 を再スキャンするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=rescan controller=1
```

メモ： 再スキャンコントローラは、非 RAID SCSI および SAS コントローラではサポートされていません。非 RAID SCSI コントローラの設定変更を表示されるには、システムを再起動してください。

omconfig コントローラ警告を有効にする

コントローラ警告を有効にするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。コントローラ警告を有効にする情報については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=enablealarm controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

コントローラ 1 の警告を有効にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=enablealarm controller=1
```

omconfig コントローラ警告を無効にする

コントローラ警告を無効にするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。コントローラ警告を無効にする情報については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=disablealarm controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

コントローラ 1 の警告を無効にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=disablealarm controller=1
```

omconfig コントローラ警告の静止

アクティブなコントローラ警告を静止にするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。コントローラ警告を停止する情報については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=quietalarm controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

コントローラ 1 の警告を静止するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=quietalarm controller=1
```

omconfig コントローラ警告のテスト

コントローラ警告の機能性をテストするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。アラームが約 2 秒間鳴ります。コントローラ警告のテストの詳細については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=testalarm controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

コントローラ 1 の警告をテストするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=testalarm controller=1
```

omconfig コントローラ設定のリセット

コントローラの設定をリセットするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

注意: 設定をリセットすると、コントローラに接続している仮想ディスク上のすべてのデータが完全に破壊されます。仮想ディスクに存在するシステムまたはブート可能なパーティションを破壊します。このコマンドによってシステムまたはブートパーティションが削除される場合は、警告メッセージが表示されることがあります。ただし、この警告メッセージは、常に生成されるわけではありません。このコマンドを使用して、システム、ブートパーティションまたはその他の重要なデータを削除しないようにしてください。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=resetconfig controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

このコマンドによってシステムまたはブートパーティションが削除される場合は、警告メッセージが表示される場合があります。**force=yes** パラメータを使うと、この警告をオーバーライドできます。この場合、構文は次のようになります。

```
omconfig storage controller action=resetconfig controller=id force=yes
```

構文例

コントローラ 1 の設定をリセットにするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=resetconfig controller=1
```

omconfig 仮想ディスクの作成

Dell OpenManage オンラインヘルプ には、仮想ディスクの作成の詳細が含まれています。

仮想ディスクを作成するための **omconfig** 構文には複数のパラメータがあります。 次のパラメータを指定する必要があります 。

- **コントローラ（controller=id）**
- **RAID レベル（raid=<c| r0| r1| r1c| r5|r6| r10| r50|r60>）**
- **サイズ（size=<数値 | 最大 | 最小>）**

物理ディスクは次のどちらかの方法で指定されます。

SCSI、*SATA*、および *ATA* コントローラは、

pdisk=connector:enclosureID:portID

ここで、*connector:enclosureID:portID* は コネクタ番号、エンクロージャ番号およびポート番号です。
例、*pdisk=0:1:2*

SAS コントローラについて、

pdisk=connector:targetID

ここで、*connectorID:targetID* は コネクタ番号と物理ディスクの番号です。たとえば、pdisk=0:2

その他のパラメータについては、指定しなければ Storage Management によってデフォルト値が 設定されます。

セキュア仮想ディスクを作成する場合は、**secureflag=yes** と指定します。セキュア仮想ディスクは、SED ドライブでのみ作成できます。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=createvdisk controller=id raid=<c| r0| r1| r1c| r5| r6| r10| r50 |r60> size=<数値 | 最大 | 最小>
pdisk=<PDISKID> [stripesize=< 2kb| 4kb| 8kb| 16kb| 32kb| 64kb| 128kb>] [cachepolicy=<d | c>] [diskcachepolicy=<無効 | 有効>]
[readpolicy=<ra | nra | ara | rc| nrc>] [writepolicy=<wb| wt| wc| nwc | fwb>] [name=<文字列>] [spanlength=<n>] | [secureflag=yes]
```

メモ: ファームウェアバージョン 6.1 以降を持つ SAS コントローラ用の RAID 10 を構成する場合、**spanlength** は任意選択パラメータです（デフォルト=2）。**Spanlength** は、**size** で指定した物理ディスク数の半分以下の偶数で指定します。

仮想ディスクの作成と再設定のためのパラメータ指定

以下の項では、**omconfig storage controller action=createvdisk** パラメータを指定する方法について説明します。

controller=id Parameter（必須）

raid=<c| r0| r1| r1c| r5| r6| r10| r50| r60> パラメータ（必須）

size=<数値 | 最大 | 最小> パラメータ（必須）

pdisk=<connector:targetID,connector:targetID,.....> パラメータ（必須）

stripesize=< 2kb| 4kb| 8kb| 16kb| 32kb| 64kb| 128kb>] パラメータ（オプション）

[cachepolicy=<d | c>] パラメータ（オプション）

[readpolicy=<ra| nra| ara| rc| nrc>] パラメータ（オプション）

[writepolicy=<wb| wt| wc| nwc | fwb>] パラメータ（オプション）

[name=<文字列>] パラメータ（オプション）

[spanlength=<n>] パラメータ（オプション）

controller=id パラメータ（必須）

omreport storage controller コマンドによって報告されるコントローラ ID を指定します。例:

```
controller=2
```

raid=<c| r0| r1| r1c| r5| r6| r10| r50| r60> パラメータ（必須）

仮想ディスクの RAID レベルまたは連結を指定するには、**raid=<c| r0| r1| r1c| r5| r6 | r10| r50| r60>** パラメータを使用します。サポートされるRAID レベルはコントローラによって異なります。コントローラがサポートしている RAID レベルと、RAID レベルおよび連結の一般的な情報については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。 表 6-18以下の表に、各 RAID レベルおよび連結についての raid=n パラメータの指定方法を示します。

表 6-18 RAID レベルと連結

RAID レベルまたは連結	raid=n パラメータの指定
RAID-0	raid=r0
RAID-1	raid=r1
RAID-5	raid=r5
RAID-6	raid=r6
RAID-10	raid=r10
RAID-50	raid=r50
RAID-60	raid=r60
RAID-1-連結	raid=r1c
連結	raid=c

size=<数値 | 最大 | 最小> パラメータ（必須）

表 6-19 では、**size=<数値 | 最大 | 最小>** パラメータを指定する方法については説明します。

表 6-19 Size パラメータ

size=<数値	最大	最小> パラメータ仕様	説明
size=<n>	仮想ディスクの特定なサイズを指示するには、この仕様を使用します。仮想ディスクサイズは b（バイト）、m（メガバイト）、または g（ギガバイト）で指定します。たとえば、**size=500m** は、仮想ディスクが 500MB という意味です。
size=max	可能な最大サイズの仮想ディスクを作成するには、**size=max** と指定します。RAID 50 の仮想ディスクを作成する場合、このパラメータは **size=max** と指定する必要があります。
size=min	可能な最小サイズの仮想ディスクを作成するには、**size=min** と指定します。

PDISKID=<connector:enclosureID:portID | connector:targetID>

仮想ディスクに含める物理ディスクを指定するには、このパラメータを使用します。

仮想ディスクを再構成する場合は、再構成後の仮想ディスクに含める物理ディスクすべてを指定する必要があります。物理ディスクの指定は、元の仮想ディスクからそのまま再構成後の仮想ディスクに残る物理ディスクと、再構成後の仮想ディスクに新しく追加された新しい物理ディスクに適用されます。コントローラによっては、仮想ディスクから物理ディスクを削除できます。この場合、削除する物理ディスクは指定しません。

pdisk=<PDISKID> パラメーターは、**connector:enclosureID:portID または connector:targetID** のどちらかで指定される物理ディスクを指します。

```
stripesize=< 2kb| 4kb| 8kb| 16kb| 32kb| 64kb| 128kb>] Parameter（オプション）
```

サポートされるストライプサイズはコントローラによって異なります。コントローラでサポートされるストライプサイズの詳細については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。ストライプサイズはすべてキロバイトで指定します。たとえば、ストライプサイズに 128KB を指定する場合は、次のように入力します。

```
stripesize=128kb
```

[cachepolicy=<d | c>] パラメータ（オプション）

サポートされるキャッシュポリシーはコントローラによって異なります。 表 6-20では、各キャッシュ ポリシーの **[cachepolicy=d | c]** パラメータの指定方法を示します。

表 6-20 キャッシュポリシーのパラメータ

キャッシュポリシー	cachepolicy=d | c パラメータ指定
ダイレクト I/O	cachepolicy=d
キャッシュ I/O	cachepolicy=c

[diskcachepolicy=<無効 | 有効>] パラメータ（オプション）

サポートされるキャッシュポリシーはコントローラによって異なります。以下の表に、各キャッシュポリシーの **[diskcachepolicy=<無効 | 有効>]** パラメータの指定方法を示します。

ディスクキャッシュポリシー	diskcachepolicy=無効 | 有効 パラメータ指定
無効	diskcachepolicy=無効
有効	diskcachepolicy=有効

[readpolicy=<ra| nra| ara| rc| nrc>] パラメータ（オプション）

サポートされる読み取りポリシーはコントローラによって異なります。 表 6-21では、各読み取りポリシーの **[readpolicy=ra| nra| ara| rc| nrc]** パラメータの指定方法を示します。

表 6-21 読み取りポリシーのパラメータ

読み取りポリシー	readpolicy=ra | ara | nra | rc | nrc パラメータ指定
先読み	readpolicy=ra
適応先読み	readpolicy=ara
先読みなし	readpolicy=nra
読み取りキャッシュ	readpolicy=rc
読み取りキャッシュなし	readpolicy=nrc

[writepolicy=<wb| wt| wc| nwc>] パラメータ（オプション）

サポートされる書き込みポリシーはコントローラによって異なります。 表 6-22では、各書き込みポリシーの **[writepolicy=<wb| wt| wc| nwc | fwb>]** パラメータの指定方法を示します。

表 6-22 書き込み ポリシーのパラメータ

書き込みポリシー	writepolicy=wb | wt | wc | fwb | nwc パラメーター指定
ライトバックのキャッシュ	writepolicy=wb

ライトスルーキャッシュ	writepolicy=wt
書き込みキャッシュ	writepolicy=wc
ライトバックの強制	writepolicy=fwb
書き込みキャッシュなし	writepolicy=nwc

[name=<文字列>] パラメータ（オプション）

仮想ディスクの名前を指定するには、このパラメータを使用します。たとえば、次のとおりです。

```
name=VirtualDisk1
```

メモ： CERC SATA 1.5/2s コントローラの場合は、仮想ディスクの名前を指定できません。仮想ディスクはデフォルト名で作成されます。

[spanlength=<n>] パラメータ（RAID 50 と RAID 60 では必須、RAID 10 では任意選択）

各ストライプに含まれる物理ディスクの数を指定するには、このパラメータを使用します。 このパラメータは RAID 50 の仮想ディスクのみに適用します。RAID 50 の仮想ディスクを作成していない場合は、このパラメータを指定しないでください。たとえば、次のとおりです。

```
spanlength=3
```

ファームウェアバージョン 6.1 以降を持つ SAS コントローラ上の RAID 10 では、spanlength は任意選択です。また、spanlength をそれぞれ 32 台の物理ディスクを持つ最大 8 スパンまでの偶数で指定できるようになりました。たとえば、次のとおりです。

```
omconfig storage controller action=createvdisk controller=1 raid=r10 size=min pdisk=1:1:0,1:1:1,1:1:3,1:1:4,1:1:6,1:1:7,1:1:8,1:1:9
spanlength=4
```

構文例

たとえば、PERC 3/QC コントローラに RAID 5 仮想ディスクを作成したいとします。このコントローラでサポートされる読み取り、書き込み、キャッシュポリシーの詳細については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。たとえば、次の読み取り、書き取りおよびキャッシュポリシーで仮想ディスクを作成するには、

- 先読み
- ライトスルーキャッシング
- キャッシュ I/O

仮想ディスクは 500MB で、ストライプサイズは 16KB になります。仮想ディスクの名前は **vd1** で、コントローラ 1 のコネクタ 0 に置かれます。仮想ディスクは RAID 5 なので、少なくとも 3 個の物理ディスクが必要です。この例では、4 個の物理ディスクを指定します。これらは物理ディスク 0 から 3 です。

この例で説明した仮想ディスクを作成するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=createvdisk controller=1 raid=r5 size=500m pdisk=0:0,0:1,0:2,0:3 stripesize=16kb cachepolicy=c
readpolicy=ra writepolicy=wt
```

コントローラ、RAID レベル、仮想ディスクのサイズ、物理ディスクの選択のためのパラメータのみ指定する必要があります。その他の指定していないパラメータについては、Storage Management によってデフォルト値をが設定されます。

omconfig コントローラ再構成率の設定

コントローラ再構成率を設定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=setrebuildrate controller=id rate=<0 ～ 100>
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

コントローラ 1 で再構成率を 50 に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=setrebuildrate controller=1 rate=50
```

omconfig バックグラウンドの初期化率の設定

バックグラウンドの初期化率を設定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=setbgirate controller=id rate=<0 ～ 100>
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

コントローラ 1 でバックグラウンドの初期化率を 50 に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=setbgirate controller=1 rate=50
```

omconfig 再構築率の設定

再構築率を設定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=setreconstructrate controller=id

rate=<0 ～ 100>
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

コントローラ 1 で再構築率を 50 に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=setreconstructrate controller=1

rate=50
```

omconfig 整合性チェック率の設定

整合性チェック率を設定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=setcheckconsistencyrate controller=id

rate=<0 ～ 100>
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

コントローラ 1 で整合性チェック率を 50 に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=setcheckconsistencyrate controller=1

rate=50
```

omconfig コントローラログのエクスポート

コントローラのログをテキストファイルにエクスポートするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。エクスポートされたログファイル の詳細については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=exportlog controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

コントローラ 1 のログをエクスポートするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=exportlog controller=1
```

デフォルトでは、ログファイルは、Microsoft Windows システム（使用されている Windows バージョンに基づく） の場合には **C:\WINNT** または **C:\Windows** へ、またすべての Linux システムでは **/var/log** へエクスポートされます。

ログファイル名はコントローラによって異なります。ログファイルは**afa_<*mmdd*>.log** または **lsi_<*mmdd*>.log** ここで、<***mmdd***> は 月と曜日です。コントローラログファイルの詳細については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。

メモ： PERC 2/SC、2/DC、4/IM、CERC ATA 100/4ch、CERC SATA 1.5/2s の各コントローラでは export log file コマンドはサポートされていません。

omconfig 外部設定のインポート

次の **omconfig** コマンド構文を使用すると、コントローラに新たに連結された物理ディスク上に存在するすべての仮想ディスクをインポートできます。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=importforeignconfig controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

メモ： このコマンドはファームウェアバージョン 5.0.*x* のみにサポートされています。

構文例

コントローラ 1 の外部設定をインポートにするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=importforeignconfig controller=1
```

omconfig 外部設定のインポート/回復

次の **omconfig** コマンド構文を使用すると、コントローラに新たに連結された物理ディスク上に存在するすべての仮想ディスクをインポートおよび回復できます。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=importrecoverforeignconfig controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

メモ： このコマンドはファームウェアバージョン 5.1.1.のみにサポートされています。

構文例

コントローラ 1 の外部設定をインポートおよび回復するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=importrecoverforeignconfig controller=1
```

omconfig 外部設定のクリア

次の **omconfig** コマンド構文を使用すると、コントローラに新たに連結された物理ディスク上に存在するすべての仮想ディスをクリアまたは削除できます。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=clearforeignconfig controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

コントローラ 1 の外部設定をクリアにするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=clearforeignconfig controller=1
```

omconfig 物理ディスク電源管理

ホットスペアと構成されていないディスクをスピンダウンして、コントローラ内の物理ディスクの電源を管理するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=setpdiskpwrmanagement spindownunconfigureddrives=<有効/無効> spindownhotspares=<有効/無効>
spindowntimeinterval=<30～1440 分> controller=id
```

構文例

構成されていないドライブ、または 30 分間も使用されていないホットスペアをスピンダウンするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=setpdiskpwrmanagement spindownunconfigureddrives=enabled spindownhotspares=enabled
spindowntimeinterval=30 controller=1
```

omconfig 巡回読み取りモードの設定

次の **omconfig** コマンド構文を使用すると、コントローラに巡回読み取りモードを設定できます。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=setpatrolreadmode controller=id

mode=manual|auto|disable
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

コントローラ 1 で巡回読み取りを手動モードに設定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=setpatrolreadmode controller=1

mode=manual
```

omconfig 巡回読み取りの開始

次の **omconfig** コマンド構文を使用すると、コントローラで巡回読み取りタスクを開始できます。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=startpatrolread controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

コントローラ 1 で巡回読み取りタスクを開始するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=startpatrolread controller=1
```

メモ： 巡回読み取りを開始可能にするには、現在の巡回読み取りモードを手動に設定する必要があります。

omconfig 巡回読み取りの停止

次の **omconfig** コマンド構文を使用すると、コントローラで巡回読み取りタスクを停止できます。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=stoppatrolread controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

コントローラ 1 で巡回読み取りタスクを停止するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=stoppatrolread controller=1
```

メモ： 巡回読み取りを停止可能にするには、現在の巡回読み取りモードを手動に設定する必要があります。

omconfig コントローラプロパティの変更

次の **omconfig** コマンドを使って、以下のコントローラプロパティをすべてまたは個々に変更できます。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=setchangecontrollerproperties controller=<id> bgirate=<率> reconstructrate=<率> checkconsistencyrate=<
率> rebuildrate=<率> clearredundantpath=clear abortcheckconsistencyonerror=<有効/無効> loadbalance=<自動/無効>
allowrevertiblehotspareandreplacemember=<有効/無効> autoreplacememberonpredictivefailure=<有効/無効> persistenthotspare=<有効/無効>
```

構文例

ホットスペアの復帰を有効にし、メンバー交換操作を行うには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=setchangecontrollerproperties allowrevertiblehotspare andreplacemember=enabled controller=1
```

omconfig ストレージ仮想ディスク

次の **omconfig storage** コマンド構文を使って、仮想ディスクの一部を別の物理ディスクで置き換えることができます。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=replacememberdisk controller=id vdisk=id source=<PDISKID> destination=<PDISKID>
```

PDISKID は次のように指定します。

```
pdisk=connector:enclosureID:portID
```

構文例

物理ディスク（PD1）を別の物理ディスク（PD2）で置き換えるには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=replacememberdisk controller=0 vdisk=1 source=PD1 destination=PD2
```

omconfig ストレージコントローラ

次の **omconfig storage** コマンド構文を使って、コントローラ上の保存キャッシュを破棄できます。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=discardpreservedcache controller=id force=enabled/disabled
```

force=enabled に設定すると、コントローラが外部またはオフラインの仮想ディスクを検出するかどうかにかかわらず、キャッシュが破棄されます。

構文例

保存キャッシュを破棄するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=discardpreservedcache controller=1 force=enabled
```

注意: 保存キャッシュを破棄するとデータが失われる可能性があります。デルでは、force=disabled オプションを使ってこのコマンドを実行することを推奨しています。

omconfig 仮想ディスクのコマンド

以下の項では、仮想ディスクタスクを実行するために必要な **omconfig** コマンドについて説明します。

注意: omconfig storage vdisk action=deletevdisk controller=id vdisk=id コマンドは仮想ディスクを削除します。仮想ディスクを削除すると、仮想ディスク上のファイルシステムやボリュームをはじめ、すべての情報が破壊されます。

表 6-23 omconfig 仮想ディスク管理のコマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）	オプション「名前=値」のペア
omconfig storage vdisk	
	action=checkconsistency controller=id vdisk=id
	action=cancelcheckconsistency controller=id vdisk=id
	action=pausecheckconsistency controller=id vdisk=id
	action=resumecheckconsistency controller=id vdisk=id
	action=blink controller=id vdisk=id
	action=unblink controller=id vdisk=id
	action=initialize controller=id vdisk=id
	action=fastinit controller=id vdisk=id [force=yes]
	action=slowinit controller=id vdisk=id [force=yes]
	action=cancelinitialize controller=id vdisk=id
	action=cancelbginitialize controller=id vdisk=id
	action=restoresegments controller=id vdisk=id
	action=splitmirror controller=id vdisk=id
	action=unmirror controller=id vdisk=id
	action=assigndedicatedhotspare controller=id vdisk=id pdisk=<PDISKID> assign=<はい | いいえ>
	action=deletevdisk controller=id vdisk=id [force=yes]
	action=format controller=id vdisk=id
	action=reconfigure controller=id vdisk=id raid=<c | r0 | r1 | r1c | r5 | r10> pdisk=<PDISKID> [size=<サイズ> vdcapacityexpansion=yes sizeinpercent=<1～100>]
	action=changepolicy controller=id vdisk=id [readpolicy=<ra | nra | ara | rc | nrc> | writepolicy=<wb | wt | wc | nwc | fwb> | cachepolicy=<d | c> **diskcachepolicy**=<有効|無効>]
	action=rename controller=id vdisk=id action=clearvdbadblocks controller=id vdisk=id
	action=replacememberdisk controller=id vdisk=id source=*<PDISKID>* destination=*<PDISKID>* action=securevd controller=id vdisk=id

omconfig 仮想ディスクの点滅

仮想ディスクに含まれる物理ディスクを点滅させるには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=blink controller=id vdisk=id
```

id は、omreport コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の物理ディスクを点滅させるには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=blink controller=1 vdisk=4
```

omconfig 仮想ディスクの点滅解除

仮想ディスクに含まれる物理ディスクを点滅解除するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=unblink controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の物理ディスクを点滅させるには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=unblink controller=1 vdisk=4
```

omconfig 仮想ディスクの初期化

仮想ディスクを初期化するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=initialize controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 の仮想ディスク 4 を初期化するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=initialize controller=1 vdisk=4
```

omconfig 仮想ディスクの初期化のキャンセル

仮想ディスクの初期化をキャンセルするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=cancelinitialize controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の初期化をキャンセルするには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=cancelinitialize controller=1 vdisk=4
```

omconfig 仮想ディスクの高速初期化

仮想ディスクを高速初期化するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

注意: システムまたはブートパーティションを削除しようとすると、警告メッセージが表示されることがあります。ただし、この警告メッセージは、常に生成されるわけではありません。このコマンドを使用して、システム、ブートパーティションまたはその他の重要なデータを削除しないようにしてください。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=fastinit controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

このコマンドによってシステムまたはブートパーティションが削除される場合は、警告メッセージが表示される場合があります。**force=yes** パラメータを使うと、この警告をオーバーライドできます。この場合、構文は次のようになります。

```
omconfig storage vdisk action=fastinit controller=id vdisk=id force=yes
```

構文例

コントローラ 1 の仮想ディスク 4 を高速初期化するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=fastinit controller=1 vdisk=4
```

omconfig 仮想ディスクの低速初期化

仮想ディスクを低速初期化するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

注意: システムまたはブートパーティションを削除しようとすると、警告メッセージが表示されることがあります。ただし、この警告メッセージは、常に生成されるわけではありません。このコマンドを使用して、システム、ブートパーティションまたはその他の重要なデータを削除しないようにしてください。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=slowinit controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

このコマンドによってシステムまたはブートパーティションが削除される場合は、警告メッセージが表示される場合があります。**force=yes** パラメータを使うと、この警告をオーバーライドできます。この場合、構文は次のようになります。

```
omconfig storage vdisk action=slowinit controller=id vdisk=id force=yes
```

構文例

コントローラ 1 の仮想ディスク 4 を低速初期化するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=slowinit controller=1 vdisk=4
```

omconfig バックグラウンドの初期化のキャンセル

仮想 ディスクのバックグラウンドの初期化処理をキャンセルするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=cancelbginitialize controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 の仮想ディスク 4 のバックグラウンドの初期化をキャンセルするには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=cancelbginitialize controller=1 vdisk=4
```

omconfig 無効セグメントの復元

破壊された RAID 5 仮想ディスクからデータを回復するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。このタスクは、RAID5 仮想ディスクに含まれる物理ディスクの破壊された部分からデータの再構成を試みます。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=restoresegments controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 の仮想ディスク 4 のセグメントを復元するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=restoresegments controller=1 vdisk=4
```

omconfig ミラー分割

RAID 1、RAID 1連結、または RAID 10 の仮想ディスクとして設定されていたミラーデータを分割するには、**omconfig** コマンド構文を使用します。RAID-1または RAID-1 連結ミラーを分割すると、2 台の連結非冗長仮想ディスクができあがります。RAID-10 ミラーを分割すると、2 組の RAID-0（ストライプ）非冗長仮想ディスクができあがります。この操作でデータが失われることはありません。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=splitmirror controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 の仮想ディスク 4 のミラー分割を開始するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=splitmirror controller=1 vdisk=4
```

omconfig ミラー解除

ミラーデータを分割してミラーの半分を空き容量として復元するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。RAID-1またはRAID-1- 仮想ディスクを非ミラーにすると、単一の非冗長連結仮想ディスクができあがります。RAID-10 仮想ディスクを非ミラーにすると、単一の非冗長 RAID-0（ストライプ）仮想ディスクができあがります。この操作でデータが失われることはありません。ミラー解除の詳細については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=unmirror controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 の仮想ディスク 4 をミラー解除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=unmirror controller=1 vdisk=4
```

omconfig 専用ホットスペアの割り当て

1 つまたは複数の物理ディスクを専用ホットスペアとして仮想ディスクに割り当てるには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

メモ： PERC 2/SC、2/DC および CERC SATA 1.5/2s の各コントローラは専用ホットスペアをサポートしていません。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=assigndedicatedhotspare controller=id vdisk=id pdisk=<物理ディスク ID> assign=yes
```

id はコントローラ ID と仮想ディスク ID です。**<物理ディスク>** 変数は、物理ディスクを指定します。

コントローラ、仮想ディスク、および物理ディスクの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** そして **omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクと物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 上の物理ディスク 3 を、仮想ディスク 4 の専用ホットスペアとして割り当てています。シリアルアタッチド SCSI（SAS）コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 にあります

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

この例で説明された専用ホットスペアを割り当てるには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=assigndedicatedhotspare controller=1 vdisk=4 pdisk=0:3 assign=yes
```

以下は *SAS* コントローラの例です。

この例で説明された専用ホットスペアを割り当てるには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=assigndedicatedhotspare controller=1 vdisk=4 pdisk=0:2:3 assign=yes
```

omconfig 専用ホットスペアの割り当て解除

専用ホットスペアとして仮想ディスクに割り当てられている 1 つまたは複数の物理ディスクを割り当て解除するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=assigndedicatedhotspare controller=id vdisk=id pdisk=<物理ディスク ID> assign=no
```

id はコントローラ ID と仮想ディスク ID です。**<物理ディスク>** 変数は、物理ディスクを指定します。

コントローラ、仮想ディスク、および物理ディスクの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** そして **omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクと物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 上の物理ディスク 3 を、仮想ディスク 4 の専用ホットスペアとして割り当て解除しています。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

この例で説明された専用ホットスペアの割り当てを解除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=assigndedicatedhotspare controller=1 vdisk=4 pdisk=0:3 assign=no
```

以下は *SAS* コントローラの例です。

この例で説明された専用ホットスペアの割り当てを解除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=assigndedicatedhotspare controller=1 vdisk=4 pdisk=0:2:3 assign=no
```

omconfig 整合性チェック

仮想ディスクの整合性確認を開始するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。整合性確認タスクは、仮想ディスクの冗長データを確認します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=checkconsistency controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の整合性確認を実行するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=checkconsistency controller=1 vdisk=4
```

omconfig 整合性チェックのキャンセル

整合性チェックの処理中にキャンセルするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=cancelcheckconsistency controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の整合性確認をキャンセルするには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=cancelcheckconsistency controller=1 vdisk=4
```

omconfig 整合性チェックの一時停止

整合性チェックの処理中を一時停止するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。整合性チェックの一時停止の詳細については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=pausecheckconsistency controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の整合性確認を一時停止するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=pausecheckconsistency controller=1 vdisk=4
```

omconfig 整合性チェックの再開

整合性チェックを一時停止した後で再開するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=resumecheckconsistency controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の整合性確認を再開するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=resumecheckconsistency controller=1 vdisk=4
```

omconfig 仮想ディスクの削除

仮想ディスクを削除するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

注意: 仮想ディスクを削除すると、仮想ディスク上のファイルシステムやボリュームをはじめ、すべての情報が破壊されます。システムまたはブートパーティションを削除しようとすると、警告メッセージが表示されることがあります。ただし、この警告メッセージは、常に生成されるわけではありません。このコマンドを使用して、システム、ブートパーティションまたはその他の重要なデータを削除しないようにしてください。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=deletevdisk controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

このコマンドによってシステムまたはブートパーティションが削除される場合は、警告メッセージが表示される場合があります。**force=yes** パラメータを使うと、この警告をオーバーライドできます。この場合、構文は次のようになります。

```
omconfig storage vdisk action=deletevdisk controller=id vdisk=id force=yes
```

構文例

コントローラ 1 の仮想ディスク 4 を削除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=deletevdisk controller=1 vdisk=4
```

omconfig 仮想ディスクのフォーマット

仮想ディスクをフォーマットするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=format controller=id vdisk=id
```

ここで、*id* は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 の仮想ディスク 4 をフォーマットするには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=format controller=1 vdisk=4
```

omconfig 仮想ディスクの再設定

仮想ディスクの RAID レベルを変更したり、物理ディスクの追加または空き容量を使用することでディスクのサイズを増やしたりと、仮想ディスクを再設定できます。コントローラによっては、物理ディスクを削除することもできます。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=reconfigure controller=id vdisk=id raid=<c| r0| r1| r1c| r5| r6| r10> pdisk=<PDISK> [size=<サイズ>
vdcapacityexpansion=yes sizeinpercent=<1～100>]
```

再設定の構文例

仮想ディスク 4 を 800 MB のサイズに再設定するには、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある RAID 5 と物理ディスク 0 から 3 を使用します。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

この例では、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=reconfigure controller=1 vdisk=4 raid=r5 size=800m pdisk=0:0,0:1,0:2,0:3
```

以下は *SAS* コントローラの例です。

この例では、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=reconfigure controller=1 vdisk=4 raid=r5 pdisk=0:2:0,0:2:1,0:2:2,0:2:3
```

サイズ変更の構文例

空き容量を使用して仮想ディスクのサイズを 20% 増加するには、RAID-5 とコントローラ 1 のコネクタ 0 上の物理ディスク 0～3 を使用します。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

この例では、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=reconfigure controller=1 vdisk=4 raid=r5 pdisk=0:2:0,0:2:1,0:2:2,0:2:3 vdcapacityexpansion=yes
sizeinpercent=20
```

メモ： **vdcapacityexpansion** パラメータは、PERC H700 および PERC H800 コントローラでのみ、サポートされています。**vdcapacityexpansion=yes** と設定する場合、**sizeinpercent** を指定します。**vdcapacityexpansion** を設定しない場合、**size** を指定します。

omconfig 仮想ディスクポリシーの変更

仮想ディスクの読み取り、書き込み、またはキャッシュのポリシーを変更するには、次の**omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=changepolicy controller=id vdisk=id [diskcachepolicy=<有効|無効> | readpolicy=<ra| nra| ara| rc|nrc> |
writepolicy=<wb| wt| wc| nwc> | fwb> cachepolicy=<d | c>]
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

コントローラ固有のディスクキャッシュ、読み取り、書き込み、キャッシュポリシーの詳細については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。**omconfig** コマンドを使ってこれらのパラメータを指定する方法については、以下を参照してください 。

- **[readpolicy=<ra| nra| ara| rc| nrc>]** パラメータ（オプション）
- **[writepolicy=<wb| wt| wc| nwc | fwb>]** パラメータ（オプション）
- **[cachepolicy=<d | c>]** パラメータ（オプション）
- **[diskcachepolicy=<有効|無効>]** パラメータ（オプション）

構文例

コントローラ 1の仮想ディスク 4 の読み取りポリシーを先読みなしに変更するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=changepolicy controller=1 vdisk=4 readpolicy=nra
```

omconfig 仮想ディスクの名前の変更

仮想ディスクの名前を変更するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

メモ： CERC SATA 1.5/2s コントローラでは、仮想ディスクのデフォルト名を変更できません。

完全な構文

```
action=rename controller=id vdisk=id name=<string>
```

ここで、*id* は**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID、<文字列> は 仮想ディスクの新しい名前です。コントローラ ID と仮想ディスク ID の値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の名前を vd4 に変更するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=rename controller=1 vdisk=4 name=vd4
```

omconfig による仮想ディスクの不良ブロックのクリア

仮想ディスクの不良ブロックをクリアするには、**omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
action=clearvdbadblocks controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。コントローラ ID と仮想ディスク ID の値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の不良ブロックをクリアするには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=clearvdbadblocks controller=1 vdisk=4
```

---

omconfig 物理ディスクのコマンド

以下の項では、物理ディスクタスクを実行するために必要な **omconfig** コマンドについて説明します。

表 6-24 omconfig 物理ディスクのコマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）	オプション「名前=値」のペア
omconfig storage pdisk	
	action=blink controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=unblink controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=remove controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=initialize controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=offline controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=online controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=assignglobalhotspare controller=id pdisk=<物理ディスク ID> assign=<はい|いいえ>
	action=rebuild controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=cancelrebuild controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=removedeadsegments controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=clear controller=id pdisk=<物理ディスク ID>

	action=cancelclear controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=cancelreplacemember controller=id pdisk=<物理ディスク ID> action=instantsecureerase controller=id pdisk=<PDISKID>

omconfig 物理ディスクの点滅

コントローラに接続している 1 つまたは複数の物理ディスクのライト（発光ダイオード、すなわち LED ディスプレイ）を点滅させることができます。1 つまたは複数の物理ディスクを点滅させるには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
action=blink controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。**<物理ディスク>** 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 0 を点滅したいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクを点滅させるには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=blink controller=1 pdisk=0:0
```

以下は *SAS* コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクを点滅させるには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=blink controller=1 pdisk=0:2:0
```

omconfig 物理ディスクの点滅解除

コントローラに接続している 1 つまたは複数の物理ディスクのライト（発光ダイオード、すなわち LED ディスプレイ）を点滅解除することができます。1 つまたは複数の物理ディスクを点滅解除するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=unblink controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。**<物理ディスク>** 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 0 を点滅解除したいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクの点滅を解除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=unblink controller=1 pdisk=0:0
```

以下は *SAS* コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクの点滅を解除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=unblink controller=1 pdisk=0:2:0
```

omconfig 物理ディスクの削除の準備

物理ディスクの削除を準備するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=remove controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。**<物理ディスク>** 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 3 の削除の準備をしたいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクの削除を準備するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=remove controller=1 pdisk=0:3
```

以下は *SAS* コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクの削除を準備するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=remove controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig 物理ディスクの初期化

物理ディスクを初期化するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=initialize controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。**<物理ディスク>** 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 3 を初期化したいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクを初期化するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=initialize controller=1 pdisk=0:3
```

以下は *SAS* コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクを初期化するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=initialize controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig 物理ディスクのオフライン化

物理ディスクをオフライン化するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=offline controller=id pdisk=connectorID:targetID
```

id は**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID、connectorID:targetID はコネクタ番号と物理ディスク番号です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 のコネクタ 0 の物理ディスク 3 をオフライン化するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=offline controller=1 pdisk=0:3
```

omconfig 物理ディスクのオフライン化

物理ディスクをオフライン化するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=offline controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。**<物理ディスク>** 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 3 をオフライン化したいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクをオフライン化するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=offline controller=1 pdisk=0:3
```

以下は *SAS* コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクをオフライン化するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=offline controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig 物理ディスクのオンライン化

オフラインの物理ディスクをオンラインに戻すには、以下の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=online controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。**<物理ディスク>** 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 3 をオンラインに戻したいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクをオンラインに戻すには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=online controller=1 pdisk=0:3
```

以下は *SAS* コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクをオンラインに戻すには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=online controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig グローバルホットスペアの割り当て

物理ディスクをグローバルホットスペアに割り当てるには、以下の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=assignglobalhotspare controller=id pdisk=<物理ディスク ID> assign=yes
```

id はコントローラ ID です。**<物理ディスク>** 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 の物理ディスク 3 をグローバルホットスペアとして割り当てたいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクをグローバルホットスペアとして割り当てるには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=assignglobalhotspare controller=1 pdisk=0:3 assign=yes
```

以下は *SAS* コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクをグローバルホットスペアとして割り当てるには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=assignglobalhotspare controller=1 pdisk=0:2:3 assign=yes
```

omconfig グローバルホットスペアの割り当て解除

物理ディスクをグローバルホットスペアに割り当て解除するには、以下の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=assignglobalhotspare controller=id pdisk=<物理ディスク ID> assign=no
```

id はコントローラ ID です。**<物理ディスク>** 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 の物理ディスク 3 をグローバルホットスペアとして割り当て解除したいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクのグローバルホットスペアとしての割り当てを解除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=assignglobalhotspare controller=1 pdisk=0:3 assign=no
```

以下は *SAS* コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクのグローバルホットスペアとしての割り当てを解除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=assignglobalhotspare controller=1 pdisk=0:2:3 assign=no
```

omconfig 物理ディスクの再構成

障害が発生した物理ディスクを再構成するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。ディスクの再構成には、数時間かかることがあります。再構成をキャンセルする必要がある場合は、**再構成のキャンセル** タスクを使用します。物理ディスクの再構成の詳細については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=rebuild controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。**<物理ディスク>** 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 3 を再構成したいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクを再構成するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=rebuild controller=1 pdisk=0:3
```

以下は *SAS* コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクを再構成するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=rebuild controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig 物理ディスク再構成のキャンセル

進行中の再構成をキャンセルするには、次の **omconfig** コマンドを使用します。再構成をキャンセルした場合、仮想ディスクは状態が低下したままになります。物理ディスクの再構成のキャンセルの詳細については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=cancelrebuild controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。**<物理ディスク>** 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している

物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 3 の再構成をキャンセルしたいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクの再構成をキャンセルするには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=cancelrebuild controller=1 pdisk=0:3
```

以下は *SAS* コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクの再構成をキャンセルするには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=cancelrebuild controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig 無効セグメントの削除

使用できないディスクスペースを回復するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。無効セグメントの削除については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=removedeadsegments controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。**<物理ディスク>** 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 の物理ディスク 3 の無効なディスクセグメントを削除したいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクの無効なセグメントを削除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=removedeadsegments controller=1 pdisk=0:3
```

以下は *SAS* コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクの無効なセグメントを削除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=removedeadsegments controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig 物理ディスクのクリア

次の **omconfig** コマンドを使用すると、物理ディスクからデータまたは設定をクリアできます。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=clear controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。**<物理ディスク>** 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 3 をクリアしたいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は SAS コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクをクリアするには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=clear controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig 物理ディスククリアのキャンセル

次の **omconfig** コマンドを使用して、物理ディスクで進行中のクリア操作をキャンセルできます。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=cancelclear controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。**<物理ディスク>** 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 3 のクリアをキャンセルしたいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は SAS コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクのクリアをキャンセルするには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=cancelclear controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig メンバー交換のキャンセル

メンバー交換操作をキャンセルするには、次の **omconfig** コマンドを使用します。

完全な構文

```
action=cancelreplacemember controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id は **omreport** コマンドで報告された物理ディスク ID です。

構文例

コントローラ 0 に接続されているディスク 0:0:1 上でのメンバー交換操作をキャンセルするには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=cancelreplacemember controller=0 pdisk=0:0:1
```

---

omconfig バッテリーのコマンド

以下の項では、バッテリーのタスクを実行するために必要な **omconfig** コマンド構文について説明します。

表 6-25 omconfig バッテリーのコマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）	オプション「名前=値」のペア

omconfig ストレージバッテリー	
	action=recondition controller=id battery=id action=startlearn controller=id battery=id action=delaylearn controller=id battery=id days=d hours=h

omconfig バッテリーの修整

コントローラのバッテリーを修整するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。バッテリーの情報および調整については、*Dell OpenManage* オンラインヘルプ を参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage battery action=recondition controller=id battery=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID およびバッテリーID です。この値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラの ID を表示してから、**omreport storage battery controller=ID** と入力し、コントローラのバッテリーの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 のバッテリーを修整するには、次のように入力します。

```
omconfig storage battery action=recondition controller=1 battery=0
```

omconfig バッテリー評価サイクルの開始

次の **omconfig** コマンドを使用して、バッテリー評価サイクルを開始できます。

完全な構文

```
omconfig storage battery action=startlearn controller=id battery=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID およびバッテリーID です。この値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラの ID を表示してから、**omreport storage battery controller=id** と入力し、コントローラのバッテリーの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 で評価サイクルを開始するには、次のように入力します。

```
omconfig storage battery action=startlearn controller=1 battery=0
```

omconfig バッテリー評価サイクルの遅延

次の **omconfig** コマンドを使用して、指定された期間、バッテリー評価サイクルを遅延できます。バッテリー評価サイクルは、最高 7 日間、つまり 168 時間、遅延できます。

完全な構文

```
omconfig storage battery action=delaylearn controller=id battery=id

days=d hours=h
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID およびバッテリーID です。この値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラの ID を表示してから、**omreport storage battery controller=id** と入力し、コントローラのバッテリーの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 で評価サイクルを 3 日と 12 時間遅延させるには、次のように入力します。

```
omconfig storage battery action=delaylearn controller=1 battery=0
```

```
days=3 hours=12
```

---

omconfig コネクタコマンド

以下の項では、コネクタのタスクを実行するために必要な **omconfig** コマンド構文について説明します。

表 6-26 omconfig コネクタコマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）	オプション「名前=値」のペア
omconfig storage connector	
	action=rescan controller=id connector=id

omconfig コネクタの再スキャン

コントローラコネクタを再スキャンするには、次の **omconfig** コマンドを使用します。このコマンドは、コントローラのすべてのコネクタを再スキャンするので、コントローラの再スキャンを実行するのと同じです。

メモ： このコマンドは SAS コントローラではサポートされていません。

完全な構文

```
omconfig storage connector action=rescan controller=id connector=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID とコネクタ ID です。これらの値を取得するには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage connector controller=ID** と入力し、コントローラに接続しているコネクタの ID を表示します。

構文例

コントローラ 1 のコネクタ 2 を再スキャンするには、次のように入力します。

```
omconfig storage connector action=rescan controller=1 connector=2
```

---

omconfig エンクロージャのコマンド

以下の項では、エンクロージャタスクを実行するために必要な **omconfig** コマンドについて説明します。

表 6-27 omconfig エンクロージャのコマンド

必要なコマンドレベル（1、2、3）	オプション「名前=値」のペア
omconfig storage enclosure	
	action=enablealarm controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>
	action=disablealarm controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>
	action=setassettag controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> assettag=<文字列>
	action=setassetname controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> assetname=<文字列>
	action=settempprobes controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> index=id minwarn=n maxwarn=n
	action=resettempprobes controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> index=id
	action=setalltempprobes controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> minwarn=n maxwarn=n
	action=resetalltempprobes controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>
	action=blink controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>

omconfig エンクロージャ警告を有効にする

エンクロージャ警告を有効にするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=enablealarm controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>
```

id はコントローラ ID です。**<エンクロージャ ID>** 変数は、エンクロージャを指定します。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

コントローラ 1 のコネクタ 2 に接続されているエンクロージャのアラームを有効にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=enablealarm controller=1 enclosure=2
```

以下は SAS コントローラの例です。

コントローラ 1 のコネクタ 1 に接続されているエンクロージャ 2 のアラームを有効にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=enablealarm controller=1 enclosure=1:2
```

omconfig エンクロージャ警告を無効にする

エンクロージャ警告を無効にするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=disablealarm controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>
```

id はコントローラ ID です。**<エンクロージャ ID>** 変数は、エンクロージャを指定します。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

コントローラ 1 のコネクタ 2 に接続されているエンクロージャのアラームを無効にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=disablealarm controller=1 enclosure=2
```

以下は SAS コントローラの例です。

コントローラ 1 のコネクタ 1 に接続されているエンクロージャ 2 のアラームを無効にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=disablealarm controller=1 enclosure=1:2
```

omconfig エンクロージャ管理タグの設定

エンクロージャの管理タグを指定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=setassettag controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> assettag=<文字列>
```

id はコントローラ ID です。**<エンクロージャ ID>** 変数は、エンクロージャを指定します。

この構文では、<文字列> はユーザー指定の英数字の文字列です。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

コントローラ 1 のコネクタ 2 に接続しているエンクロージャの資産タグを encl20 に指定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=setassettag controller=1 enclosure=2 assettag=encl20
```

以下は SAS コントローラの例です。

コントローラ 1 のコネクタ 1 に接続しているエンクロージャ 2 の資産タグを encl20 に指定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=setassettag controller=1 enclosure=1:2 assettag=encl20
```

omconfig エンクロージャ資産名の設定

エンクロージャの資産名を指定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=setassetname controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> assetname=<文字列>
```

id はコントローラ ID です。**<エンクロージャ ID>** 変数は、エンクロージャを指定します。

この構文では、<文字列> はユーザー指定の英数字の文字列です。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

コントローラ 1 のコネクタ 2 に接続しているエンクロージャの資産タグを encl43 に指定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=setassetname controller=1 enclosure=2 assetname=encl43
```

以下は SAS コントローラの例です。

コントローラ 1 のコネクタ 1 に接続しているエンクロージャ 2 の資産タグを encl43 に指定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=setassetname controller=1 enclosure=1:2 assetname=encl43
```

omconfig 温度プローブの設定しきい値の設定

指定した温度プローブの最小および最大の警告温度しきい値を設定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

メモ： このコマンドは SAS コントローラではサポートされていません。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=settempprobes controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> index=id minwarn=n maxwarn=n
```

id はコントローラ ID と温度プローブ ID です。**<エンクロージャ ID>** 変数は、エンクロージャを指定します。

この構文では、n はユーザー指定の温度の値（摂氏）です。

構文例

たとえば、温度プローブ 3 の最小および最大の警告しきい値を、摂氏 10 と 40° に設定したいとします。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

この例では、温度プローブ 3 はコントローラ 1 のコネクタ 2 に接続されたエンクロージャにあります。温度プローブのしきい値を摂氏 10 および 40° に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=settempprobes controller=1 enclosure=2 index=3 minwarn=10 maxwarn=40
```

omconfig 温度プローブしきい値のリセット

最小および最大の警告温度しきい値をデフォルトの値にリセットするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

メモ： このコマンドは SAS コントローラではサポートされていません。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=resettempprobes controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> index=id
```

id はコントローラ ID と温度プローブ ID です。**<エンクロージャ ID>** 変数は、エンクロージャを指定します。

構文例

たとえば、温度プローブ 3 のしきい値をデフォルト値にリセットしたいとします。

以下は *SCSI*、*SATA*、および *ATA* コントローラの例です。

この例では、温度プローブ 3 はコントローラ 1 のコネクタ 2 に接続されたエンクロージャにあります。温度プローブ 3 のしきい値をデフォルト値に リセットするには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=resettempprobes controller=1 enclosure=2 index=3
```

omconfig すべての温度プローブの設定しきい値の設定

エンクロージャ内のすべての温度プローブの最小および最大の警告温度しきい値を設定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

メモ： このコマンドは SCSI RAID コントローラではサポートされていません。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=setalltempprobes controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> minwarn=n maxwarn=n
```

id はコントローラ ID です。**<エンクロージャ ID>** 変数は、エンクロージャを指定します。

構文例

たとえば、すべての温度プローブの最小および最大の警告しきい値を、摂氏 10 と 40° に設定したいとします。

以下は *SAS* コントローラの例です。

この例では、温度プローブはコントローラ 1 のコネクタ 2 に接続されたエンクロージャ 3 にあります。すべての温度プローブのしきい値を摂氏 10 および 40° に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=setalltempprobes controller=1 enclosure=2:3 minwarn=10 maxwarn=40
```

omconfig すべての温度プローブしきい値のリセット

エンクロージャ内のすべての温度プローブの最小および最大の警告温度しきい値をデフォルト値にリセットするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

メモ： このコマンドは SCSI RAID コントローラではサポートされていません。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=resetalltempprobes controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>
```

id はコントローラ ID です。**<エンクロージャ ID>** 変数は、エンクロージャを指定します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 のエンクロージャ 2 のすべての温度プローブのしきい値をリセットしたいとします。

以下は *SAS* コントローラの例です。

この例では、温度プローブはコントローラ 1 のコネクタ 2 に接続されたエンクロージャ 3 にあります。すべての温度プローブのしきい値 を リセットするには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=resetalltempprobes controller=1 enclosure=2:3
```

omconfig 点滅

次の omconfig コマンドを使用すると、エンクロージャの 発光ダイオード（LED）を点滅できます。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=blink controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>
```

id はコントローラ ID です。**<エンクロージャ ID>** 変数は、エンクロージャを指定します。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

コントローラ 1 のコネクタ 2 に接続されているエンクロージャの LED を点滅させるには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=blink controller=1 enclosure=2
```

以下は SAS コントローラの例です。

コントローラ 1 のコネクタ 2 に接続されているエンクロージャ 3 の LED を点滅させるには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=blink controller=1 enclosure=2:3
```

目次ページに戻る